
天地百人神話

フジツボkunkun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天地百人神話

【Nコード】

N1105Y

【作者名】

フジツボkun

【あらすじ】

ピクシブにも投稿しています。

内容はちよっとグロい神話です。

インフェルノ（地獄）と呼ばれる絶望の蔓延する世界で苦痛にまみれた日々を送るサク。

サクは幼いころリエラという美しい者に出会い、彼に贈られた本の中の登場人物である『ゼロ』という男に恋し、ずっと逢いたいと願ってきた。

成長したサクにリビエラは、自分がサクを愛撫し、サクは目を閉じてその感触をゼロのものとして感じる、と言う。

サクが大人の女性となるまでその倒錯は続いていく。

リビエラが『ゼロ』としてではなく自分自身がサクに愛されたいと願ったとき、また、サクがリビエラを『ゼロ』として見れなくなつたときに、二人の時は終わりを告げる。

リビエラはサクに「ゼロに会いに行こう」と言う。

ゼロは『風の神』として神界に実在し、リビエラはそのゼロにサクを導くために遣わされていたのだった。

リビエラはサクを『グレイシス・グロリアス』と呼ばれる神界に送るために、長年愛撫してきたインフェルノのサクの身体を、破壊しなければなかった。

サクは神界のゼロの元に転生しゼロとの邂逅を果たすが・・・

第一話 飢えと渇きの宿命

「プロローグ」

女の前で男の肉体は破壊され、100の肉片となった。

その肉は破壊主の手で地獄に墮とされる。

女は男の肉片を追い、その肉に100度、恋をする。

かつて破壊主カイルは、泣きながら女に言った。

『ボクは自分が憎い。きみを愛し、すがらずにいられない自分が憎い。気が狂うほどの絶望の中にあっても、きみがいるだけで心は地獄から天国をも超えるところへ…。そこに希望などないというのに』

かつて男ゼロは、震えながら笑って女に言った。

『お前を愛しく想えば想うほど、オレはお前を喪失するんだ。愛しすぎてお前を失う恐怖しか見えなくなる。誓ってくれ。そばにいてくれ。』

お前がそばで生きている空気を永遠に感じさせていてくれ…!!』

女サクは何も語ることなく、ひたすら二人の作り出した運命に翻弄される。

この三名は誰ひとり自分の行く末を選ぶことはできなかった。全ての者が翻弄しているつもりで翻弄されていたからである。

サクは全ての女である。

ゼロは全ての男である。

カイルは全ての人間である。

これはその中であなただけの物語である。

「第一話 飢えと渇きの宿命」

> i 3 4 7 7 1 — 3 5 3 2 <

救われず、救いようのない者達が住む世界、インフェルノ。

ここに住む者達は輪廻者と呼ばれ、死んでも死んでもインフェルノに姿を変え、生まれ変わる。

人間のほかに動物、様々な種類の亜人種、妖精、そして謎に包まれた種族、魔人種などが暮らす。

忘れ去られたはるか昔の種族間の争いが元で、それぞれの種族が憎しみあって殺し合って今に至る。

今のこの世界の種族間の対立による殺し合いは日常茶飯事で、もはや習慣である。

地獄の地インフェルノと対比してグレイシス・グロリアスと呼ばれる神界がある。

そこに至れる輪廻者というのは、このどうしようもないインフェルノという世界で自分の心との凄絶な戦いに打ち勝った者だけである。

心の葛藤を超え、痛み、恐怖を超えた者だけが、死が命の終わりでなく輪廻の終わりとなる。

しかしその事実も今や事実ではなく伝説のようになり、後世へぼんやりとおとぎ話のように伝わる程度になっていた。

インフェルノのどこにでもあるような、誰にも見向きもされない名前もない村にサクは母と二人、住んでいた。

ある日の早朝、サクは呆然とした顔で裸足で外を歩いていた。

まだ薄暗く、季節は冬で、身を切るような寒さだった。

フラフラと歩くサクの服の、片側の肩の部分はちぎれ、片方の胸が見えていた。

半裸のサクの身体は傷だらけだった。

打撲に切り傷、やけどの跡。

心を病んだ母が、他愛もない理由でもう成人した娘の身体を、打ち、切りつけ、焼いた跡である。

虐待痕だった。

サクの着ている白い服には何カ所も、まだ乾いていない鮮血が点々とついていた。

サクは氷点下の寒さの中、震えてもいなければ、身体には鳥肌すら立っていなかった。

その心が感じている絶望が、全ての感覚を麻痺させていた。
> i 2 7 1 1 2 — 3 5 3 2 <

サクは手に一枚の古い紙切れを握りしめ、呪文のようにある者の名前を繰り返し唱えていた。

「ゼロ…ゼロ…ゼロ…」

森の中に入り、サクは力尽きたように前のめりに倒れた。

そしてそのまま持っていた紙切れを開いた。

そこには長い銀髪で金色の目をした美しい男の肖像が描かれていた。

「ゼロ…」

サクは肖像の額にキスをした。

「ゼロ、胸が痛い。心が苦しい。助けに来て。お願い、私を癒やして」

サクは倒れたままガチガチと歯を鳴らし、震えながらゼロの肖像画を胸に当てた。

ゼロという美しい男はこの世界には存在しない、とある物語に出てくる登場人物だった。

サクは幼い頃にその物語に出会い、一瞬でゼロに強烈な恋心を抱いた。

しかし、どんなにサクがゼロを求めても、ゼロは空想の中だけの存在だった。

そんなゼロを想うと、胸がただれるような悲しみと切なさで、サクは泣きそうになった。

「ゼロ：どうしてあなたは这个世界にいないの…？
こんなに…好きなのに……。あなたのいる世界に行きたい…そばに
いて…」

やおら、誰かがサクを抱き起こした。

そして肩を貸してサクと共に歩き出した。

ゼロ、ではない。

透き通った真っ白な肌に短い白い髪 of その者は、男と呼ぶには美し
すぎ、女と呼ぶにはやや骨っぽかった。

その者の緑の目は正面だけを見据え、サクを引っ張っていった。

サクもその者も、こういうのはいつものこととでも言うように、無
言で互いに寄り添い、進んだ。

「リビエラ：ゼロに会いたい…」

サクが力なく言った。

「分かっています」

リビエラが短く答えた。

リビエラはサクを湖のほとりまで連れてきた。

サクを丁寧に横たえ、リビエラはその服を脱がし始めた。

サクの胸が、下半身があらわになった。

サクは目を半眼に開き、力無くリビエラに裸にされる自分の身体を
眺めていた。

「サク、痛む傷はありますか？」

リビエラが無感情に聞いた。

「さっき…ママが…私がトイレに行こうとしたのに起こされたって怒って…私の身体の色んな所に…ブローチの針を刺した…。針が折れるほど強く…それで…」

リビエラがサクの目を優しく手でふさいだ。

リビエラは手のひらにサクの涙が流れる感触を感じた。

「サク、目を閉じて」

サクの涙をぬぐうように、リビエラはサクの目をふさいだ手を滑らせ、頬に触れた。

サクは目を閉じていた。

リビエラはサクの心臓の部分に手を当てた。

「サク、この手のひらを感じますか？」

リビエラはサクの肉体にゆっくり爪を立てていった。

次の瞬間、サクを諭すように言ったりリビエラの言葉は二人にとっての『呪文』だった。

「この手が今から、『ゼロ』としてあなたを愛撫する。
想像して。この手はもう私の手ではない。

あなたが目を閉じている間、あなたに触れる私の肉は全てゼロの肉だ。

私の唇は手は指先は、ゼロの唇であり手であり指先である。

ゼロの顔、髪、表情…全てを想い、私を通しゼロがあなたを愛しているのを感じなさい。決して目を開けないで」

目尻から涙がこぼれ、サクは再びゼロの名を呼んだ。

リビエラはゆっくりサクの下唇を噛み、その口腔を舌で愛撫した。

そしてその手で優しく愛おしむようにサクの首筋から胸を撫でた。

無感覚だったサクの身体が上気し、鳥肌が立ち始めた。

サクの中でゼロが動き出し、金色の目がサクを見つめ、冷たい手が、唇がサクに触れた。

サクは『ゼロ』を求め、目をつむったままその肉を自分の一部としたいかのように、『ゼロの首筋』を強く噛んだ。

リビエラの首筋から血が流れ、サクはその血を、母乳をすする赤子のように吞んだ。

リビエラは満足そうに微笑んだ。

その笑みは、歪んだサクへの愛で、猟奇的だった。

常軌を逸していたがいつものことだった。

リビエラがサクを愛撫し、サクにはゼロの肉体を想像させる。

しかしこの行為だけが幼い頃から傷つけられてきたサクを癒やした。

> i 2 7 1 2 0 — 3 5 3 2 <

初めてサクがリビエラに会ったのは三歳の時だった。

サクはよく森の中で一人で遊んでいた。

他の子ども達と遊びたいとも思ったが、母が嫌がった。

だからサクは幼いながら、その頃から他人を拒絶しなければならなかった。

そんな時、リビエラに会った。

リビエラはその時から、今の成人したサクという時と同じ大人の姿をしていた。

最初にリビエラが三歳のサクに名を名乗った直後にサクが聞いたのは「リビエラは男の人？ 女の人？」だった。

そのサクの質問にリビエラは無表情に、しかし優しく答えた。

「サクが好きな方でいい。私はどちらでもないから」

サクがその答えの意味が分かったかは定かではない。

しかしとりあえずサクはリビエラに言った。

「私は女の子で自分のこと『私』って言うよ。リビエラも『私』って言うから、じゃありビエラは女の子ね」

サクは嬉しそうにリビエラに笑った。

リビエラは感情のない目でサクを凝視した。

そして静かにサクに近づき、サクの服の肩の部分を少しずらした。

そこにはすでに、三歳のサクに母が与えた深い傷跡があった。

リビエラはサクにひざまずき、サクの頬に触れ、その唇にキスをした。

サクはその意味が分からず、無邪気な顔で不思議そうにリビエラを見た。

今はこの子は何も分からない。

しかし虐待は続いていき、この子が成長した時、それをどう感じるか…。

リビエラはサクを抱きしめた。

「サク、苦しい時いつでもこの森へ来なさい。私はいつでもここにいる。」

そう言ってリビエラはサクを放し、おもむろに一冊の本をサクに手渡した。

「サクにプレゼントだ。この本は私が書いたサクが主人公の物語です。」

まだ物語を理解はできないでしょう。でも絵だけでも楽しめるはずです」

サクは目を輝かせて本を受け取った。

「どんなお話なの？」

「サクと『ゼロ』っていう男が恋に落ちる話です。この人がゼロです。」

リビエラはページをめくり、ゼロの顔が載る場所をサクに見せた。

その顔を見た瞬間、サクの身体に不思議な感覚が突き抜けた。

まるで三歳のサクがその男の肉体の味を知っているかのように、下腹部が激しくうずいた。

リビエラはサクをじっと見ていた。

サクはゼロの顔から目が離せなかった。

「リビエラ」

「はい」

「私、この人が好き。この人の話、いっぱい聞きたい」

サクは少し震えながら、上気して言った。

その姿が醸し出すオーラは、もはや三歳の子どものものではなかった。

その時からサクとリビエラの交流が始まった。

幼いサクは嬉しかった。

悲しい時、楽しい時、いつもリビエラはゼロの話をしてくれた。

それから十年が過ぎ、サクが十四歳の時だった。

母の暴力は一向におさまる気配はなく、むしろ成長し、自分の心を確立しつつあるサクに対して、母は昔以上につらく当たった。

母の罵詈雑言と暴力に憔悴しきって、サクはいつものようにリビエラの所へ向かった。

その手には幼い頃からお守りとして持っていたゼロの絵が握られていた。

フラフラになって倒れそうになっているサクを、どこからともなく現れたリビエラが支えた。

「リビエラ」

サクが息を切らし言った。

「何です？」

「私はゼロが好き。でもどこにもいないじゃない。

好きでいることのどこに意味があるのよ…！？ゼロは私を愛してくれない！守ってくれない！！
そばにさえ…いてくれない…」

リビエラは心身共に傷ついたサクをゆっくり横たえた。

二人は黙っていた。

リビエラは何かを考えているようだった。

やおらリビエラがサクに聞いた。

「サク、あなたは自慰をしたことがありますか？」

サクは言葉の意味が分からず、リビエラを見た。

「ありませんか？自分で性的絶頂を経験したことはないですか？」

「よく分からないわ」

サクは疲れたように腕を顔に乗せた。

「多分ないと思う。性的絶頂って性交して感じるものじゃないの？」

リビエラはそれには答えず、しばらく黙っていた。

「サク、『ゼロ』に抱かれたと思ったことはないですか？」

抑揚のない声でリビエラは突然そう言った。

サクはリビエラを凝視した。

「どういう…意味？」

リビエラは異常とも思える提案をした。

「私があなただを愛撫する。あなたは目を閉じて、その感触をゼロと

重ねる。

私の肉体をゼロの肉体として感じ、想像するのです。

私は女ではありませんが、男でもないので男根を挿入することはできません。

しかしあなたに絶頂を感じさせることはできる。

そしてあなたが自分で絶頂を感じられるようにする技術も教えましょう。」

サクは自分の首筋が汗ばんでくるのを感じた。

リビエラは当たり前のことを言うように淡々と話し続けた。

「あなたはもう女だ。体験したことがないなら、しなければならないことだ。

あなたの身体はもうそれを受け入れることができるよう整っている。

」

サクは恐ろしそうに言った。

「ゼロはこの世界にはいないのよ…。全部あなたが考えた物語の中のことじゃない」

リビエラはサクに服のまま覆い被さった。

そして無感情な目でサクを見下ろした。

「空想の世界の人間が本当に存在しないと思いますか？

生身の人間が人間の身体から生まれるのと同じ、空想の世界の人間は人間の心から生まれる。

そこに違いなどない。同じように縁があるのです。愛していればいるほど、強い絆と縁が。

ゼロはあなたの心の中だけの存在ではない。

この世界ではないだろう。しかし必ずいつか会える。

あなたがこの世界でゼロを渴望しているように、ゼロもどこかの世界であなを渴望しているのです。」

あまりに確信のあるリビエラの言い方にサクは啞然とした。

「きっとあなたは夢中になる。ゼロとの新しい感覚に。絶頂を教えてあげよう」

そしてここからサクとリビエラの倒錯が始まった。

第二話 叶わぬ情念

〔第二話 叶わぬ情念〕

サクが十七の時だった。

サクとリビエラは、二人で湖畔でいつもの倒錯を行っていた。

リビエラが突然愛撫をやめた。

サクの両腕を押さえてリビエラが言った。

「サク、目を開けなさい」

サクは少し怯えたように目を開けた。

リビエラは湿疹を診る皮膚科医のようにサクの身体を撫でながら凝視した。

そしてサクの片方の胸を寄せるようにつかみ、舌で乳頭を舐めた。

「リビエラ、私が目を開けてる時はそういうことしないでしょ」

恥ずかしそうにそう言うサクを冷たく見ながらリビエラは突然言った。

「胸にはまだ触られていない」

リビエラは素早くサクの片足を自分の肩にかけ、サクの女性器に舌を入れた。

リビエラが先に何を言い、今、何をされているのかサクが理解する前に、リビエラは顔を上げてサクを突き刺すように言った。

「まだ男が入ってはいない。…だが」

サクはリビエラから目をそらし、震え始めていた。

「好きな男ができたな、サク……！」

リビエラはサクの頬をつかみ、その顔を自分に向けさせた。

「私をごまかせると思いましたか？」

いつもと鼓動の速さが違う。身体に触れた時の感度が違う。
あなたの身体全てから罪悪感を感じた。
そんなに好きなのか？」

いつも冷静なリビエラが齒噛みしてサクに詰め寄る様子にはサクはゼ
ロの姿を感じた。

サクは裸のまま起き上がった。

リビエラが怒ったようにサクの服をサクに放った。

「どんな男ですか？その男もあなたを好きなのですか？」

サクは申し訳なさそうにリビエラに言った。

「家の近所に住んでる男の子。私が虐待されてることも知ってる。告白されたの。」

私を…守りたいって」

リビエラは痛いほど自分の甘さに気付かされた。

自分でさえサクを愛撫すればするほど、その美しさに酔わずにいられなかったのだ。

サクの痛々しさ、はかなさ、透明感は『ある所』までは、自分だけのものだと思っていた。

人間の男がサクに対してどう思うか、またサクがどう返すかなど考えたこともなかった。

リビエラは経験したことのない胸のつまりを感じた。

それが切なさで、今自分の目が熱くなっているのも、リビエラには何事か分からなかった。

リビエラはにじむ涙をそのままに、座って自分を見上げるサクの目の前にひざまずいた。

「サク、最後にゼロのキスを受け入れて下さい」

サクは微笑んだ。

「最後なんて言わないで。私にはずっとゼロが必要なんだから」

そう言い、サクは目をつむった。

リビエラはサクの服の中に手を入れ、その胸を強く撫でた。

そしてサクの唇にそっと口づけした。

サクがゼロを求めるように自分の舌でリビエラの舌をからめ取った。

その時、舌から、手のひらから、リビエラは感じ取った。

男はサクにキスをした。

そしてサクの身体がそれに上気し、胸が、全身が、激しく鼓動したことを理解した。

リビエラはその男を八つ裂きにしたい衝動で、飢えた獣のような非人間的な形相になっていた。

しかしリビエラはあえて自分を落ち着けた。

その男を潰す。

そのために考えなければならない。

リビエラは目を閉じた。

全ては『ゼロ』のために。

数日後、リビエラはサクの了解の下、サクの男に会うことになって
いた。

了解とは言っても、強引にさせたものだった。

リビエラはサクに何かを強制したい時、爬虫類のような緑の瞳でサ
クをじっと見る。

サクはその問答無用のワニのような瞳が怖くて、いつもリビエラに
逆らえなかった。

その日、サクとリビエラは男との待ち合わせ時間ちょうどに約束の
場所に着いていた。

男はまだ来ていない。

この時点で、リビエラにはサクを待たせても平気なこの男が不愉快だった。

しばらくして男がやって来た。

「よお、サク」

男が笑い、サクが男に駆け寄った。

サクが男の名前をリビエラに言ったが、リビエラは聞いていなかった。

背が高い。

顔も悪くはない。

しかし何だかヘラヘラして軽そうな男だ。

リビエラはなるべく不自然にならないよう、鼻腔にこの男の匂いを吸い込んだ。

この男の身体には案の定、幾多の女の匂いが染みついていた。

それに…

リビエラは啞然とした。

自分の嗅覚が間違いないければこの男は…

「よろしく。私はサクの昔からの友人です」

リビエラが握手もしようとせず、真顔で男に言った。

「こいつの友人？お前、オレ以外に親しい奴いたの？」

男はサクの肩を抱き寄せ、笑いながら聞いた。

サクは困ったように微笑んだ。

リビエラも笑った。

そして何気なく聞いた。

「住まいはどこですか？」

「この村で一番大きい家だ。サクの家の近くだよ。親が地主やってね。」

サクと二人で暮らせる家もある。一緒に住むんだ。なあ、サク」

その後のやり取りをリビエラは聞いていなかった。

そういうことか、とリビエラは納得した。

サクはあの母親から逃げただけだ。

サクはこの男に惚れているわけではなく、この男の提示したその手段に飛びついただけだ。

しかし、サクをよく分かっているのは天晴れだと思った。

嫉妬を感じるほどに。

リビエラは男に笑いかけた。

その笑みはまるでその男を誘っているかのような妖しさがあつた。

男は一瞬戸惑い、気まずそうに目をそらした。

男は知らなかった。

リビエラがサク以外の人間に笑う時、それはその対象に対して、残酷な破壊衝動に駆られている時だけである。

「サク、帰るよ」

サクをその男から引き離すように、腕をつかみ半ば強引に、リビエラはサクを引っ張って行った。

リビエラの視線にかするように、その男は二人をせせら笑うようにして、踵を返しさっさと去っていった。

リビエラはその夜、サクと別れた後、即座に昼間聞いた男の家に向かった。

家はすぐ分かった。

確かに周りの家とは格段に違い、大きかった。

リビエラはサクにも見せたことのない敏捷さで、門を越え庭に回った。

そして鼻腔を広げ、昼間嗅いだ男の匂いを探した。

ちょうどリビエラのいる真上の明かりが点いている窓、そこだった。

リビエラは高くジャンプし、男の部屋の前にある木の枝につかまった。

そして身体を振り、勢いをつけて窓を割り、男の部屋に飛び込んだ。

「うお！何だ！？」

男がびっくりして窓の方を振り返った。

リビエラは服にかかったガラスの破片を撒き散らしながらズカズカと部屋を横切り、男の前に立った。

「お前、昼間の…ここ二階だぜ。よくまあ入れたな」

男はリビエラを見つめた。

リビエラは男の目をじっと見た。

いつも澄んだサクの目しか見ていないリビエラは、男の目のあまりの俗っぽさに気持ちが悪くなり、さっと横を向いた。

そして同時にサクが本当に可哀想になった。

サクもこの男の目から同じものを感じたはずだ。

異常に傷つけられてきたサクがそういうことに鈍感なはずはなかった。

その不信を超えてサクはこの男を好きになった。

母から解放される希望、そのためにサクはこの男に自分の心が奪われることを許した。

「何だ、お前。昼間そっけなかったくせに夜這いでもしにきたのか？」

男の声がして、リビエラは驚いた。

サクの心を感じて切なくなるあまり、この男の存在全てがリビエラの五感から飛んでいた。

もう少しサクの心に触れていたかった、とリビエラは思った。

リビエラは無表情に男を見て、あっさりと言った。

「あなたとの性交の味を教えてくださいに来た」

男は目をしばたいた。

「サクはあなたを恋人だと思っている。今は。いずれ性交もするようになるだろう？」

その前にあなたがサクにどんな触れ方をするのか知っておきたい。私をサクだと思って抱いてみてはくれまいか？」

男は変人を見る目でリビエラを恐れ入ったように見て言った。

「あんた頭のおかしい人？何その提案？お前サクの何？オレ達のと完全にバカにしてるよね？」

リビエラは全く動じず言った。

「どっちが頭がおかしくて、どっちがバカにしているかはいずれ分

かる。

さあ。あなたの全てのサクへの欲望を解放して下さい。
どんな倒錯も性癖も喜んで受け入れてみせましょう。」

リビエラの服がパサリと落ち、その裸身が露わになった。

その身体は男でも女でもなかった。

乳房もないが男根もない、それは両性具有の身体だった。

男が後ずさった。

「何だよ、お前。何者…!？」

リビエラがスタスタと男に近づいた。

「私の身体に触れて下さい。あなたの望む身体になりましょう」

リビエラが無理やり男の手を取り、その手を自分の胸に押し付けた。

リビエラは自分から目をそらすなどばかりに男を凝視した。

その目は濡れてもいなければ、男のことを求めてもいなかった。

しかし男は目をそらすことが出来なかった。

リビエラの胸が男の手の中で隆起し、無機質だったその身体が『女』
となっていた。

「な…何なんだよ…人間じゃねえのか？」

男は心底恐ろしそうにリビエラの手を振り払った。

「あなたは私が予想したより数倍、肝っ玉が小さい人のようだ。だが」

リビエラは面倒くさそうに男のベットに座り、胸と股間がよく見えるように、後ろに両手をつき身体を倒して、片足をベットに乗せた。

「あなたにこの身体を拒絶することなどできないでしょう」

「あんたさっき自分をサクの代わりに抱けつつたけど、サクってそんな自信満々な誘い方すんの？」

男が笑ってリビエラに近づいた。

私から一本取ったつもりか、とりビエラは思った。

お前ごときがサクがどう誘うかを知ることが永遠にない。

ここで私に破壊されるのだから。

リビエラは男に笑った。

その瞳は身体中に走る破壊衝動に震え、濡れていた。

「いいのか？」

男はリビエラの髪に触れた。

そして突然その横っ面を力一杯殴った。

リビエラはベットに倒され、しかし動じることもなく横目で男を見た。

男はリビエラに馬乗りになり、上気して叫んだ。

「オレは強姦とか暴力でしか性感を感じねえんだよ！女の泣き顔や悲鳴が好きなんだ！

いくぜ、肉人形！！しっかり感じさせてくれよ！！」

男は笑いながらリビエラの顔を何度も殴った。

殴られながらもリビエラは満足していた。リビエラはこの実証を求めていた。

昼間この男からは多数の女の匂いがした。

しかしこの男の身体からはそれよりも、血と涙の強烈な罪の腐臭がしていた。

リビエラは男に気づかれないように血を吐き出しながら笑った。

来るがいい、腐った肉よ。

お前が重ねた罪で私を興奮させろ。

お前が壊れた時、私が最高の悦楽を感じられるよう、せいぜい醜く舞うがいい。

鬼畜と鬼神の戯れが始まった。

第三話 聖なる思索

第三話 聖なる思索

「ほら、泣けよ！叫べよ！サクを抱いてるつもりになれと言ったのはお前だ！！ちゃんと演じてもらおうか！」

頬を激しく殴られてもまばたき一つしないリビエラに業を煮やした男が叫んだ。

男はベットに立ち、不気味なほどの無表情でリビエラを見下ろした。

そのスパイクの付いたブーツがチャラチャラ鳴った。

次の瞬間、男はリビエラの腹に内臓を破裂させるほどの勢いで靴を打ち下ろした。

そしてそのまま同じ箇所を凄まじい力で何度も何度も踏みつけた。

男は何の感情もなく一分、二分とリビエラを力一杯潰し続けた。

ドゴドゴドゴツという音が鳴り響き、リビエラの口から血反吐が溢れた。

五分くらいそれが続いた後、男は足を止め無機質な目でリビエラを見下ろした。

リビエラの腹部はグズグズになり血だらけだった。

しかしリビエラは男の無表情を超える無感情な目で男を見上げていた。

「お前は氣に入らねえ…最初からだ。バカにしやがって」

男が舌なめずりして、その顔が猛獣のような形相になった。

そしてベルトに手をかけて、リビエラの胸の上に座った。

「もっと苦しめよ。男だか女だか知らねえが。サクになりきれてね

えぜ。

分からねえか？あの女、そそるんだよ。触れただけで壊れそうな傷だらけの身体。そのくせエロそうで。

思い切り泣かせて奉仕させたい。痛みの涙に濡れた舌でな！

あいつに入れた時の顔どんなだろうな。きつと死ぬほど可愛いんだろうぜ！」

リビエラの顔が歪んだ。

先ほどのダメージでも無反応だったリビエラの心に、その言葉が凄まじい衝撃で突き刺さった。

その頭に否応なしに、この男がサクを陵辱する姿が浮かんた。

この男が泣き叫ぶサクの身体に巻きつき、サクの精神と純潔を侵していく。

リビエラがそれを思い浮かべた瞬間、この男の腕の中で涙を流すサクの姿が、自分に愛撫されているサクの姿と重なった。

サクの味を知る舌が、柔らかさを知る手のひらが、その肉体を求めて激しく鼓動した下腹部が、リビエラの全ての細胞が、この男を排除するために尖った。

リビエラの身体が変化し始めた。

先ほど『女』となったように、その変化は急激だった。

ミシミシと音を立て身体に筋肉が張り、ふくらんだ乳房が小さくなって、開いた足の付け根から男根が生えた。

リビエラの身体が『男』となった。

その不可解なメタモルフォーゼに男が気付く前にリビエラは自分の胸の上に座る男の男根の根元を強く握った。

男が驚いてリビエラの手元を見ると同時に、リビエラは男の男根をくわえた。

男はリビエラの身体が変化したのにも気付かず、リビエラが自分に奉仕する気になったのだと思い込み、齒茎をむき出しにして笑った。

「やるじゃねえか。ありがとよ、『サク』！」

男はリビエラの髪をわしづかみにして、その顔を自分の股間に押し付けた。

男がサクの名を言った途端、リビエラの五臓六腑が怒りで爆発した。

一瞬の憎悪の瞬きでリビエラは凄まじい頭痛がし、嘔吐しそうになった。

サクがこの男の快楽のために殴られ、蹴られ、汚される。

サクの痛みを利用しこいつは…私と『ゼロ』だけのものだったサクの唇に触れた…

リビエラの全身の筋肉がメキメキと音を立てて隆起した。

次の瞬間、リビエラは歯と顎に凄まじい力を込めて男の男根を噛んだ。

そしてそのまま頭を振り、その肉を根元から貪るように引きちぎった。

リビエラの口から男の血が、滴るように溢れた。

男は一瞬何が起こったのか分からずリビエラを見つめた。

リビエラが痰でも吐き出すように何の感情もなく男根を吐き出した。

男は何が起こったのか知った瞬間、口から泡を吹き、痙攣して失神した。

リビエラは何事もなかったように立ち上がり、足で男をどかした。

その時ふと下半身にうずきを感じ、リビエラは自分の男根を何気なく見た。

勃起していた。

サクのことを考えたからだろうと思った。

リビエラは何の迷いも思索もなく、男の顔にまたがった。

そしてその男根を、失神しても痙攣し続ける男の口に挿入した。

男の口の中は心地よかった。

ドロリとした唾液と泡の感触が優しく、顎がガクガクしているせいで、その舌が激しく痙攣して自分の男根に当たる感覚に、リビエラの頭は快感でぼうつとした。

男の痙攣がもたらす快楽に、リビエラの身体はピンク色に上気し、紅をさしたかのように唇が赤く濡れた。

リビエラは快感のあまり笑いそうになる口を押さえた。

ゾクゾクした感覚が背中から頭に走り、それがまもなくこの身体に絶頂が来ることを伝えていた。

リビエラは爆笑した。

男の口の中にリビエラの精液がほとばしり出た。

そのまま男の身体の上に倒れ、リビエラは息を切らしていた。

全身がバクバクと鼓動していた。

リビエラは絶頂の後の急激に冷めていくこの感覚が嫌いだった。

その身体が元の中性的な、男でも女でもない身体に戻っていった。

倒れた男の存在を全く無視して、その横でスルスルと服を着て、リビエラは二階の窓から飛び降りた。

その男はすぐに発見されて、しかるべき処置を受け、命に別状はなかった。

しかし彼の地主の親が、自分の息子がどこぞの女にみつともない目に合わされたという事実を隠したがつたこともあり、サクがそのことを知ったのは三日後のことだった。

まだ男がサクが正式な彼女だと公表していなかったこともあり、サクはその『容疑者』として疑われることはなかった。

男が語った『被疑者』の見た目は、白い髪に緑の瞳、それに『おかしな身体』だった。

サクは自分の彼氏が男根を食いちぎられたと聞いた瞬間に、リビエラのあの、何を考えているのか分からない、どこか調子の外れた目を思い浮かべた。

そしてその直後にリビエラの見た目そのままの『被疑者』の説明を受け、リビエラに対する呆れ半分怒り半分だった。

リビエラは神出鬼没で村の者はほとんどその姿を見たことはなかった。

サクしかリビエラを知る者はいなかった。

サクはリビエラにどうしてそんなことをしたのかと詰め寄った。

しかしリビエラはいつもの爬虫類のような真顔で「そんなことはどうでもいいことでしょう」と言った。

あれから数日経ったりリビエラの頭の中にはあの事件は有って無いことのようにしか記憶されていなかった。

リビエラはあの男が異常な性癖の持ち主で、サクを傷つけたかも知れないということもサクに話していなかった。

なのでサクにとってはリビエラの行動は、理不尽以外の何物でもなかった。

サクは自分の怒りをリビエラに分からせるために、森に行かなくなった。

しかし一日も経たないうちにリビエラはサクの家に乗り込み、母に気付かれないようにではあったが、暴れるサクを肩にかついで拉致まがいに森に連れて行った。

サクは怒り心頭でリビエラと口も聞かなかったが、リビエラはただ黙って朝から深夜までサクのそばにいた。

一週間もそれが続くとは最初は怒っていたサクもリビエラのそばにただ何もせずにいるというのが難しくなった。

リビエラが散々サクの身体に教えてきたゼロの肉の味が異常に恋しくなってくるのだ。

他の事は何もかもうでもいいリビエラだが、サクのそういう身体や心の変化はサクが何も言わずとも感じ取れた。

サクとリビエラは見つめ合い、リビエラがサクの首筋を撫でた。

サクは目を閉じて、また再び二人の『日常』が始まった。

リビエラがサクの彼氏を抹消したその事件以来、現在に至るまでサクは一人も異性を好きになることはなかった。

リビエラが許さないということもあったが、自分は結局彼氏ができたとしてもリビエラやゼロから離れられない。

もはやリビエラはサクの身体の一部であり、ゼロはサクの心の一部だった。

サクが母からブローチの針を刺されて、リビエラの愛撫を受けた後、サクは横に座るリビエラの膝に頬を寄せて横たわっていた。

「少し風が強いですね。寒くない？」

「寒いよ。でも気にならない。私、風が好きだもの。ゼロはリビエラの話の中では風の神、だったよね」

「…ええ」

リビエラがサクを見ずに、遠い目で言った。

サクはリビエラの手になんか触れた。

「リビエラは風、好きじゃないの？」

「そうですね。今はあまり…」

リビエラはサクに優しく微笑んだ。

「傷は大丈夫ですか？」

サクはリビエラを見つめた。

リビエラには再びサクの身体が熱を持ち始めるのが分かった。

サクは裸のまま立ち上がり、愛撫する時も絶対に服を脱がないリビエラの胸を撫でた。

そして、そのままりビエラの手を引き、湖に入ってしまった。

「ゼロの手で消毒して。ママの毒を私の身体からぬぐい去って」

サクは水のあまりの冷たさに震えていた。

リビエラはサクを抱きしめた。

「目を閉じて」

「ゼロを…感じて下さい…ゼロを…」

リビエラはこの時、何故かそう言うのが嫌だった。

リビエラの両手が震えた。

どうしてか自分の目頭が熱くなることに困惑しながら、リビエラはサクの身体を撫でた。

サクの傷だらけの身体と共にリビエラの全身も熱くなっていった。

リビエラはサクの新しい傷を探し、湖の水に浸した手でそれを洗った。

「ゼロ…」

サクは泣いていた。

リビエラは感情を殺し、サクの傷跡に水をかけていった。

何度となく水をすくうリビエラの目から涙が落ちた。

風が強くなった。

リビエラはかすむ目でサクの身体を見つめた。

もうサクの身体は女性として完全に美しく整い、男性性を受け入れる準備は出来ていた。

ゼロを……

リビエラはサクとの別れが近いことを感じた。

いよいよだろう。

いよいよ『ゼロ』がサクを連れて行く。

サクはゼロが存在しない人間だと思っているが、リビエラはゼロが実在することを知っていた。

リビエラはそのゼロの命を受け、小さい頃のサクに近づき、その人生の最初からゼロを愛させるよう遣わされていた。

もうすぐサクはゼロのいる別世界へ行くことになる。

サクが長年望み続けてきたゼロとの邂逅が果たされる時が来るのだ。

少し前まではサクのためにその時が早く来ればいいと思っていた。

しかし今は…

リビエラは自分を憎んだ。

自分はサクをこうまで苦しめているこの世界にサクがずっと留まるのを望んでいる。

永遠にサクとの日々が続けばと・・・

サク…

リビエラの吐く息が荒くなり、止めどなく流れる涙の雫が湖に落ちた。

サクの傷を撫でながらリビエラはこらえきれず、口に手を当て嗚咽をもらした。

「リビエラ？」

サクが目を開けそうになった。

リビエラはサクに叫んだ。

「サク、目を開けないで！！今は…このまま…」

リビエラは震える唇をサクの身体に這わせた。

「リビエラ、寒いのか？」

「いいえ」

リビエラは涙をぬぐった。

サク、ゼロの中にいる私を感じて…

リビエラはその時初めて、心の中でそう願った。

私はサクをゼロに導くためだけにつかわされた。

しかしもうすぐサクが行ってしまうのと同じ、リビエラの方にも感情の限界が来ていた。

リビエラは一線を超えてサクを求め始めている自分が怖かった。

これ以上一緒にいることはもうできない。

サクの手を取り、リビエラは共に湖から出た。

そして何も言わずサクを横たえ、その胸にキスをした。

サクは目を閉じた。

リビエラはその時初めて自分も目を閉じた。

サクがリビエラの抱擁に応えるように、その首筋に歯を立て、舐めた。

リビエラの心は喜びに震えた。

リビエラが目を閉じたその空想世界ではサクが目を開け、しっかりとリビエラを見ていた。

サクがゼロではなく自分の愛撫に応えてくれる。

リビエラは自分の肉を、魂をサクに知らしめるためにサクを強く抱擁した。

朝日が昇り切るまで二人は一切相手を見ることなく、自分の心の中だけの倒錯に浸った。

その中でリビエラは悟っていった。
もう終わりが来たのだと。

第四話 始まりのための終焉

「第四話 始まりのための終焉」

強い風が吹きつけ、サクは寝返りを打った。

その風は冬なのに暖かく、サクを包み込むように、その周りだけを行ったり来たりしていた。

サクはうつすらと目を開けた。

暖かい風のせいで深い眠りに落ち、起き抜けの意識がはっきりしなかった。

自分が森の中にいると認識した瞬間、眠る前の記憶が蘇った。

『ゼロ』としてリビエラがサクを愛撫していた。

リビエラに今までにないほど何度も絶頂を経験させられ、サクはイキ疲れて、リビエラの腕の中で意識を失うように眠りに落ちた。

サクはぼんやりとしながらリビエラを探した。

風が吹き抜け、木の葉を揺らし、水面にはさざ波が立った。

サクは一人だった。

「リビエラ？」

サクは辺りを見回した。

こんなことは今まで一度もなかった。

いつでもリビエラはサクが目覚めた時、横にいて微笑んでくれた。

サクは何気なく自分の身体を見た。
そして驚いた。

服から出た腕や足にリビエラのキスの跡がいくつも残っていた。

リビエラはいつも『あなたの身体が汚らしく見える』と言って絶対キスの跡を残さなかった。

サクは呆然として立ち上がり、服を脱いだ。

全身に愛撫の『跡』が残っていた。
胸に、臀部に、噛み跡があった。

それはリビエラがゼロの代わりではいられなくなった証だった。

リビエラ自身のサクへの制御できない欲望の証であり、そして遺言だった。

サクは無表情にリビエラのキスの跡に唇を重ねた。

サクはこの時初めて、ゼロではなくリビエラの唇にキスをした。

全身が炎に包まれたかのように熱くなり、サクは自分の身体に残るリビエラの跡を貪るように舐めた。

二人が完全に元に戻れない関係になった時、サクも理解した。

リビエラとの時は終わったのだと。

リビエラを喪失して、月日は淡々と流れていった。

サクは確かに寂しかった。

身体の性的な渇きがどうしようもない時もあった。

そんな時森へ行ったが、たった一人で森にたたずんでいると、ますますリビエラのかつての存在感を感じて、身体が熱くなった。

しかしそんなサクを癒やす新たな存在があった。

『風』だった。

寒い冬にあって、サクにはいつもその身体を護るように、暖かい風がまとわりついていていた。

その風はぬめりがあり、人肌の生々しさすら感じさせた。

サクはその風にまとわれると幸せだった。

目を閉じて風を感じると、長い銀髪と大きな手のひらが自分を撫でているようだった。

リビエラは早朝の湖畔にたたずんでいた。

サクの時とは打って変わって、氷の刃のような風が攻撃的にリビエラをなぶっていた。

リビエラはその風に真っ向から対峙するように立ち、厳しい目で虚空を睨んでいた。

突風がリビエラに向かって流れた。

シュピツという軽い音がして、リビエラの頬を風の刃がかすめ、血液が宙に舞い上がった。

流れる血も意に介することなくリビエラは叫んだ。

「風の神、ゼロ!!」

その呼びかけに応えるように、一陣の風が湖面を撫でるように湖の上を流れた。

次の瞬間、全ての湖の水がビキビキビキッと凄まじい轟音を立てて凍りついた。

それは本物の神の力が起こしたとしか思えない、異常な光景だった。

怒り狂った風の神ゼロの、リビエラへの殺意の表示だった。

ゼロは風の神として実在していた。

銀髪で金の瞳のサクの恋人は、この世界では風の姿をとり、サクを愛撫し続けていたのだった。

風の神とリビエラの、一人の女をめぐる、魂の存亡をかけた対話が始まった。

「怒っているのか？なら、もう分かっているだろう！」

リビエラが凶悪に笑いながら叫んだ。
その目には涙が光っていた。

「サクは自分のものだ」と私に悟らせるがいい！！

愚かな私を正せ！！身も心もサクを渴している私を！！」

人間の絶叫のような音の風がリビエラに向かい来た。

巨大な風の刃がリビエラの全身を凄まじい衝撃で切り裂いた。

吹き出る血も、傷による痛みも感じず、リビエラは叫び続けた。

涙が爆風に舞い上がった。

「もっとだ！！サクを失う痛みを忘れさせるほどに私を崩壊させろ！
本気になれ！残酷になれ、ゼロ！！」

でないと私はあなたからサクを奪う！！」

風が感情をきしませ、リビエラを滅茶苦茶に切り裂いた。

大爆発のただ中に放り込まれたかのように、辺りに血と肉片が飛び散った。

終わることなく風の刃はリビエラの身体に激しい斬撃を加え続けた。

バシッと音を立てて、リビエラは自らの血の海に倒れた。

それでもゼロの刃はリビエラを放さなかった。

言われた通りにしてやると言わんばかりに、リビエラをズタズタに切り裂き続けた。

リビエラは、血が吹き出る白い腕で顔を覆って泣き叫んだ。
それはもはや悲鳴だった。

「絶対渡さない！！サクは渡さない！！渡さない！！渡さない！！
渡さない！！」

どうしようもない、すぎる所すらない、最後の願いだった。

ズバズバズバツという音と共に、リビエラの身体が激しい痙攣により跳ねた。

リビエラは泣きじゃくった。

リビエラの中では、もはやゼロの与えた傷など傷ですらなかった。

サクとの永劫の別れ。

ゼロの、それを受け入れろというメッセージだけがリビエラを激しく壊した。

「どうして…!! どうして…!!?」

お願い…サクを奪わないで…!! 許して…許して…許して…!!」

切り裂かれるままに、リビエラが泣きながらゼロに懇願した。

もうそれしかできることはなかった。

リビエラは身体を縮めて泣き続けた。

風がだんだん穏やかになっていった。

そして最終的にリビエラを愛撫するかのようになり、その身体を優しく煽った。

ゼロが勝った。

リビエラは負けたのだ。

リビエラは悔しさと悲しさのあまり、絶叫した。

それは長く長く森に響き渡った。

サクはリビエラがいなくなった後もちよくちよく森に来ていた。

リビエラはずっとそんなサクを見ていた。
サクが来ると走り寄って抱きしめたい衝動を、震える思いで自制していた。

しかしもうそんな必要はなかった。

最後の時に向かっていかなければならない。

サクが来た時、リビエラは何のダメージもないかのようにサクに近づいた。

「サク」

サクが振り向いてリビエラを凝視した。

「リビ…エラ？」

リビエラはサクの顔を見なかった。

もうその目には涙がたまっていた。それを悟られなくなかった。

サクが困惑したようにリビエラに近づいた。

「リビエラ…！も…もう会えないかと…」

リビエラはサクを抱きしめた。

「サク、ゼロの所に行こう」

唐突なりビエラの言葉に、サクは動じることにはなかった。

それは約束された言葉だった。

「うん」

サクの瞳も潤んでいた。

リビエラは微笑むサクに、自分だけに向けられた究極の慈悲を見た気がした。

もう私は得るものを得た…
これ以上ないほどに…

リビエラはもう流れる涙を隠そうとは思わなかった。

サクとリビエラは濡れた瞳で笑い合った。

サクがリビエラを励ますように抱きしめた。

リビエラも力強くサクを抱いた。

暖かく優しい風が二人に巻きついた。

二人は何もかも分かっているかのように、風に身を任せた。

抱き合うサクとリビエラの足元が浮き上がった。

風が二人をさらった。

とても穏やかな流れなのに、風は二人を空高く運んでいった。

サクが驚いてリビエラにしがみついた。

空を飛ぶ感覚とサクの肉体を身体に感じ、リビエラは頭がぐらぐらした。

サクを愛撫している時の頭の痺れだった。

これが最後だ…

リビエラはサクが意識することのないようにそつと、その額にキスするように唇で触れた。

リビエラは目を閉じた。

唇にはずっとサクが触れていた。

ゼロ…これくらいは最後に…

赦して下さい…

風がゆつくりと着地にそなえて、空中の二人の体制を整えた。

落下が始まり、サクとリビエラはふわりと見たこともない大地に降り立った。

真っ赤な岩肌の崖に囲まれた狭い谷のような所だった。

その地には更に、深く巨大な割れ目があり、そこから溢れんばかりに炎が燃え盛っていた。

リビエラは炎に近づいた。

「サク…ここは普通の人間は誰一人近づけない。ゼロがあなただけのために用意した場所なのです」

「ゼロは…本当に実在するの…？違う世界に…？私はこれからそこに行くの？」

「ゼロがいるのは神界です。これからあなたはそこへ行く」
リビエラがきっぱり言った。

サクが戸惑ったようにリビエラを見た。

「神界って特別な人しか行けないんじゃないの？」

「そうだな…」

リビエラは空を仰いだ。

「少しあなたに説明しておこう」

サクを安心させるように微笑み、リビエラは語り出した。

「インフェルノと呼ばれるこの地に生きる全ての生き物は『輪廻者』と呼ばれている。

輪廻とは『生まれ変わり』の意でインフェルノに生きる命は、その魂が輪廻することにより、この呪いの地に永遠に縛られる。

輪廻者は輪廻から外れることができた時初めて、神界『グレイシス・グロリアス』に生まれ、神となるのだ。」

「知ってるわ。でも輪廻から外れるためには…」

「そう。そのためにはこの呪いの地に生きる中で、自らの心の戦いに勝たなければならない。葛藤、恐怖、絶望…それを超えられた者だけが輪廻を超え、神となる。

この場所は」

サクが何かを言いかける前にリビエラが声を大きくした。

「そうならずとも、あなたを神界へ送る場所なのです」

リビエラは刃先の長い美しいナイフを取り出した。

「ここで燃え盛る炎は『転生の炎』といいあなたを無条件で神界へ導く。

あなたはこの炎に身を投じなければならない。」

リビエラが刃をサクに向けた。

「あなたはここで死なねばならない。

炎があなたを焼く前に私がとどめを刺す。

私はそのためにあなたの元へつかわされたのです」

サクは全く動じることなくリビエラを見つめた。

二人は強い視線で見つめ合った。

リビエラの手が震え始めた。

リビエラが最後の残酷な事実をサクに伝えた。

「ゼロの力で、神界に転生したあなたの中から、あなたをこの世界で愛した者、そしてあなたに愛された者の記憶が消える」

リビエラの見開かれた目から涙が落ちた。

「あなたは私を忘れる。私はあなたを愛している」

肩に手をかけ、サクは涙をうかべてリビエラに語りかけた。

「あなたは私を優しく愛撫するだけで、決して私を汚さなかった。必死で私の純潔を守ってくれた。あなたの言う通りなら私はあなたを忘れる。私もあなたを愛しているから。」

「サク…」

パサツと音がし、サクが服を足元に脱ぎ捨てた。

リビエラは泣きはらしながらサクを見た。

「あなたの身体で私を刺して…！
そのナイフで私の魂の純潔を奪って、リビエラ…！
私の魂にあなたの愛を刻んで…！！
ゼロの所に行ってもあなたの愛と共に在れるように！」

サクが炎を背に立った。

炎の熱でサクの全身が濡れた。

その官能に、もうリビエラは抗えなかった。

リビエラが何年もその鼓動に頬をすりよせ愛撫してきたサクの心臓に、勢いよく刃が刺さった。

サクは薄れる意識の中、必死で微笑んだ。

ありがとう…

大好き…

サクの身体はそのまま炎の渦の中に落ちていった。

第五話 受容者との邂逅

「第五話 受容者との邂逅」

気がつくとサクは広大な闇の中にいた。

歩き出そうとしたが動けない。

足を見ると、まるで闇で縛られたかのように、自分の下半身が消えていた。

サクはそのまま辺りを見回した。

「ここが…神界？」

サクは聞こうとした。

いつも分からないことに答えてくれた誰かがいたような気がした。

しかし心のどこを探しても、インフェルノでサクに暖かくしてくれ

た人物は誰もいなかった。

「ゼロ…?」

その名を呼んだ途端、サクの心が希望で満たされた。

自分は小さい頃からの唯一の支えであったその者に逢うためにここにいるのだ。

しかし…

こんな闇の世界が神界のはずはない。
しかも何故か自分は拘束されている。

ここは神界に至るまでの途中の世界なのだろうか？

突然サクの耳に心臓の鼓動のような音がごくかすかに、しかしはつきりと聞こえた。

闇がうごめいたような気がしたその時、サクの心に何の脈絡もなく絶望がよぎった。

インフェルノにいた時の、あらゆることを含んだ強い不安感に再び襲われ、サクは苛立ち、震えながらつぶやいた。

「もう全部終わったのよ…私は…ゼロに…」

自分を納得させるはずの言葉も、心を侵食し始めた絶望感にかき消されていった。

「何なのよ…どうして…こんな…」

あまりにどんどん重たくなっていく心にサクの目がかすんだ。

しかしその目が絶望を宿した時初めて、サクは自分の足を拘束しているものが見えた。

血管だ…

足下の闇から伸びる蛇のように太い血管が幾筋も絡まり合い、サクの足に融合していた。

それに気づいた瞬間、再び鼓動が聞こえた。

サクはゾツとして悲鳴を上げた。

鼓動に合わせて足の血管がのたくるように動き、サクの身体に得体の知れない血液を送り込んだ。

その瞬間、サクの心にはっきりと記憶が蘇った。

今度は漠然とした、気分だけの絶望ではなく、一つ一つの過去の痛みが、丁寧にサクを舐めるようにその心にまわりついた。

母がいる…

サクは絶叫した。

リビエラがその人生の最初から姿を消した今、サクを暖めてきたものはなくなり、かつての痛みが何倍もの威力でサクに襲いかかった。

「やめてよ…!! やめて…お願い、もうやめて!!」

この苦しみは巻きついた血管のせいだと確信し、サクは泣きながら血管を引っ張り、めっちゃめっちゃに引きちぎった。

その途端、血管は生きているかのように、分断された所が新たに幾筋も再生し、サクの全身に突き刺さるように融合した。

血管は一方ではサクの身体と精神を侵し、一方ではより多くの血液を送るために、足元で分裂し、どんどん太くなった。

爆音が鳴った。

怪物の雄叫びのようなそれは、今や木の幹ほどに太くなった血管を震わせる鼓動だった。

条件反射で恐怖を感じる間もなく、サクの意識がインフェルノの痛み
みの過去へと戻っていった。

身体の傷と心の傷、それらを負った時の一つ一つの場面が目の前でリアルに展開され、サクは再び絶望の渦中に舞い戻ることとなった。

今この瞬間、サクは痛み、泣かされ、愛を踏みにじられていた。

涙がはじけ飛んだ。

サクの瞳が激烈な憎しみで真っ赤に染まった。

その目が映し出したのは赤い闇だった。

サクの目がとうとうこの世界の真実を目の当たりにした。

広大な闇の中にあったものは、絡み合った血管で形作られた世界だった。

蛇のようにのたくる血管の壁。

太く、攻撃性すら感じさせる血管が絡み合ったいくつもの柱。

地面には、まるで血管の海のなかで隆起した海竜の背のような太い

血管がいくつもうねっていた。

それらは全てサクにつながり、鼓動が鳴る時を今か今かと待っていた。

サクがこの世界の真の姿を目にしたのを合図に、爆弾が炸裂したような衝撃で鼓動が鳴った。

全ての血管が歓喜に震えるかのように痙攣し、爆発的な血流をサクの身体に送り込んだ。

あまりに激しい感情の熱線が火花を散らし、サクの心を焼き切った。

致死的な絶望が一分の隙もなく、その冷氣でサクの全霊を壊死させていった。

すでに何も見えていないサクの目から、光も闇も何もかもが消えた。

「ゼロ…」

最後に唇がそうつぶやき、サクは意識を失った。

癒やしも救いもないその世界は再び静けさを取り戻し、血管はもどかしげに蠢いていた。

その時、かすかに一陣の風が舞った。

その風が流れた一瞬の瞬きの間に、一人の男がサクの目の前に立っていた。

長い銀髪は風をまとい、金色の瞳は悲しそうにサクを見ていた。

ゼロは笑った。

> i 2 7 4 3 1 — 3 5 3 2 <

「お前はいつもそうだったな：極限まで傷つき、最後の最後になるまでオレの名を呼ばない。
お前が必死で痛みをこらえている時、オレはお前の心の中にいないのか？」

ゼロはサクだけを見つめた。
まるでその存在を自らの魂に浸透させていくように、ただただサクを見ていた。

「何て悲しい世界だ…」

「サク：ここはお前の心の世界だ。
神界に行く、とはインフェルノの輪廻から外れた後、別世界へ行く
ということではない。
自らの心の世界へ還っていくということを意味するのだ。」

ゼロは優しく血管に触れ、目を閉じた。

「この血は全て」

ゼロの顔が悲しみに歪んだ。

「全て、全て、お前が傷つき、その心が流した血だ」

「全ての血の中に傷の記憶が宿る。

鼓動によりお前の体内に戻り、その中で消化されることがしかこの血は浄化されない。

ここにある心が流した全ての血が、こぞって救いを求め、お前に流れ込んでくるだろう。」

「しかしもうそんなことはさせない」

ゼロは少し震える指でサクの心臓に触れた。

鳥肌の立つような悲しみと喜びに襲われ、ゼロの心臓が壊れそうになるほど激しく鼓動した。

ずっとお前を待っていた…

リビエラを通し、自分を求めるサクの姿が頭をよぎりゼロの全身が一瞬にして上気した。

ゼロは思わずサクの心臓に唇で触れた。

その服をわしづかみにして破り、サクに繋がる血管を、ゼロは愛おしそうに舐めた。

そのほんの少しの愛撫で、血管を包む脆い膜が破れ、ゼロの口腔に音もなく血が流れ込んだ。

破れた膜から分裂した細い血管の触手が、サクの胸に寄せたゼロの頬に侵入した。

ゼロは微笑み、サクの全身に絡みつく血管を優しく愛撫し崩壊させた。

血管は望んでゼロに身をゆだねるように、ゆっくりゆっくりゼロの全身に融合していった。

鼓動が鳴った。

身を許した相手に愛撫される悦びを感じているかのような、安らかな鼓動だった。

ゼロの中にサクの記憶が流れ込んだ。

ゼロは身も、そして感情も、かつてサクが立っていた場所に立っていた。

サクの気持ちと一体化することで、身体を縛り付けるような絶望感がゼロを襲った。

ゼロはその時、その絶望感に焦がれるような心地よさを感じた。

ずっとそれを感じられることを願ってきたそのものがこの手の内にあった。

この心がサクとなる快感。

サクの絶望が自分の絶望となる快感。

ゼロは神界からずっとサクを見てきた。

その痛みも、そして絶望するサクを見ていることしかできない悲しみも、ひたすら耐えて呑み込んだ。

しかし今、サクの絶望が自分のものとなったのだ。

ゼロは自分の中にサクの魂が入り、自分の魂がサクの中へ入っているのを感じた。

その悦楽は肉体の交わりを超えて、ゼロを激しく欲情させた。

ゼロはサクとなり、サクの痛みを感じ始めた。

幼い頃、まだ死というものを知らないサクが、教えられずとも身体

も心も破壊されつくした先にあるものが何であるかを知った瞬間。

母の暴虐をただただ泣きながら受け止め、それでも母を憎むことが
できず、憎しみの矛先は自分に向く。

愛されないのは自分に責任があるのだと…

ゼロは目の前で自分をなじるサクの母を茫然自失状態で見つめた。

混乱と絶望で涙も出なかった。

そしてそれでもどこかで母を必要としている自分を通し、サクに叫
びたかった。

オレは今、お前になり、お前の隣にいます。

全ての感情を恥じることはない。

まだ少女のサクがゼロに背中を向け、母に向かい合う形でゼロの前
に現れた。

母の暴虐を前にするサクの感情のない背中をゼロはかき抱いた。

サクが振り向いた。

その頬を幾筋もの涙が伝っていた。

ゼロは自分も涙を流していたことに気づいた。

これからオレがお前の全ての痛みを呑み込む。

快感として・・・

それは自分が死ぬことで、死んだ我が子の身代わりとなり、子どもを蘇らせることができた母親の至福と同じだった。

ゼロはサクの痛みを身に受け、それがサクの救いとなるという、愛する者への究極の愛欲を満たせることのできた喜びに涙ぐみながら笑った。

穏やかな鼓動は鳴り続けた。

血管が、まるでサクの悲しみを知ってほしいとゼロにすがっているように、ゼロに怒涛のごとく血流を送り続けた。

今まで感じたどんな痛みをも超える痛みがゼロを襲った。

一つ一つですら激しい絶望を伴うサクの記憶の奔流の中に立ち、ゼロは狂いそうになりながら全身を咬み、絶叫した。

しかし憎しみや悲しみの中に、サクの棄てたくても棄てられない愛情を垣間見るたび、ゼロはサクが強烈に愛しくなった。

お前の全ての痛みを感じさせろ…

お前のために壊れる喜びをくれ…

ゼロは目がくらむ絶望の中、サクの腕を握りしめた。

「サ…ク…」

「…ゼ……ロ…？」

サクが目を開けた。

鳴り続けていた鼓動が止んだ。

金の瞳がサクを凝視した。

サクは呆然とゼロを見た。

二人は自分に絡まった血管を振り払い、夢中で抱き合いキスをした。

[new page]

引き裂かれた血管が抱き合った二人を押し倒す勢いで、次々と二人に突き刺さった。

爆発的な鼓動が鳴った。

心を焼く絶望が二人を同時に襲った。

しかし、記憶の中で今はもうサクもゼロも一人ではなかった。

「もっと高鳴れ。激しく鼓動しろ。もっとお前の心を感じさせろ……！」

二人は互いの汗を感じた。

「ゼロ……抱いて」

サクは潤んだゼロの瞳に自分の姿を見た。ゼロも同じだった。

互いに恋焦がれた相手の生身の目に自分の姿が映る奇跡に、二人は泣きそうになりながら笑った。

サクはゼロの髪を強く握った。

ゼロはサクの心臓を撫でた。

サクの胸が鳴ると同時に記憶の血管を巡らす鼓動が鳴った。

しかし二人にとってもうそれは怖いものではなかった。

ゼロに侵入される快感。

サクの心を侵す快感。

サクとゼロは並んで痛みへ立ち向かっていった。

二人の内部の鼓動が高まると同時に、サクの世界の鼓動も高まっていった。

二人は互いの世界で幻想でしかなかった相手の身体を、そして魂を

貪りつくした。

サクとゼロの心臓が同時に激しく鳴った時、二人は爆発的な鼓動の波に吞まれていった。

血流がサクとゼロの身体には収まらず、血管を破って吹き出した。

血液は怒涛の流れとなって二人を押し流した。

ゼロはサクの心が流した血に直接触れる神聖に悲しいほどの悦びを感じた。

血の海に身をゆだねながら、サクは過去の傷が過去のものとなり、ゼロと共に未来に歩き出す準備ができたと思った。

血管の壁が崩壊し、サクとゼロの頭上を辺りが見えないほどに血の雨が降り注いだ。

赤い闇が崩れ落ちていった。

サクとゼロは手をつないで立ち上がった。

血の雨が上がり、新たなサクの世界が姿を現した。

美しい澄んだ水と緑の世界だった。

広大な海はどこまでも光り輝いて、蒼く、透明だった。

生い茂る木々は瑞々しく、太陽のような光球の光を受けて優しくゼロの風に揺れていた。

そこに生物はいなかった。

そこはどこまでもサクとゼロの楽園だった。

第六話 許せぬ同じ愛

「第六話 許せぬ同じ愛」

ゼロはサクと二人で寄り添っていたかったのだが、サクは何だか嬉しそうに動いていた。

サクの新たな美しい世界はどこまでも広く、穏やかな微風が流れ、優しい静けさに包まれていた。

この世界には色んな種類のきれいな実を付けた木があった。

サクは行ったり来たりして、様々な実を集めていた。

「何をしてるんだ」

ゼロは放っておかれるイライラから不機嫌に聞いた。

サクは集めた木の実のそばに座った。

「ただ見るために集めたの。きれいだから。何か作りたいな」

サクは色とりどりの実を選別し始めた。

ゼロはため息をつき、実をいじるサクに背を向け、物思いに沈んだ。

ゼロはサクに出会えた今も、リビエラが憎かった。

リビエラがいなかったら、今自分のそばにサクがいることはないという事実を忘れて、ゼロはリビエラを呪った。

リビエラがサクを愛しながらサクの肉体に触れていたという事実が、見ていることしかできないゼロを激しく戦慄させた。

サクを守り、サクのために怒り、サクと笑い合う、リビエラがサクと共にあった時間全てが憎かった。

リビエラがサクのために涙した、そのことでさえゼロは許せなかった。

自分以外の人間がサクのために激しく感情を突き動かされること自

体、ゼロは自分の不可侵の聖域を汚された気分だった。

「ねえ、ゼロ」

サクに話しかけられて、ゼロは我に返った。

しかしリビエラへの嫉妬と憎しみで鼓動が早くなり、めまいがしていた。

ゼロはサクに背を向けたまま、返事をしないで少し振り返った。

サクはゼロの異変に気づいたのか、無表情でじっとゼロを見つめた。

「どうしたんだ？」

やはりこの女に自分を隠すのは難しい、と思った。

ゼロは力無く微笑んでサクを見た。

サクとゼロの目が合った。

サクは立ち上がって静かにゼロの目の前に立った。

「ゼロはどうして私のことが好きなの？いつ私のことを知ったの？」

サクが突然聞いた。

ゼロの瞳孔が縮んだ。

逆光を背に、はかなげに、しかしはつきりとそう聞くサクに、ゼロは何故か胸が苦しくなるほどの切なさを感じた。

誰かがサクを愛する恐怖。

ゼロは何故か今それを切実に感じた。

サクが誰かを愛する恐怖ではなかった。

ゼロは金色の瞳でサクを呆然と見て、先ほどの問いに答えようとするわけでもなく、つぶやいた。

「お前は不思議な女だ…。

お前に何があるわけでもない。お前が特別な何かを言うわけでも、するわけでもない。

しかしお前という女は、何故か触れ合うだけで罪深いほどの悦びをオレに感じさせる。

処女神の身体と魂を自分の色に染め上げていくような卑しく淫らな、恐怖と隣り合わせの興奮。

お前の身体と心に自分の身を重ねる時の恐怖と悦楽だ。」

「いいか、サク。オレはお前に愛される者より、お前を愛する者の方が憎い。

なぜならばお前を愛することはオレだけの特権だからだ」

「何よ、それ。私を愛していいのはゼロだけってこと？誰が決めた

のよ？」

サクは半分笑いながら、嬉しそうに言った。

「オレだ」

ゼロは無表情で真面目に答えた。

ゼロは震える手でサクを抱きしめた。

極度の緊張と極度の安らぎが同時にゼロを刺した。

「お前は男も女も関係なく、他者を狂わせることになるだろう。

その者の中でお前の存在が膨らんでいくことが許せない。

どんな世界だろうと、例え他人の心の中であろうとその中でそいつがお前を自由にすることが許せない……！」

ゼロの目にリビエラの姿が浮かんだ。

サクを奪わないでと血の海の中で泣き叫んでいた……

サクは真っ赤になってゼロの胸に額を押し付けた。

「そ…それじゃあさっきの質問の答えになってないよ。ちゃんと答えてよ」

ゼロはサクを放した。

「それは…」

その時、風が強く鳴る音が聞こえた。

ゼロはとっさにサクを自分に引き寄せ、遠方を凝視した。

「何か来る…！」

サクにも見えた。

白いものと黒いものがゼロとサクへ向かって弾丸のように飛んでく

る。

「『シャドウ』と『スノウ』か！カイルの奴ここまで…」

「え？」

サクがゼロの方を向こうとした瞬間、爆風がサク達を襲った。

風が去り、サクがまともに物が見えるようになった時、目の前にいたのは美しいが異様な二人組だった。

まさに『シャドウ』と『スノウ』だった。

一人は雪のように白い長い髪に、白いローブ、白濁したような水色の瞳。

一人は影のように漆黒の瞳、黒い長い髪に、同じく黒い服を着ていた。

不気味なほど蒼白な顔に真っ赤な唇のその二人は、中性的でサクには性別が分からなかった。

目を見開いた死体のような顔つきで『スノウ』が喋り出した。

「ゼロ、カイル様がお呼びです。恋人のサクを連れて至急、カイル様の元へ」

ゼロは黙った。

サクがゼロの服をつかんだ。

「ゼロ、この人達誰？それにカイル…って？」

ゼロは質問には答えず、サクの肩を抱くように引き寄せ、イラついたように言った。

「オレ達のことはもう放っておくよう奴に言え」

すかさず『シャドウ』が感情のない一本調子で言った。

「放っておけないそうです。

ゼロがもし断ったら、私達の力でサクの世界をめっちゃくちゃに破壊してやれと言われました。

すぐに再生するでしょうが、視覚に訴えてゼロに多大なショックを与えるには充分だろうと。

だから…」

全部言い終わる前に、スパッと音だけ聞けば爽快な音がして、シャドウの首が飛んだ。

サクが悲鳴を上げてゼロにしがみついた。

しかしゼロはそれを振り払い、シャドウに近づいた。

一步一步近づくごとにシャドウの頭部に激しい風の斬撃が加えられた。

ズダダダッという音が何分間も続き、シャドウの顔面が完全に潰され、粉碎された眼球や脳が飛び散った。

「ゼロ……！ゼロ！やめてよ……！もうやめて……！」

サクは泣きながらゼロの冷酷な背中にすがりついた。

ゼロはサクを突き飛ばし、恐ろしいほどの無表情でシャドウの頭部を潰し続けた。

サクはスノウを見た。

こちらはこちらで異常だった。

スノウは相方が惨殺され、その死体が冒瀉されている光景を眺めていた。

しかしその顔は、まるで誰かが横でクッキングでもしているのを見るかのような、全く普通の顔つきだった。

スノウはおもむろに目をそらしたが、それは見ていられなくなったからではなく、ただ単に退屈しているからだだった。

サクの恐怖がゼロとスノウの異常ぶりを見ているうちに怒りに変わった。

サクはゼロに走り寄って、その長い銀髪を引っ張り、脚を思い切り蹴りつけた。

「やめなさいよ！！簡単にそんなことしないで！！」

ゼロは髪を引っ張られたことで立っているバランスを崩し、毒気を抜かれたようにサクを見た。

サクは怒り狂った顔で泣きながらゼロの顔や腹を殴った。

ゼロは啞然とサクを見ていたが、ふっと笑いサクにさせるままにした。

スノウはそんな光景を見るより、この世界の自然を鑑賞した方が楽しいとばかりに、サク達を見ることがなく木に触れたりしていた。

ゼロはサクの腕を優しくつかんだ。

「すまなかったな、サク。少し説明不足だったようだ」

「何がよ!？」

腕を不本意に押さえられて、サクが腹を立てながらゼロに怒鳴った。

「神界にいる者達は皆、神として不滅の肉体と命を持っているんだ。痛みを感じることも、出血もない。

オレも、お前もそうだ。あいつもそのうち再生が始まる」

「じゃあ何であんなことしたのよ?」

サクがゼロを睨んだ。

「あれは単なるオレの八つ当たりだ。
奴がバカなことを言って：何よりこいつらが土足でズカズカとオレとお前の世界に入ってきたんでな」

ゼロが髪をかきあげて、冷たい目でシャドウを見た。

サクもゼロの視線を追うように、めちゃくちゃになったシャドウを見た。

何だかグロテスクな音を立てながらシャドウの頭部が徐々に再生していき、最後に首と胴がつながった。

シャドウが全く何事もなかったように立ち上がり、事務口調でペラペラ喋り出したのを見て、サクはこの白黒二人組に馬鹿にされているような気分になった。

「では、とにかくゼロ。サクを連れてカイル様の所へ来て下さい。
カイル様はあなたの世界でお待ちです。

サクという守らねばならないものがある以上、あなたには選択肢はない。
ではまた」

シャドウとスノウは言うだけ言うと、二人して合図しあうこともなく同時に消えた。

サクはゼロを見た。

ゼロは心の中で絶望を感じながらも、サクを不安にさせないよう微笑んだ。

しかしサクにはゼロが務めてそうしているのがすぐ分かった。

サクは笑ってゼロの手を取った。

「ゼロ、こっち来て」

サクは木の実を集めた場所まで来て、ゼロと座った。

サクはゼロの手を握りしめた。

ゼロの手は汗ばんでひどく冷たかった。

その心の流れを邪魔しないように、ゼロの顔を見ずにサクは手をつたまま、もう一方の手で木の実をいじり始めた。

「ゼロはどれが好き？色とか。私の世界にこんなにきれいなのがたくさんあるなんて嬉しいな。」

サクは無表情で木の実を見ながら、おもむろに言った。

「神界って…何なの？私よく分からない。ここは私の心の世界って言ったよね。」

でもあの二人は赤の他人なのにここに来れた。

私はインフェルノにいた時は漠然と、神界って宮殿や花畑があって、そこでみんな仲良く暮らすみたいなの、そんなのを想像してた」

ゼロが笑った。

「それもあながち間違いではないな。」

心の世界のひとつとしてそういう世界もあるだろう。

神界は輪廻から外れて神となった者一人一人の、いくつもの姿の異なる心の世界で構成されている。

この、お前の世界もそのひとつだ。

そしてそれらを全てまとめて『神界グレイシス・グロリアス』と呼ぶんだ。」

「もちろん自分の心の世界にしかいられないわけではない。他者の心の世界と行き来することもできる。」

心の世界によっては神界の中心世界になり、大勢の神々がそこで交流し、インフェルノという大都市のような役割を果たしている場所もある。」

ゼロはため息をついて、少し笑った。

「オレの世界がそれだ。バカバカしいだろ？」

サクはじつとゼロを見て静かに聞いた。

「そしてそこに『カイル』って人が待ってるのね」

ゼロは少し黙った後、自嘲ぎみに言った。

「カイルは 그레이시스・グロリアスの神達を統べる神王だ」

サクは目を見開いた。

ゼロは無感情に言った。

「すまない、サク。奴がこの世界に使者まで送って、オレ達に来いと言うなら行かなくてはならない。オレ達には選択肢はないんだ」

サクは微笑んだ。

「うん。行こう、ゼロ」

それだけ言ってサクは立ち上がった。

疑問はたくさんあった。

カイルとはどんな者なのか。

それに、ゼロとカイルはシャドウ達の話聞いた感じ、かなり深い知り合いらしい。

しかし今は、とサクは思った。
今は聞く時ではない。

サクは生身のゼロと出会ってまだ少ししか経っていないがゼロのことはよく解った。

何も知らないサクが不安になる以上に、ゼロは知っているからこそ大きな不安を抱えている。

サクは精一杯笑ってゼロに手を差し出した。

「大丈夫だよ。ゼロは強いでしょ。でも私も強いから」

色んな意味の含まれたその言葉をゼロは理解した。

ゼロはサクの手を取り、立ち上がった。

第七話 影と雪の愛撫

「第七話 影と雪の愛撫」

「それで：あなたの世界に行く方法は？」
サクは風を感じながら、無感情に聞いた。

ゼロはおもむろに髪を抜いた。

「これを飲め」

「？」

「心の世界は基本的に頭の中で考えたことが具現化されたものだ。
髪は自分と相手の世界をつなぐ糸で、相手の髪を体内に取り込むこと
とでその者の世界に行くことができる」

「ゼロはどうやって私の世界に来たの？」

「神となった輪廻者はまず、身体だけはオレの世界に降臨する。
お前が死んでグレイシス・グロリアスに来た時、オレの世界にお前
が降臨するのが分かった。その後お前を探して髪を飲んだというわけ
だ」

髪を飲むというのは違和感があって不快な作業だと思っていたサク
はゼロの髪が口の中で溶けていくのを感じて驚いた。

次の瞬間、サクの世界が消えていった。

気がつくときサクは青光りする液体のような物質が静かに波打っている場所に倒れていた。

その世界は空中に大小の白いキューブがいくつも浮かび、それがいくつもの交差したまっすぐな道でつながれていた。

そこには様々な者がいた。

歩いている。話している。笑っている。

人型の者だけではない。

虫や動物達も神達と共通の言語を持ち、彼らと笑い合い、楽しそう

に交流していた。

これがゼロの世界か、とサクは思った。

しかしサクのそばにゼロの姿はなかった。

「ゼロ…？」

「ゼロはいません。我々が一足先にカイル様の所へ連れていきました」

先ほど聞いた声がして、サクは上を向いた。

シャドウとスノウが、何だかとてもひどい姿で立っていた。

二人共、身体や顔面がまだ再生中で眼球の周りの皮膚が無かったり、破れた服の隙間から躍動する内臓が見えたりしていた。

「こんな姿ですみません。ゼロの抵抗がひどかったもので。サクは後から我々が丁重にカイル様とゼロの所へ連れて行くと言ったんですが」

シャドウが精一杯、無表情を装った顔で言った。

「我々も弱いわけではないんですが、サクと離されて怒り狂ったゼロに五回粉々にされました。あなたは大人しくしてくれますね」

シャドウとスノウは今や無表情を保つのが難しいくらいにイライラが顔からにじみ出ていた。

何だか彼らが憎めなくなり、サクは少し笑って二人に言った。

「ホントにゼロの所に連れてってくれるの？」

「はい」

スノウが真顔でそれだけ言った。

サクは笑って二人の間に立ち、二人の手を握った。

「いいよ、行こう」

少し驚いた顔をしてサクを見るシャドウとスノウの目を見返し、サクが言った。

「空中を飛んで行くんでしょ。私飛ぶのが好き。早く連れて行って」

その言葉に応えるように、シャドウとスノウは全く同じ力でサクの手を強く握った。

三人はゼロの世界をカイルの牙城めざして飛び立った。

ゼロは両の手のひらを重ねるように釘付けにされ、その目の前には長い金髪の中性的な少年が立っていた。

シャドウとスノウも中性的だがこの少年も平らな胸が見える薄衣を着ていなかったら高貴な美女にしか見えなかった。

ゼロは心底疲れたように言った。

「カイル…もうオレ達の…オレのことは放っておいてくれ。このこ

とはもうどうしようもないんだ」

カイルは微笑んだ。

「そうだね。きみにはどうしようもないだろうね。でも、ボクだつてどうしようもないんだ。きみがボクから奪ったものを返してよ」

ゼロはカイルから目をそらした。

カイルはその途端に、乱暴にゼロの髪を引っ張りその顔を自分に向けてさせた。

「ボクから目をそらすな。今のきみには何をされても腹が立つ」

ゼロの頬にカイルの柔らかい吐息がかかった。

ゼロにキスせんばかりに顔を近づけ、カイルは邪悪なほど美しい顔でゼロにささやいた。

「サクの味はどうだった？」

優しくゼロの髪をもてあそびながらカイルが言った。

「唾液の味は？手のひらの熱さは？」

たたみかけるように興奮のあまり上気してカイルがささやいた。

「髪の毛濡れ方は？彼女の脚はどんな風にきみに悶えたの…！？」

ゼロはカイルの言葉が自分に入ってこないように目を閉じた。

「きみの心は…！？」

カイルが切なさを感じながら叫んだ。

「自分の愛撫に反応するサクを見るたび…きみは心の中でどんな風に泣いたの…！？」

> i 3 1 5 7 9 — 3 5 3 2 <

カイルは自分の胸をわしづかみにして笑った。

「きみの涙、ボクにも見せてよ。泣き叫んで歪むきみの顔が見たい。きみがボクから奪ったものを、ボクはきみの大切なものを奪うことで補完しよう」

ゼロはカイルを悲しそうに見つめた。

「カイル：お前はそんなに…」

カイルがその言葉をさえぎるように冷酷に言い放った。

「ゼロ、サクが来たよ」

ゼロの目に恐怖が走った。

ゼロは悔しそうに目を閉じた。

『大丈夫だよ。ゼロは強いでしょ。でも私も強いから』

ゼロは祈るようにその言葉を心の中で繰り返した。

カイルが虚空に向かって叫んだ。

「シャドウ、スノウ！サクを寝室に連れていけ！
そこでその女を好きなように『愛して』やんな。ゼロを忘れさせる
くらい激しく優しく悦ばせてやれ」

ゼロは憎々しげにカイルを見た。

カイルは鼻で笑った。

「安心しな、ゼロ。あのシャドウとスノウは変わっててね。相手の
胸や性器にはまるで関心がないんだ。

あいつらが好きなのは人間の四肢なんだよ。シャドウは腕、スノウ
は脚。

ただし愛着が凄すぎて、大抵いつも貪られた直後の相手は両手両足
がないダルマみたいになっちゃうけどね。

さあ、いってみようか！」

カイルの腕にボツという大きな音がし、黄色い光が巻きついた。

そしてそれをゼロと自分の目の前に放射するため、勢いよく腕を伸ばし人差し指で前方を差した。

光が放出され、やがてその光の中に違う空間が映し出された。

サクがいる…

シャドウとスノウはカイルのメッセージを聞いた。

まるで何の違和感もなく二人はサクを寝室に連れて行った。

その違和感のなさに、サクも何も疑問を感じず、当たり前のようにゼロの所へ行けるのだろうと普通に二人について行った。

それよりもサクがおかしいと感じていたのは、二人がいつまでもサクの手を握りしめて歩いていることだった。

拘束のためかとも思ったが、少し様子が違った。

二人のサクの手を握る力はとても優しく、まるで子が母の手を求めるような雰囲気を感じさせた。

空中から地上に降りた後、サクは何気なく二人の手を離そうとした。

しかし二人は力を入れるわけでもないが、何となくサクの手を離さなかった。

カイルの住まいに入って少し歩いた後、さすがにゼロに会うのが近くなっただろうとサクが予測して、口に出して「手を離すよ」と優しく言ってみたがだめだった。

その途端、二人は両側からサクを凝視した。

シャドウはサクの手が誰にも渡したくない宝であるかのように両手で丁寧に握り直し、自分の身体にくっつけた。

スノウはすました顔でサクとつないだ自分の手を、まるで恋人同士のように服のポケットに入れた。

何だかサクは両脇に親離れできない二人の大きい息子を連れているような気分になった。

三人はやがて黒い扉の前に来た。

シャドウが静かに扉を開けた。

サクは無理矢理二人の手を振り払い、部屋に入った。

「ゼロ…!?!」

そこは寝室で、もちろんゼロはいなかった。

サクが驚いて立ち尽くした後ろで、取っ手のない扉が音もなく閉まった。

まず、スノウが動いた。

スノウはサクの目の前に立ち、感情の全くない目でサクを見下ろした。

サクはその場から一步後ずさった。

スノウはゆっくりひれ伏すようにひざまずきながら、サクの脚にかすかに触れるように指を滑らせた。

スノウは自分の長い髪がからみついたサクの足の甲にキスをした。

その唇の触れた瞬間、サクはその場所に強い熱を感じた。

不思議だった。

サクの身体の感度が高まっているわけでもないのに、唇の柔らかい感触の触れた所が痛いほど熱かった。

スノウがひざまずく横からシャドウが優しくサクの手を取った。

シャドウが目を閉じ、サクの二の腕から手の甲まで、スノウと同じように指を軽く滑らせた。

シャドウはうつろな目でサクの指にキスをした。

サクは再びそこに高熱を感じた。

「なに…するの」

サクは目の前にいるシャドウを凝視した。

スノウの両手が愛おしそうに、サクを後ろから抱きしめた。

「あなたを少し暖めるだけです」

シャドウが片手で、スノウに抱かれたままのサクの背中に手を回し、その肩にキスをした。

「大丈夫。あなたを罪悪感に怯えさせるようなことは何も起きません。」

我々を怖がらないで」

サクは二人に前後から抱きしめられ、どうすればいいか分からなかった。

スノウがサクから離れた。

シャドウがサクを抱きしめたまま、ゆっくりサクの背中を撫で始め

た。

「大丈夫です、サク…大丈夫…」

シャドウの背中ของさすり方は力強く、優しく、とても気持ちよかった。

サクは背中を撫でられるのが好きだった。

しばらく目をつむってシャドウに身体を預けた。

サクは何かぼうつとして、シャドウの肩に顔をうずめた。

スノウが横から手にサクの髪をからませながら、その頭を撫でるのが分かった。

サクに触れるシャドウとスノウの冷たく固まった心が徐々に不思議な暖かい快感で満たされていた。

サクの鼓動する暖かい全身が、二人をだんだん性的な気分にならせていった。

つないで知ったサクの手のひらの感触が、彼らにサクの心を感じさせた。

そしてそのことがシャドウとスノウのサクに触れる手の感度を跳ね上げた。

あまりに情熱を感じさせるシャドウの手の心地よい熱さにサクの意識が遠のいていった。

シャドウはサクをベットに寝かせた。

サクの服の背中部分を開き、シャドウはサクの肉体をさすり続けた。

サクの目の前にスノウが座り、サクの手を握った。

「大丈夫？まだ怖いですか？」

サクはまどろみながら首を振った。

スノウの白い髪がサクの記憶を刺激した。

誰だっただろう。

サクを安心させる微笑み…

心地よい愛撫…

大丈夫だ…危険じゃない…

リ…ビ…

サクは意識を失った。

カイルはゼロと共に一連の出来事を見ていた。

少し驚いたようにカイルは笑った。

「何かあいつら本気になってる…本気で恋してるみたいだ…そんなの初めて見るよ」

「もう止めてくれ、カイル…」

カイルがゼロの方を見た。

「自分から止めに行かない所を見ると、分かっているみたいだね。今きみの手に刺さっている釘は『神の拘束具』だ。

刺さってる手のひらを切断して逃れることもできなくはないけど…やめた方がいいよ。大変なことになるから。

ボクは今まできみに一度もそれを経験させたことはないし」

最後の言葉をカイルはあざ笑うように言った。

「とにかくゆっくり一緒に鑑賞しようよ。愛情を感じているあいっ
らが、対象をどんな風に扱うのかは未知の領域だ。
楽しみだよ。

どの道きみには耐えられないだろうな。
きみが泣いたらその涙、ボクが優しくすすってあげるよ」

カイルがゾツとするほどの可愛さでゼロに笑いかけた。

ゼロは身体に走る静かな震えを抑えて、目を閉じた。

その闇の中で、ゼロは思った。

また自分の一部が冒読される。

サクを愛すること。

そしてサクそのものが。

今、ゼロはこの状況を作り出したカイルよりも、シャドウとスノウが強烈に憎かった。

第八話 命がけの乱舞

「第八話 命がけの乱舞」

> i 3 1 5 8 0 — 3 5 3 2 <

静かに眠るサクを見る二人の目は狂氣的に潤み、唇は蜜を塗ったように艶めいていた。

投げ出されたサクの腕と脚に二人はそれぞれ手のひらを巻きつけた。

シャドウもスノウもまばたきするのも忘れ、極限まで充血した目から涙が落ちた。

152

二人は五感全てを使い、サクの四肢を全身に感じた。

この二人に性感帯があるとすれば、それは身体にあるものではなく、この五感だった。

シャドウはサクの、脇から腕の全ての部分に鼻を滑らせ、その匂いをかいだ。

＞i27432—3532＜

開いた鼻腔に流れ込んだ、サクの身体の分泌物の匂いが、歪んだ愛欲をいやが上にも高めていった。

その匂いを舌で感じたいあまり、シャドウはめっちゃくちゃにサクの腕を舐めた。

舌にサクの汗の味と、腕の細やかな皮膚の起伏を感じた。

何にもましてサクの汚れの味がシャドウの頭を痺れさせ、その極上さに唾液腺から大量の唾液が流れた。

シャドウは狂喜のあまり絶叫した。

スノウは力強くサクの内股をつかんだ。

＞i27433—3532＜

その優しい柔らかさがまるでサクの心の感触のようで、スノウは感動に震えた。

スノウは思わずサクの脚に頬をすり寄せた。

太ももの感触、膝とそして膝下の骨の硬さ、美しい足首、足の指一本一本全てを、上気した頬で味わった。

その耳にサクの脚の血管の鼓動する音が聞こえた。

サクの肉体の深い所を感じた気がして、スノウは自分の肉体が強烈にサクの内部を欲するのを感じた。

サクの毛穴一つ一つに欲情し、そこからサクの味を吸い出そうと激しく動くシャドウに、サクの脚を陵辱しているスノウの腕がぶつかった。

シャドウはサクの愛撫に夢中になりながら、邪魔だとばかりにスノウの腕を激しく弾き飛ばした。

そのあまりの衝撃に、スノウの腕は切断され、空中を飛んでボトツとベッドの横に落ちた。

スノウは見もせず、気にも止めなかった。

サクの脚を愛せる悦びに浴し、スノウはひたすらサクの動脈を聴き、その骨や肉の硬さ、柔らかさを貪っていた。

二人の心臓は激しく動悸し、あまりの息切れに意識を失いそうになっていた。

シャドウとスノウはぼんやりしながら頭を上げた。

額と長い髪の中から汗がしたたった。

心地よい痺れが二人を最後の行為に向かわせた。

二人は震えながら涙ぐんで、サクの手足に悲しい歓喜の中、口づけした。

性器を愛さないこの二人にとって、キスというのは性交の挿入と同じ意味があった。

シャドウとスノウは唇に自分達の全魂をのせた。

まるで放たれた精子が卵子へ向かうように、二人の魂は凄まじい集

中力で、サクの魂へと全速力で向かっていった。

サクの魂を感じようと、肉体の限界を超えて祈り、集中する二人の身体が異常な熱を帯び始めた。

二人の体の細胞が激しく躍動し、血が、肉が、骨が高温の熱を放った。

唇が当たるサクの手足が焼けただれ始めた。

あまりの情熱の激烈さに、シャドウとスノウの全身の体液は、もはや沸点に達していた。

その魂がサクに向かい、速さを増した次の瞬間、激しい発熱により二人の肉体の皮膚がドロリと溶け出した。

液状化した皮膚がトロトロとベットに滴った。

ボトリ、ボトリと肉が液体のように落ち、二人の肉体が崩れていった。

それでも二人は目を閉じ、静かに、ひたすら自分達の魂を走らせた。

二人の暖かい肉片がサクの身体に流れた。

サクの寝息が乱れ始め、その心拍数が上がっていった。

スノウは素早くサクの性器に指を挿入した。

ついに二人は自分達の魂が、サクの肉体と魂を隔てる壁を突き破ったことを感じた。

スノウの指が、眠るサクの絶頂を感じ取った。

スノウが激しく立ち上がり、シャドウの髪の手をつかんで、その顔をつるし上げた。

そして自分のローブを剥ぎ取り、シャドウの口に自身の勃起した男根を突っ込んだ。

まるでシャドウの口がトイレであるかのように、スノウは当たり前のようにその中に射精した。

シャドウは口から滴るスノウの精液をぬぐいながら、下からスノウの髪をつかみ、その身体を引きずり倒した。

そしてスノウの顔を、物を扱うように乱暴に自分の股間に押し付けた。

スノウは従順に口にシャドウの男根をくわえ、その精液を飲み込んだ。

絶頂を終えても二人の溶解は止まらなかった。

二人の心は、絶頂が過ぎても冷めることなく、サクへの愛で高熱を放っていた。

そのために身体に走る熱は変わることなく二人を崩壊させていった。

シャドウとスノウは息を切らして互いを見た。

「後悔はないか？」

シャドウが言った。

「ああ」

スノウが答えた。

絶頂の衝撃でサクが目を覚ましていた。

「私…なんか…ゼロ…？」

サクの目に全身の溶け出したシャドウとスノウの姿が映った。

「しゃっ…シャドウ！？スノウ…！？」

サクはパニックになり、二人の最後に残った頭部に触れた。

「どうしたのよ！！な…何が…！？

早く再生して！！」

サクは何故か溢れる涙を止められなかった。

どこかで感じ取っていた。

二人の感触とそして…

この二人はおしまいなのではないかと…

「サク」

シャドウの溶け始めた頭部が優しく笑って言った。

「どんな夢を見ましたか」

スノウが明るく微笑んでたずねた。

「その中に私達はいましたか」

涙でかすんだサクの目にはもう、どちらが言っているのか分からない

かった。

サクは泣き叫んで二人の名を呼んだ。

二人の頭部が完全に溶解し、蒸発していった。

「シャドウ!! スノウ!!」

どんなに呼んでも二人は再生することもなく、永遠に消えた。

カイルは上気してシャドウとスノウの愛撫を見ていた。

「すごいね、あいつら…使い捨て戦闘人形のくせに…あんなに…」

カイルはゼロを見た。

ゼロは目を閉じていた。

自分以外の者がサクを愛撫していると思うだけで発狂しそうだった。

サクに意識がないのがせめてもの救いだと思った。

カイルはゼロの頬をわしづかみにして、叫んだ。

「ほら、見ろよ！一緒に興奮しようよ！！！」

ゼロは目を開け、カイルをじっと見た。

「カイル」

カイルは真顔になってゼロを見た。

ゼロは静かに言った。

「何が望みだ？」

「きみの傷」

ある種、呆然としたような顔でカイルが言った。

「どうすればお前に許される」

カイルの顔が怒りに歪んだ。

憎しみにまかせてカイルは嘲るように笑った。

「泣き叫べ。髪を振り乱して、歯噛みして悔しがれ。死ぬほどみじめになれ！
ボクがきみのせいでそうなったように！！！」

ゼロは再び目をつむった。

「すまない、カイル」

ゼロの風が鳴った。

ズバツという音がして、ゼロの命令を受けた風の刃が、主人の両腕を根元から切断した。

カイルが驚いて一、二歩後ずさった。

ゼロはすぐに神の拘束具が与えるある変化に気づいた。

その一つとして腕を再生させることができなかった。

しかし気にならなかった。

立ちつくすカイルを無視してゼロは走り出した。

ここが自分の心の世界である以上、ゼロに分からないことはなかった。

サクが連れて行かれた寝室へ向かい、ゼロは走った。

爆風で黒い扉を破壊してゼロは寝室へ飛び込んだ。

半裸のサクがシャドウとスノウの二枚のローブを抱きしめて震えていた。

サクが顔を上げた。

ゼロはサクに駆け寄った。

サクが泣き叫んでゼロにすがりついた。

「サク…」

両腕を失ったゼロはサクを抱きしめることも出来なかった。

サクは泣きながらゼロに必死に訴えた。

「どうしてこんなに悲しいのか分からないの！

あの二人が私に何をしたのか分からない。それなのに強烈にあの二人が恋しいの。

あまりにも心に鮮明に存在して、消えない。

私は…何をされたの…！？」

ゼロは悲しそうに笑ってサクの髪に頬を寄せた。

「あいつらが憎いよ。

あいつらはお前を愛したんだ。あまりにも激しく。

愛しいだろう。悲しいだろう。

あいつらは確かにそれだけのものをお前に残していったんだ。

今はあの二人を想い、泣きたいだけ泣くがいい」

この差はなんだろう、とゼロは自分にすがり泣いているサクを見ながら思った。

両腕が無く、抱きしめてなぐさめることもできない自分。

それにひきかえ、魂をかけてサクにこれほどの想いを残していったシャドウとスノウ。

ゼロはもう心の中でサクと共に泣いていた。

お前らは贅沢だな…

ゼロなりの二人への賛辞と追悼だった。

声がした。

「ごめんね、サク。あいつらがあんなにもろいとは知らなかったよ。元々ボクの身辺警護のための使い捨ての人形で、普通の神とは違って不滅じゃないんだけど」

カイルとサクの目が合った。

「今更ながら神界へようこそ。
神王のカイル・セヴェリオ・グレイスです」

カイルが無邪気に笑った。

「あいつら多分興奮しすぎて、体中の細胞の核が暴走したんだ。大丈夫、変わりはいくらでもいるから。
シャドウ、スノウ！」

この状況に不謹慎なほどあっけらかんと、カイルがどうでもよさそうに呼んだ。

すぐに壊れた扉をまたいで二人が入ってきた。

『新しい』シャドウとスノウは無機質に立ち、サクを見ることもなかった。

サクは一縷の希望を胸に二人を呼んだ。

「シャドウ、スノウ？」

二人は感情のない目でサクの方を見た。

「はい」

「何でしょうか」

乾いた声でそう言う二人には、サクを愛撫した、かつてのシャドウとスノウの魂はもうなかった。

サクは理屈抜きの悲しみに絶叫して、泣きながらカイルを胸ぐらをつかみ、壁に叩きつけた。

その心にシャドウとスノウとつないだ手の感触が蘇った。

二人の手は暖かく、優しく、愛を求める子どものようにサクを求めてきた。

「どうして…!!? どうしてなのよ!!」

使い捨ての人形って言うなら何で心を持たせたりしたのよ!!
あんたはあの子達が愛することも痛むこともずっと無視して使いっ走りにしてきたんでしょ!!」

カイルの目が一瞬、潤むように光った。

しかしすぐに面倒くさそうにサクを振り払って言った。

「知らないよ：ボクに言われても。
あいつらが消えたのはボクのせいじゃないだろ」

サクが更にカイルに食ってかかろうとしたその時だった。

ガタツと音がして、ゼロが倒れた。

「ゼロ？」

サクは目を見開いてゼロの横にしゃがんだ。

「どうしたの…!？」

ゼロは激しく震えていた。

表情は生気を失い、身体は冷たかった。

ゼロはサクに向かい、少し笑った。

「ぜ…ゼロ…？」

ゼロを凝視しながら、サクも震え始めた。

怖かった。

自分を愛してくれたシャドウとスノウが『死んだ』後に、また愛する者が危機に陥っている。

ゼロはそんなサクの不安を察して微笑んだ。

「サク、オレは大丈夫だ…不安になるな…」

そんな二人の想いを愚弄するようにカイルが嬉しそうに笑った。

「いよいよ来たね、ゼロ！神の拘束具から逃れた反動が！
そもそも腕を切断してから今まで耐えたのも奇跡だ！

サクの前でどれだけ醜態をさらせずにいられるか、見物させてもら
うよ」

その時笑うカイルの表情は、傲慢な美女が自分以下の不細工な者をあざけり笑うようないやらしさがあった。

サクはカイルを思い切り張り倒してやりたい衝動に駆られた。

第九話 割れた鏡の時計

「第九話 割れた鏡の時計」

「神の拘束具って何？」

思い切り軽蔑した目でカイルを見ながらサクが聞いた。

カイルも負けず劣らず、人をバカにした目つきでサクを見た。

「知りたい？」

サクは荒々しくカイルの前髪をわしづかみにした。

「ふざけんじゃないわよ。

あんた、何なの？」

神王だか何だか知らないけど、聞かれたことには一秒と間置かずに答える」

カイルがにっこり笑った。

「サクって素直な時はかわいいのに、一歩外れるとホント、クソみたいになるね」

ヒュッと音がしてサクの手がカイルの頬に飛んだ。

しかしカイルはサクが自分を張る前に、余裕でその手をつかんだ。

サクの腕を放り投げるようにして放しながらカイルが言った。

「ごめんね、サク。ボクって人を傷つけるのは好きだけど、自分は毛ほども傷つけられたくないんだ」

そのあまりのいけしゃあしやあとした言葉に半分啞然としてサクが言った。

「どうしてあんたみたいなのが神王なの？そもそも人として生きる価値さえないんじゃない？」

「じゃあ殺してみる？別にこの魂に未練ないしさ」

「なら勝手に自殺しなさいよ」

イヤミの応酬が続いたあと、カイルは横たわるゼロをチラリと見た。

「話の続きは大広間でやろう。サク、ゼロを連れてきて。ボクは先に行ってるよ。」

シャドウとスノウはもういい。

じゃあね、サク。

苦勞してそいつ引きずってきな」

カイルは綺麗な顔でニヤつきながらゼロを見下ろした。

ゼロとカイルの目が合うのを見たサクは、カイルの華奢な身体を力一杯蹴りつけて、骨を何本か折ってやりたいと思った。

サクを一瞥すると、カイルは部屋を出ていった。

サクはゼロの肩に触れた。

ゼロに色々聞きたかった。

どうしてこんなことになったのか。

どんな風に苦しいのか。

ゼロはサクの問いに答えなかったことはなかった。

だからこそサクは何も聞かず、ゼロの脇を抱えて起こした。

ゼロは震えていた。

「大丈夫よ、ゼロ。行こう」

ゼロが答えられない状況にいる今、カイルに聞くしかない。

サクはゼロと共に大広間へ向かった。

大広間の扉を開けると、カイルが退屈そうに最奥に座っていた。

サクはカイルを見ることもなく、ゼロを壁に寄りかからせて座らせた。

ゼロは汗ばんだうつろな目でサクを見上げた。

弱ったゼロは何か官能的でサクはゼロの首にかぶりつくようにキスをした。

「サク、ゼロに今抱かれない？」

サクは静かにカイルを見た。

「教えてよ、サク。この腕は!!」

カイルが横にぶら下がった釘付けされたゼロの腕をつかんだ。

怒気を含んだ声でカイルが叫んだ。

「どんな風にきみをかき回した!？」

きみの五臓六腑はそれにどんな風に癒された!？」

カイルが笑い、怒涛のように話し出した。

「サク、今ゼロが感じている苦しみは『痛み』だ。

知っての通り、神界では痛みを感じない。しかし『神の拘束具』とは、神王のみが使える唯一、神に肉体的な痛みを与えることができるものだ。」

「拘束具の釘が刺さっただけでは痛みはない。

しかし神の拘束具をどんな形であれ、力づくで逃れると拘束者の意思でそれを外さない限り、神罰として永劫に再生せず、逃れた時の傷が通常の千倍の痛みで疼く!

通常とは」

カイルは咄然とするサクと表情の见えないゼロを全く無視して高らかに続けた。

「インフェルノで同じ傷を受けた時の痛み！！

腕切断って普通でもかなり痛いよね！

あはは、頑張れ、ゼロ！！

この痛みは神をも狂わせる！

サクの前で泡吹いて、全身痙攣の果てに射精しちゃえ！

その快楽が痛みを少し和らげてくれるかもよ！」

自分の罵詈雑言に爆笑しているカイルを静かに見てサクは立ち上がった。

カイルが少し笑うのをやめた。

サクはカイルに近づいていった。

その迷いのない一步一步に、カイルは微妙に怯えた顔をした。

サクは座っているカイルの前に立ち、カイルを見下ろした。

「何、サク？」

カイルは汗ばんだ手を握りしめた。

その途端サクはカイルの胸ぐらをつかみ、その身体を引きずり上げた。

啞然として、感受性の強い瞳を震わせるカイルを、サクはじっと見つめた。

サクはおもむろにカイルに顔を近づけた。

カイルはビクツと痙攣してサクを凝視した。

静まり返った部屋で、カイルの心臓が鳴るのがサクの耳に聞こえた。

サクの唇がカイルの唇に触れそうになった。

カイルは恐ろしそうに目を閉じた。

その時、プツンと音がしてサクがカイルの前髪を抜いた。

カイルが驚いて目を開けた時、サクはカイルを放り捨てるように、乱暴に手を放していた。

サクはゼロのそばに戻ってひざまずき、その目を見た。

「ゼロ、あなたはこれから私の世界へ行くのよ。あなたの痛みは私の世界が和らげるわ」

ゼロの痛みは神罰で絶対的なものだとなっていたがサクは必ず自分の世界がゼロを癒せるという確信があった。

ゼロは静かに聞いた。

「お前はとうするんだ」

「私は」

サクは自分の髪を抜き、ゼロに渡した。

「こいつに拘束具を外させるわ。どんな手を使ってでも」

「武器もないのか？」

ゼロは微笑んだ。
そうは言ったがゼロには分かっていた。

「大丈夫よ」

サクはゼロの切断された腕に微かに触れた。

その瞬間ゼロは安らかな眠気に包まれた。

サクは先程抜いたカイルの髪の毛を握りしめた。

「私にはあなたに救われたこの心があるわ」

ゼロはしばらく黙ったのち頷き、サクの髪を飲んだ。

穏やかに息絶えるように目を閉じ、ゼロはカイルの世界に肉体を残し、サクの世界へ行った。

サクはカイルを見据えた。

カイルもかったるそうにサクを見た。

「あんたの世界に行くわ」

「ああ、そっか。それだと以外と事は簡単かもな」

カイルは天井を仰ぎ、誰に言うともなく言った。

「じゃあ、おいでよ」

サクは口にカイルの髪を入れた。

最後にサクが見たカイルの顔は何故か、自分に対して理不尽な仕打ちをする親を見る小さな子どものような、非常に強い何かを訴えかける表情をしていた。

美しいブルーグレイの瞳がサクの心に残った。

> i 3 1 5 7 9 — 3 5 3 2 <

気が付くとサクは周りを割れた鏡で囲まれた空間をゆっくり落下していた。

そこには割れた破片一つ一つに違う者の顔が映っていた。

地に足がついた時サクは大きな円盤の割れた鏡の上に立っていた。

よく見るとそれは時計だった。

秒針がなく長針と短針がもうすぐ12を指す所まで来ていた。

その円盤鏡の割れた破片はどれも大きく、5つに別れて5人の、おそらく神が映っていた。

サクは、カイルの世界にいる神々というのは、ゼロの世界にいた者達が普通に歩いていたように、ここでは鏡に映って現れるのかと思った。

ふと見るとちょうど12時を指す所の正面にみすばらしい扉があった。そこだけがこの世界で鏡ではない造りだった。

他に何も思い付かなかったのでサクはその扉を開けた。

そこに広がっていたのは不気味な光景だった。

完全に円形に12人の人間が一定の間隔を空けて立っている。

いや人間ではないのかもしれない。

彼らは皆裸で乳房もないが男根もなかった。

頭部に布を巻き付けられ、顔が分からないどころか、その布には見るための穴も呼吸するための穴も空いていなかった。

全員がまるでコピーしたかのように、全く同じ角度で円の中心に向かってじつとうなだれている。

全員が全員、両手をだらんと下げ、やや深めに腰を折る姿にサクは

異様な気持ち悪さを感じた。

誰も喋らず、呼吸すらしていないかのような静けさだった。

ここは荒らしてはいけない場所だ。

そう直感し、サクは扉を閉めた。

どうしようかと迷っているとサクに呼びかける声がした。

女性の声だった。

「どうしたのですか？ここに何をしに来たの？」

割れた鏡の破片に映る美しい女性がサクに笑いかけた。

ゆるいウェーブの髪に小さいブドウや野いちごなどの植物がたくさん飾られている。

「農耕の神ハーヴェストです。我々の世界へようこそ」

「我々の世界？」

サクは思わず聞いた。

「ここはカイルの世界でしょ？」

「カイル？」

美しいブロンドの目の大きい子どもの神が無邪気に言った。

「カイル・セヴェリオ・グレイスか？その名、久々に聞くな」
黒髪に金の兜の男神が事もなげに言った。

「あはは、僕ほとんど忘れてました」
子どもの神が高い声で笑った。

「カイルはただの我々の器なのだよ。奴の心に住む我ら司天地五神を始めとする、様々な神々が奴に指示を出し、力を貸すことで奴はグレイシス・グロリアスを統治しているのだ」
半分が絹のような白い髪と、もう半分の黒髪が右左に別れていて、前髪が完全に両目を覆っている女神が言った。

「僕は愛と交合の神、ジェラストです」
子どもの神がニコツと笑った。

「戦を司る神、ブレイバル」
黒髪の男神がガサガサの声で言った。

「裁きの神、ジメンティスだ」
黒と白の髪の女神が言った。

「さっきも言ったけど私は農耕の女神よ」ハーヴェストがサクに手を振った。

そして最後の神はやや紫がかった長い黒髪が全身を覆い隠し、顔も体も分からない。

その神がもったりした声で言った。

「運命の神、エンドラ」

「そしてあなたはゼロの恋人の新しい女神、サクね。ここにはめったなことがない限り訪問者はいないのよ。よほどのことがあったの？」

「あの…」

サクは口ごもった。

「大丈夫だ。緊張することはないよ。何でも言ってみなさい」女神ジメンティスが優しく言った。

正直な所サクが感じていたのは緊張ではなかった。

おそらく彼らに頼めばカイルの意思を変え、ゼロを助けるのは簡単かもしれない。

しかし彼らのカイルに対する考え方が妙に引っかかった。

名前を忘れるほど軽んじ、例えば事実上彼らが神界を支配しているとはいえ、カイルの心をまるで我が物のように扱っている彼らにサクは何か違和感を感じずにはいられなかった。

こんなことを感じるのは自分がつい最近まで輪廻者だったからかもしれないが。

その時カチツという音がして時計の両針が12を指した。

低い鐘の音が何度も鳴り響いた。

「『食事』の時間だな」
ブレイバルが言った。

「じゃあ行きましょうか」
愛の神ジェラストがそう言うのと5人の神がそれぞれの破片の上にすうっと姿を現した。

「これからみんなで晚餐をするのよ。あなたもいらっしやいな」

「我々の食事に部外者が入るのは初めてかもな。大丈夫か？」
ジメンティスが言った。

「別に大したことをするわけでもない。いつものことであろう。誰が参加しようと我々のすることは変わらぬ」

ブレイバルはそう言うとき計の12の反対側にある6の前にある豪華な装飾が施された鏡の扉を開けた。

この扉の鏡には誰も映っていなかった。

ハーヴェストがサクに笑いかけ、サクは5人に続き、恐る恐る扉に入って行った。

そこはやはり割れた鏡に囲まれた部屋で、先程の扉と違い様々な者達の顔が映っていた。

そこに映っている者達は皆、五神が入ってくると話をやめ、彼らを敬うように視線を下に落とした。

真ん中に大きな長方形の机があった。

椅子は五脚あり、それぞれの神が椅子に座った。

特に何も言われなかったので、サクは隅になんとなく立っていた。しばらくは何も起こらなかった。誰もなにも喋らず、じっとしていた。

扉が開いた。

そしてサクが来た時、最初に開けた扉の中にいたあの不気味な、頭部に布を巻いた裸の人間が一人入ってきた。

神達はそちらを見ることもなく、ただ座っていた。

その人間は机の前に立ち、おもむろに机の上によじ登り、そこに自分の身体をさらすように静かに仰向けに寝そべった。

サクは首筋がザワツとした。

神達は無言で立ち上がり、五人一緒に身を屈めその人間の身体に口づけた。

そして次の瞬間その場所の肉を噛みちぎった。

噛まれた場所からは血がほとばしり出た。

人間は悲鳴は上げなかったが身体を大きく反らせた。

神の世界では傷を受けても痛みはないし、血も出ない。

しかしこの者が明らかに激烈な痛みを感じているのがサクには分かった。

神達は人間の肉を狂気的な悦楽の表情で貪っていた。

ブレイバルとエンドラが、あれほど美しく見えたハーヴェストとジェラストが、冷静そうなジメンティスが、我を忘れて猛烈なスピードで食べている。

「ねえ、頭食べたいです。布取るよ」

ジェラストが乱暴に頭部の布を剥ぎ取った。

サラリとした金髪の髪がこぼれた。

そして激痛を感じるあまり飛び出しそうなブルーグレイの瞳…

カイルだ…

どうしてここにカイルが？

カイルはゼロの世界にいた・・・

そう思うより先に、サクは飛び出して止めようとした。

しかしその途端頑丈なロープがサクの全身に巻きついた。

「邪魔をするな」

ブレイバルが食する興奮のあまり、笑いを含んだ声で言った。

カイルの口からは内臓の損傷のせいで血がゴボツゴボツという音と共に大量に溢れ、脳を噛みちぎられたために両目両鼻からは止めどなく血が流れ出していた。

狂った五神がカイルの肉を引きちぎる度に大量の血が周りの鏡に飛び散り、その血を鏡に映る神達が狂喜して舐めた。

サクの中でこの光景が自分の世界でゼロに助けられる前の自分と重なった。

喰われているカイルは本物のカイルではないのかも知れない。

しかし傷みを感じているのだ。

それを無視され、こんな風にむごい目にあっているカイルをサクは何としても助けたかった。

ロープの中でサクは暴れた。

サクは自分の目からもカイルと同じように血の涙が流れてくるのも
気付かず、徐々になくなっていくカイルの肉体を見ていた。

頭部は完全に喰い尽くされていた。

もはやカイルは泣くことも助けを求めることも連中によって奪われ
たのだ。

サクはどうしようもなくおどましく悲しいこの状況の恐ろしさに凄
まじい悲鳴をあげた。

第十話 白い花の上の真実

「第十話 白い花の上の真実」

サクは身体が怒りで痛みを感じるほど神経が張りつめ、そして心が崩壊するほどの勢いで祈っていた。

私の世界よ、力を貸して。

癒やす力を。理不尽さを破る力を。

私にはその力がある…

サクはもはや神達に喰われているカイルが助けようもないことなど考えてはいなかった。

自分が解放された所でこの状況を変えることも、ましてや五神に復讐をすることなどできないということも頭には無かった。

何でもいいからカイルの所へ行きたかった。

その時サクの目の前にサクの世界が広がった。

そして次の瞬間、世界を照らす炎の光球から一滴の雫がサクの頭に落ちた。

すぐに世界が戻った。

神達がカイルを貪り喰っている。

隙間からカイルの細い腕が残っているのが見えた。

サクは前へ進もうとがいた。

血の涙が流れ、ロープに滴り落ちた。

するとその血痕から炎が燃え上がった。

炎はサクの身体を包み込みロープが一部焼き切れた。

全てが切れるのもどかしくサクは炎をまとい、走った。

炎はロープをあつという間に炭にし、サクの服を顔を肉を焦がした。サクはカイルに群がる神達を押しつけ、そこにあった一番大きな肉片である肘から下の腕をつかんだ。

「それをよこせ」

もはやどの神が言ったのか分からなかった。

全員が自分達の食い物を奪ったサクを呪いの表情で見っていた。

サクはカイルの片腕をかき抱き叫んだ。

血の涙が炎によって蒸発することなく飛び散った。

「どうしてこんなことするのよ！あんたたちは何なのよ！ここはカイルの心よ！！」

サクの声は怒りと悲しみで激しく震えていた。

カイルの腕は炎の中でも冷たく、しかしまだ生きていた。

腕は、痛みを感じているかのようにぶるぶる震え、まるで恐怖を感じた子どもが親にしがみつくかのようにサクの服を強くにぎりしめた。

その様は腕だけになってなお「助けて」と絶叫しているようだった。

「そんなことをして何の意味がある？ そんな肉片を守ってどうするのだ？

お前の望んでいることは何一つ叶わぬ。それを渡せ」

サクはきつくカイルの腕を抱きしめた。

カイルの腕はますます保護を求めるようにサクにすがった。

「渡さないわ…例え無意味でも。意味があるのよ！ 私にもカイルにも…！！」

五神がゆらりとサクを取り囲んだ。

「魂ごところで果てる覚悟があるということだな」

サクは神達を見つめた。

そしてカイルの腕に向かって微笑んだ。

「お願いよ、カイル。ゼロの拘束具を外してあげて。それから私が
：愛してるって伝えてね」

五神が一斉にサクに向かって手をのばした。

サクの炎が、彼らに立ち向かうように激しく燃え上がった。

その時カイルの世界が砂のごとく流れ、消え去った。

サクは何が起こったのか分からず周りを見回した。

ゼロの世界だった。

炎も消えている。

ガタンという大きな音がした。

サクはカイルを見た。

その視線の横で神の拘束具である釘が床に転がり、ゼロの腕もそのまま落下した。

カイルは目を大きく見開き、かおを真っ赤にしてぼたぼた涙を滴らせながらサクを凝視していた。

しばらく二人は言葉もなく見つめ合っていた。

やはりゼロの世界にいるカイルは無傷だった。
しかしカイル本人の世界のカイルは・・・

サクは訳が分からなかった。

「カイル…」

カイルが訴えかけるように身を乗り出した。

しかしサクを見ているのがつらくなったのか天井を仰いで、溢れる涙を止めることも出来ず、絶叫するように号泣した。

サクはそんなカイルに何かを聞くことも、抱きしめることもできなかった。

「サク…もう…行つて」

激しくしゃくりあげながらカイルが言った。

「きみを見ていたくない」

サクはカイルの目を見た。

涙が溢れる曇り空のようなブルーグレイの瞳にはサクの姿がはっきり映っていた。

サクは二、三步後ずさりして踵を返し、ゼロの腕を肩に回して抱え上げ、カイルの部屋を出た。

外に出てカイルの住処からなるべく遠ざかった時ゼロを下ろし、目

をつむった。

早くゼロに会い、ゼロにカイルの事実を聞いたかった。

カイルの世界で一瞬だが自分の世界に戻った時のことを思い出した。

自分の世界へ行く方法は分かっている。

ただ望めばいい。

自分の世界へ：

途端に周りの景色が砂と消えた。

サクは草木が生い茂った水辺に立っていた。

その先に広がる湖は海のように大きい。

湖の中心に不思議なものが立っていた。

白い花が咲き乱れる高い木のようなのである。

サクがそれを見上げると足下の草が盛り上がった。

草が急速に成長し、白い花をつけ、やがて茎や葉や花が絡まり合いながら土台となって、どんどん上へと伸びてサクを高みへ運んで行った。

かなり高い所へ来ると茎や葉の成長が止まり、足元に白い花が咲き乱れた。

そしてサクを導くように遠くにある木に向かって、白い花の道がどんどん伸びていった。

サクが一步一步、道を踏みしめて歩くと花びらが舞い上がった。

長い道のりだった。

もしかしたら永遠にどこにも着かないのではないかと思い始めた時、影の中に入った。

木に見えたものは木ではなかった。

サクをここまで高くに連れて来たせり上がった地と同じ、天に伸びた大地がもうひとつそこにはあった。

白い花がそこにいる誰かをそつといたわるように天上に咲き乱れ、光を遮り、そして地には白い絨毯のように柔らかい花が何重にも咲き、爽やかな芳香を放っていた。

その中心にはゼロが倒れていた。

白い花に囲まれて眠るゼロの姿は美しくも悲壮感があった。

「ゼロ…」

腕は再生していた。

サクはゼロの顔にかかった髪に触れた。

汗で濡れていた。

「起きて」

ゼロは浅い眠りから覚めるように、目を開いた。

そして少しぼうつとした後、再生した腕を見た。

「戻っているな…」

ゼロがぼんやり笑った。

「お前はやはり不思議な女だな…昔から」

「あれから大丈夫だった？」

「ああ」

「お前がオレの腕に触れたのを覚えているか？」

あれから痛みを超えて眠くなつてな。お前の世界に来てさまよっているうちに、この湖に出た。

ここの澄んだ水のあまりの美しさに思わず触れみたくなったんだ。湖に入って、その時気を失った。

ここは…何だ？」

サクが悲しそうに笑った。

「2人の世界よ」

「それはこの世界全てを言う」

ゼロが起き上がりながら当たり前前のことを言うように言った。

「じゃあ、その世界の中心ね」

2人は笑いながら抱き合った。

「お前はあの後どうしたんだ？どうやってカイルを説得した？」

サクは黙っていた。

ゼロは何となくサクの考えていることが分かったらしく、答えを急がず、花の上に寝転んだ。

ここに来てサクは迷っていた。

カイルの心の世界で起きていることは尋常ならざることだ。

サクは事実を知りたかったし、ゼロはある程度は教えてくれるだろ

う。

しかし自分の心のどこかに好奇心があることにサクは嫌悪感を感じた。

尋常ならざることだからこそ、こんな気持ちで聞くのは許されないだろうと思った。

カイルは泣いていた。

あのカイルをあれほど無防備に号泣させてしまうほどの事実である。

カイルはサクがそれを知ることを許すだろうか？

そしてゼロに聞いた時にゼロがカイルをバカにした態度をとるのを見るのも、今のサクには耐えられなかった。

あれほどの仕打ちを受け、サクがゼロの世界に戻ってきた時のカイルを思い出すと、胸が痛くなった。

「ゼロ…」

「ん？」

サクはまた黙った。
どう聞けばいいのか分からなかった。

「カイルの心に入り、『あれ』を見たんだな」

ゼロはしばらくの沈黙ののち静かに言った。

「お前がお前だからこそ…きっと大変な思いをしたことだろうな」

サクはゼロを見た。

ゼロは笑っていなかった。

サクの目に涙があふれた。

思わず言葉がほとばしり出た。

「カイルは泣いてた。泣いていたのよ。

あいつらにめちゃくちゃにされてなお、残った肉片は私にすぎた。
ここは痛みを感じない世界なのにどうしてカイルは…！？ 一体何が
起こっているのよ…！」

「そうだな…」

ゼロが起き上がったため息をついた。

「サク、オレはな、他人の世界に入ったことがほとんどない。人の心の世界に入るといことがあまり好きではないからだ。しかし今までお前の世界を含めて、大抵の心の世界というものはとも広く、そして当たり前だが一つの心が現す世界は、本人を中心とする一つだけだ」

「でもカイルの世界では違う神が『ここは我らの世界』と…」

「そうだ。オレもあいつの心の世界に一度だけ入ったことがあるが…あんなのは心ではない。

カイルの世界と言うがカイルの居場所はどこにもない。強いて言えばあの『カイルの分身』がいる小部屋の中だけだ。しかしな、サク。それは歴代神王の宿命なのだ。」

「このグレイシス・グロリアスには二種の神が存在する。

一つは輪廻を超えた輪廻者、そしてもうひとつはインフェルノが誕生する前にグレイシス・グロリアスで生まれた純粹な神だ。

その神々はオレやお前のように触れられる肉体を持たない。」

ゼロが話しを続けた。

「純粋な神というのは元輪廻者と違って、何かを司っていたり、強大な力を持っている。

しかし肉体を持たないゆえ、姿の見える者達に命令したり、会話することができない。

要は影響できないんだ。

そこで彼らは神王となる者の心の中に住み着き、その代価としてグレイシス・グロリアスを統治する力を貸す」

「姿の见えない神を心に住まわせる……ってどういうこと？それにカイルって輪廻者だったの？」

ゼロはサクを真剣な目つきで見た。

しばらく黙ったあと再び語り出した。

「インフェルノにある一つの種族がいる。

連中は美しく、両性具有で、その神秘的な雰囲気から神の子どもと呼ばれる。

この種族はグレイシス・グロリアスとの盟約により神王となる者を造り上げる。

心に神を宿す器を育てるのだ。……とても」

ゼロは言葉を切った。

視線を下に落とした後、再びサクを見た。

「…残虐なことをする。サク、お前は多重人格というのを知っているか」

サクは戦慄した。

まさか神を心に宿すということは…

「姿のない神は普通の心の世界では存在できない。

見えざる神々を己の心の世界で見ることができなければ、影響を受け、力を得ることはできない。

そして奴らを見るためには自分の世界に自分の心とは別に、彼ら一人一人の心の世界を造るということをしなければならんだ。そこで多重人格という分断された心の器が必要となる。

神の子どもがインフェルノで完全に心を分断されて、輪廻者として輪廻を超えて死んだとき主人格以外は消滅し、人としての別人格に代わり見えざる神々がその心の空洞に住み自分の世界を創造するのだ。

その一つ一つの心の断片が奴らの居場所であり、神王はその居場所を提供できる者でないとだめなんだ。」

サクの顔のこわばりを見て、ゼロはおぞましい事実を語り始めた。

「そうだ。神の子どもは後に神王になって神を宿した時に、その心の中で神達が独自に自分達の世界を築けるようにインフェルノにい

る時に心を完全に分断される。
人為的に多重人格者として造り上げられるのだ。
小さい頃から残虐な行為をその身に受け心を壊される。
そして大抵の者は神王になどなれず輪廻を繰り返す。
当たり前だ。そんなことをされて神界に来れるような心が育つはずがない。しかし…」

「カイルね…」

どうしてこんなことが許されるのか、サクは吐き気を催しながら考えていた。

カイルは輪廻を超えた。

しかしまだ苦しみは続いているのだ。

インフェルノでは虐待で心を侵され、グレイシス・グロリアスでは迎えた神々によって魂を侵される。

サクはかつてカイルが言っていた『この魂に未練はない』という言葉葉の意味が分かった気がした。

第十一話 執念の始まり

「第十一話 執念の始まり」

「カイルがどのようにして輪廻を超えたのかは知らんが、恐らくそんな者は何百年…いや何千年に一人出るかといった所だろう」

2人は沈黙した。

もう身の毛がよだつ事実を聞くのは嫌だったがサクにはもうひとつの大きな疑問があった。

神達のカイルに対する行動である。

サクには、このことが再びぞつとする事実をもたらすことが簡単に予測できた。

「司天地五神…あいつらは…あいつらはなぜあんな…?」

「これもまた異常な話になる」
ゼロが疲れたように言った。

「神界には本来苦痛というものがない。

故にカイルの心の多重人格もそのままにしておけば癒えてしまう。カイルの心にはカイルの分身が12体いる。その分身にダメージを与えれば、シンクロして本物のカイルも激しい痛みや恐怖を感じることになる。

奴の心に住む神々は一定時間ごとにカイルの心に異常な傷を与えることで奴の多重人格の状態を保ち自分達の居場所を守っているのだ。いや、それどころか…」

ゼロが頭を振った。

「神達が余りにも痛めつけるせいで、カイルの人格はさらに分断され、増え続けている。今や数百にもなるという話だ」

サクはカイルの鏡の世界を思い出した。

鏡に映る色んな顔。

あれは全部カイルの心の苦痛の上にあぐらをかいている神々なのだ…

「そして全ての神達はカイルのその苦痛を知るゆえに奴を王と崇める。

強大な見えざる神々を取り込み、力を借りる代償に自分を捧げ、この地を治める神王としてな」

「カイルは…それでいいの？ 私たちにはどうすることも出来ないの？」

「分からない……かしもう……多分誰も奴を救えないだろう」

「でもどうして私は最後の最後でカイルの世界から出られたのかしら」

「オレもお前もそしてカイルもそうなんだが、強く望むことで自分の世界にいる特定の神をそこから別の心の世界に飛ばすことが出来るんだ。しかしそれには本当に強い思いが必要だ。

カイルはあの時心の自分を見えざる神々に喰われていた。そうになると奴は精神的な発作を起こし、まともではいられなくなる。おそらくお前をもっと早く助け出したかったに違いない。しかし土壇場になるまでそれができなかったのだろう」

サクは空を仰ぎ見た。

今は自分の世界の何も美しく見えなかった。

カイルは涙でかすむ視界でサクがゼロを背負って出ていくのを見ていた。

サクが完全に視界から消えた瞬間、今まで感じたことのないほどの孤独感に襲われ、耐えかねたカイルは神の拘束具の釘を自分の足ごと地面に突き刺し、その足を切断した。

凄まじい身体の痛みがカイルを支配し、心の痛みを忘れさせた。

激痛で身体が躍動している。

サク：

再び涙が溢れた。

カイルにとってその名は祝福であり呪いだった。

痛みを超えてカイルは心に、心地よい熱を感じた。

何の見返りもないのに守ろうとした。

何も変わらないのに死のうとした。

たった一片の肉片を守るために。
こんなボクのために…

本当はサクにすがりつきたかった。

しかし例えサクに抱きしめられても、または拒絶されても同じことだ。
寂しさが増すだけだ。

だからカイルはサクを見ていたくなかった。

ゼロという愛する者がいながら、こうも無防備に他の者に自分を愛させるサクという女が、カイルには許し難かった。

心の痛みが再び身体の痛みを超えた。

「サク…サク！」

カイルは震えながら口を押さえた。

「行かないで！そばにいて！！」

叫んだがサクはもう遠くへ行ってしまった。

カイルはそう言った瞬間全てが形になってしまったことに気付いた。

サクが自分のためにいてくれない現実。

そしてそんなサクを激しく必要としている自分。

カイルは泣きながら微笑んだ。

それから静かに目をつむって天を仰いだ。首筋に涙が伝った。

「サク、大好きだよ…」

カイルは悲しい最後の現実を認めた。

それは何かが犠牲になるという事実だった。

拘束具を外し、足が再生すると、カイルはすぐさま立ち上がった。

迷いが吹っ切れたように力強い足取りでカイルは自分の住処を出た。

少し進んだ所で目的のものを見つけた。

サクとゼロが折り重なるようにして倒れていた。
ゼロの身体を思い切り蹴り上げ、サクから離すとカイルはサクの顔の横にしゃがみ込んだ。

触れたくても触れられなかった。

穏やかに眠るようなサクを見ると、自分が触れることでサクが汚れるような気がした。

カイルはしばらくサクの顔を眺めていたが、意を決したようにサクの髪を抜いた。

カイルはその髪に指を這わせた。

「サク、ごめんね…」

その謝罪には色んな意味が込められていた。

カイルはサクの髪を口に入れた。

目を開けると美しい世界が広がっていた。サクとゼロの世界…

カイルはこれ以上絶望を感じないように目をつむり深く息を吸い込んだ。

目頭が熱くなり泣きそうになるのをこらえ、ゆっくり目を開くとカイルは遠くを見るように目をこらした。

はるか遠方に湖がある。

そこに白い花の咲き乱れる天に伸びた二つの高台があり、一方の高台に向かってもう一方からサクが白い花の道を歩いているのが見えた。

白い花びらを舞い上げゆつくりと歩くその姿は、花婿に死なれた花嫁が後を追って天国への道を歩いているような様だった。

サクが向かうもう一方の高台には案の定ゼロがいた。

カイルは試しに超高熱波をそこに向かい放射してやろうかと思った。ゼロは痛みは感じないだろうがサクの前でドロドロに溶ける様は見ものだ。

しかしここはサクの世界だ。
そんなことをすればゼロの周りの、罪もない花や大地もダメージを受ける。

カイルは耳をすませた。

そしてそのまま歩き出した。

風が優しくカイルを煽った。

カイルは絶えず吹きつける微風に吐き気を催した。

この世界でボクに触れるな。

カイルは風を振り払うように走り出した。

そのスピードはだんだん速くなり、足が地を離れ、風を抜き、空気を突き破り、しかしカイルは自分の移動の爆発的な風圧などでサクの心の世界を形作る草一本傷つけないよう気を付けた。

サクとゼロのいる湖にはすぐに着いた。

カイルは大きな木の一番てっぺんの細い小枝にふわりと乗り、花の道を眺めた。

サクはまだ歩いている。

カイルはしばらくそれを眺めていたが、ため息をつき木の上から地面に飛び降りた。

サクは今は一人だ。

今すぐサクの所に行きたかった。

しかし戸惑われるだけだろうと思った。

サクにそんな顔で見られるのは嫌だった。

カイルが望むよう、サクが抱きしめてくれるはずはない。

サクを抱きしめるのはゼロ。

サクに抱きしめられるのもゼロ。

そう思うと意識が遠のくほどの絶望を感じ、カイルはほとんど倒れるように木の根元に座り込んだ。

「サク…きみを止めない代わりに…ここにいてもいい？」

カイルはうなだれながら笑って、一人でつぶやいた。

カイルは思わず両足を体に寄せて、膝を抱いて体を小さくした。

しばらく膝に顔を伏せていたがなんとなく退屈になりカイルは水辺へ出た。

ずっと耳をすませていたのでサクがゼロのいる所に着いたことが分かった。

ゼロがカイルのことについての説明を始めた。

神界に來た者はいずれ全員知ることになるのでカイルは自分の無惨な生い立ちと宿命が語られていることに何の興味もわかなかった。

カイルは湖の澄んだ水をすくい、感触を確かめるように頬に当てた。湖の水に足を浸し、座ってゼロの話を聞いていた。

見えざる神々。

神の子ども。

そして多重人格。

ずっとここにいても仕方ない。これからどうしようと考え始めた時
サクとゼロのやりとりがふと耳に入った。

最初にサクがカイルに何も出来ないのかとゼロに聞き、そして：

『もう誰も奴を救えないだろう』

その言葉をゼロが言った瞬間、カイルの中で何かが完全に壊れた。

サクはカイルが救われることを願った。

今までだれも神王である自分を救おうとした者はいない。

カイル自身、自分が救われるという概念自体考えたことがなかった。

サクが何かしてくれなくても、そういう風に考えてくれるだけでカ
イルは嬉しくて涙が出そうになった。

しかしゼロはあからさまに次の瞬間その可能性を葬ったのだ。

二人の話は違う方にそれていった。

ボクは救われない。

唯一の救い手は奪われた。
それならボクは……

カイルはゆらりと立ち上がった。

カイルの力の抜けきった両手に爆発的なエネルギーが渦巻き始めた。

ゼロはなんとなくサクの世界の空気が変わったのに気付き、顔を上げた。

遠方に凄まじい殺気を感じた瞬間に、ゼロはサクを抱え、風をまとい飛び上がった。

それとほぼ同時に白い花の高台が二つとも根元から破壊され、湖に轟音を立てて崩れていった。

サクが自分がゼロの腕の中にいると認識した時にはゼロは飛んでくる銀色の何かから身をかわしている所だった。

「神の拘束具…カイルか！」

「え…？カイル？」

サクが首を伸ばして見ようとするとゼロがすかさず罵声を飛ばした。

「おい！危ないだろうが！じっとしてろ！！」

サクがムツとしてゼロを見るとゼロが微かに笑った。

その間にも火かき棒のような恐ろしく大きな釘がゼロを狙って何本も襲い来た。

「カイルが…何で？」

「知るか。お前何か奴を怒らせるようなことしたんじゃないのか？」

本当の所はカイルを怒らせたのはゼロなのだが、2人共カイルを怒らせたのは間違いなくサクだと思い、サクは自分が一体何をしたの

か本気で考えていた。

釘はどんどん数を増してついにゼロとサクの周りを一部の隙もなく覆った。

サクは上を見た。

カイルが真上から2人を見下ろしていた。

サクは初め、カイルだということが分からなかった。

姿形は同じだが顔から全く別の印象を受けた。

優しい美女の顔が突然醜い猛獣の顔にすり替わったような変化だった。

笑っているのか怒っているのか、その表情には全ての感情が込められているように見えた。

薄い色の瞳の中の黒い瞳孔がやたら毒々しく目立った。

カイルの唇が動いた。

神の拘束具が2人に向かい、まるで壁がせまるように襲い来た。

その瞬間ゼロはサクを下へ放り投げるように落下させた。

釘がゼロの全身に隙間なく突き刺さった。

そして釘は刺さるだけにとどまらず自動的にゼロの皮膚をかき回し、破り、切り裂いた。

それは拘束具から無理矢理逃げようとする動きと同じことだった。

人間の感じる痛みの千倍の痛みがゼロの身体の至る所を襲った。

しかしゼロはかすむ意識のなかで風を操り、落ちていくサクを守るうとした。

サクの身体がゼロのいる所まで浮かび上がった。

「ゼ……ゼロ…」

サクが呼びかけた時、ゼロの身体が崩れ落ちるように落下していった。

ゼロが痛みで意識を失い、風に加護を失ったサクは再び凄いスピードで空中を落下した。

しかし湖の水面ぎりぎりの所で突然サクは空中に立ったまま静止したような状態になった。

カイルがサクの後ろに立ち、髪をつかんでサクを持ち上げていた。

「この時を待っていたよ」

カイルの声はもはや前の静かな感じではなかった。

声が割れ、泣きながら切羽詰まって喋っているような激しさにサクは総毛立った。

カイルの空いている方の手がサクの上半身の服の中に入り、腹部を、胸を、首筋を優しく撫でた。

「何するのよ…やめてよ」

その腕はカイルの世界でサクにすぎたあの腕だった。

「サク、愛してる」

その声は遙か遠くから聞こえる木霊のようにサクの耳に響いた。

そしてカイルはサクを撫でる手から神の拘束具の釘を出現させ、そのままサクの腹を突き刺した。

カイルがサクの髪を離しサクは湖に落とされた。

サクは何もかも訳が分からず湖の底に沈んでいった。

第十二話 同じ孤独な花

「第十二話 同じ孤独な花」

カイルはサクに刺さった釘が湖底に刺さる音を微かに聞いた。

そして手のひらを湖面に当てると、ピシッという音とともに湖面を撫でるように閃光が走り、湖の水が一瞬にして干上がった。

カイルはサクのいる所に降りていった。

腹部に拘束具が刺さったサクが倒れたままカイルを見据えた。

二人はしばらくの間お互いを凝視していた。

「どうしてこんなことするの」

カイルが黙ったままなのでサクが口火を切った。

「憎いから」

カイルが静かに答えた。

まるで答えを最初から用意していたような即答だった。

「何が憎いの」

しばらく沈黙が続いた。

カイルはその間瞳一つ動かさず、等身大人形のように立ち尽くしてサクを見ていた。

あの時泣いていたカイルと改めて顔を合わせるのは今が初めてだった。

サクはカイルの心の世界で起こったことを思い出していた。

そしてゼロの言ったことを反芻し、カイルの背負わされた心の闇の凄絶さを思う時、それが目の前にはかなげに立つ少年のことだとは思えなかった。

サクはカイルと話したかった。

突然サクの世界を壊し、サク達を襲ったことは何故と思うが、いざカイルを前にするとそんな疑問や責める気持ちなどどこかへ行ってしまった。

ゼロや自分の身のこともあるが、カイルにこうも悲しくも残酷な目で見つめられるとサクはカイルをいたわってやりたいような気持ちになるのだった。

時間がたった。

二人ともお互いに何を考えているのか分からず無言だった。

おもむろにサクはカイルに悲しそうに微笑んだ。

「私は待ってるわよ。言葉につまっても、泣いてもいいから、言いたいこと言ったら」

カイルはその言葉に驚愕して目を見開いた。

「サク…」

その時カイルの目の前をあのかの白い花が舞った。

どこから来るのかカイルには分からなかった。

その花がいくつもいくつも風に吹かれカイルの周りを舞い、土に落ちた。

「な…何…」

カイルが足元の大地を見た。

所々、花が落ちた所から、茎が伸び葉が生え、地に同じ白い花が咲き乱れた。

それはカイルの立つ大地を中心にどんどん広がっていった。

カイルはしゃがんで白い花に触れた。

涙がそこにこぼれ落ちた。

花々は風に揺れ、一つ一つがカイルに笑いかけているようだった。

生まれて初めて、カイルは花をはっきり美しいと感じた。

祝福されている感じがした。

カイルは泣きながら花に触った。

サクの世界で自分の周りに咲く花々が愛おしかった。

「いいにおいがする」

カイルがくぐもった声で言った。

そのあとつかつかとサクの顔の横に來ると黙ってサクを見下ろした。

「どうしたの」

サクが言った。

カイルはじつとサクを見つめた。

「…一輪だけでもらってもいい？」

「いいよ」

サクは笑って言った。

カイルはその一輪を慎重に選んでいた。

時間をかけてあっちへ行ったりこっちへ行ったりして、たくさんの花を見ていた。

サクは釘によって拘束されて動けないのも忘れて、カイルを眺めていた。

時折見える、懸命に花を見定めている後ろ姿が痛々しかった。

まるで見守り、見守られる、母と子だった。

カイルはサクがいる安心感に包まれていた。

やがてカイルは一輪の花を持ってやってきた。

「決まった？」

「うん」

カイルの持っていた花は葉が多くついていたが、花は一つしかついていなかった。

多くの花が一つの茎にいくつもつぼみや花をつけている。しかしカイルは花がたった一つの、しかも何だかあまり見た目がよくないような花を持って来ていた。

「どうしてそれを選んだの？」

カイルは大事そうに花を握りしめた。

「この世界にいるボクを探したんだ」

しばらく黙ったあとカイルがぼつりと言った。

「この花はたったひとりで咲いてる。つながる花はない。みんな完璧に綺麗に咲いてるのにこの花だけ…あんまり綺麗じゃない。

それに…この花の周りに咲く花々はみんなそっぽを向いて咲いて…どれもこの花と顔と顔が合うことはない。この花は独りだ。まるで…ボクだ」

サクは微笑んだ。

「それがあなたなら摘まないで私の世界にありのまま咲いていて欲しかったな」

カイルは呆然とサクを見た。

「ううん、だめだよ」

「どうして？」

カイルの目から一筋涙がこぼれ落ちた。

「憎いから」

>i32409—3532<

サクは目を見開いた。

カイルは泣きながら微笑んだ。

「ボクは自分が憎い。きみを愛し、すがらずにいられない自分が憎い。

気が狂うほどの絶望の中にあっても、きみがいるだけで心は地獄から天国をも超えるところへ…。

そこに希望などないというのに」

身体から力が抜け、カイルは地に膝をついた。

血走る目で虚空を凝視し、涙が止めどなく落ちて花に流れた。

「きみに分かるかい…？きみがボクに与えるものが、ボクにとってどれほど異常なものか！

どれほど異常な希望か…！

それによってどれほど、ボクがきみを愛してしまうか…！

愛されなくても…触れられなくても！きみの世界の空気を吸っただけで涙が出る！

きみの心に片鱗でもボクがいると思うだけで絶望を超えられる！ごめんね、サク…！これがボクだ。もうとどめようがない…！！」

カイルは万感の思いでサクを見た。

「サク、大好きだよ…。お願いだ…ボクのそばにいて…！
抱きしめてよ！！それ以外何も望まないよ…愛せなくてもいい。
ずっと一緒にいて…」

サクは何も答えられなかった。

カイルの想いに応えてあげたかった。
むしろ応えなければいけないような気がした。

カイルの愛情は男女間の情を超え、餓死寸前の人間が一滴の水を渴望するような、生き死に関わるほどの強烈な必死さがあった。

しかし自分には応えることはできない…

気が付くとサクは涙を流し、カイルと見つめ合っていた。

カイルの目からは感情が読み取れなかった。

しばらくのちカイルは目をそらし小さな声で笑い始めた。
クスクス笑いからだんだん狂気じみた爆笑に変わっていき、カイル
が笑いながら叫んだ。

サクの頬にカイルの涙が飛び散った。

「残酷だね、サクは!!」

カイルがサクの胴体を真つ二つに切り裂いた。

拘束具のもたらす激痛にサクの身体が跳ね上がった。

腹部に急に来た激痛のショックでサクは嘔吐しそうになった。

もはやあまりの痛みに目が正常に機能せず、呼吸もほとんどできなかった。

サクは絶叫していた。

そしてその叫びに目が覚めたのか、カイルが恐怖の表情をして立ち尽くした。

涙を流しながら二、三步サクにふらふらと近寄り、カイルは叫ぶサクにすがりついた。

「あああああああ！！」

カイルの絶叫がサクの叫びをかき消した。

サクはその叫びに背筋が凍った。

サクにはカイルの叫び声が子どもの頃の自分の声と重なって聞こえた。

その絶叫はまるで親に虐待されている子どもの声だった。自分が最も愛する者から愛されず、なぜなのかも分からないまま、極限まで痛めつけられている子どもの悲鳴。

「サク！行かないで！！行かないで！！」

カイルはもはや自分がどこにいるのか、何をしているのか分かっていなかった。

ただサクが自分から去るという想いに取り憑かれていた。

サクは痛みで声を上げそうになるのを舌を嚙んで殺した。

この状況でサクはむしろ神の拘束具がもたらす痛みを歓迎した。

カイルの痛みを考えずにすむ。

サクは限界まで耐えた。

上半身の全ての臓器が煮えたぎっている。

目を開いていると眼球が飛び出して落ちるのではないかと思うくらい力んでいた。

早く終わってほしい。

意識を失ってしまいたい。

その時遠くの方からゴォツという大地を揺るがすような大きな音がした。

続いて地鳴りがし、カイルが戸惑いながら立ち上がった。

カイルはとっさに持っていた花をサクの身体の上に投げた。

それでカイルは身を守るのが遅れた。

カイルは巨大な風の球に取り込まれ、その全身を風の刃が引き裂いた。

まるで洗濯機のように、風の球の中でカイルはさんざん引き回されて、いたるところに斬撃を与えられ、体が粉々になった。

それはゼロの憎悪だった。

「ゼロ、やめて…」

サクはカイルの投げた花を握った。

ゼロが遠くからゆっくり歩いてくる。

まだ全身には釘が刺さっていた。

「カイル…」

憎々しげにゼロは言った。

カイルももはや肉体は粉々になっていたがゼロも巨大な釘に引き裂かれた時の傷で、たくさんの広がった大穴が体に空いていた。

ゼロが激痛のあまり激しく震え、転倒した。

カイルを取り巻く風が止み、カイルのもはやどこの部位だか分からない肉片だけがぼたぼたと地上に落ちた。

「お前はどうかろうと肉体に痛みなんか感じないんだから文句ないだろう。さっさと拘束具を抜け」

ゼロはチラッとサクを見た。

「…サクにまでやるとはな。お前ら何かあったのか？カイル、さっさと再生してサクを解放してやれ」

サクはかすむ目でカイルの元いた場所を見た。

血は流れていなかったが小さい肉片が散らばっていた。

突然それらの肉片からピンクのドロツとした液体が流れ出た。

その液体は様々な所に飛んだ肉を繋ぐように結びつき合い、肉をひとところに引き寄せた。

液体はだんだん分厚く固まり、人の姿を形作った。

再生の最後に肉ではない部分が整えられた。唇の赤み、眼球、爪、歯、毛髪などが現れた。

カイルはサクに背を向けて立ち上がった。

結んでいない金髪の髪がサラリと腰まで落ち、瑞々しい両性具有の裸体は美しさを超え、凄みがあった。

カイルはしばらく頭を垂れていたが、やがて何かが吹っ切れたようにゆっくり顔を上げた。

そしてその瞬間バラバラとサクとゼロに刺さっていた釘が全て抜けた。

出し抜けにカイルがゼロに聞いた。

「どうやってここまで？」

サクにはカイルの表情をうかがい知ることではできなかったがその言い方に、そして突然カイルが神の拘束具を外したことに、ただならぬ不気味さを感じた。

「お前の放った拘束具は空中でオレに刺さった。

地に落ちる前に何とか風の力で釘が大地に刺さる前に体勢を変えた。これだけの釘が地に刺さってしまえばそこから逃れようがないからな」

「なるほど。バカ正直にありがとう。ゼロらしいね。次からはそういうミスをしないように気を付けるよ」

「カイル…？」

サクが静かに呼びかけた。

「サク、その花は捨てて」

カイルが冷たく言った。

カイルが振り返ってサクを見た瞬間、サクは悟った。ゼロに肉体を破壊される前のカイルはもうここにはいない。

ここに立つ者は立ち入る隙が全くないほどの冷酷さで心を完全武装した別人だ。

「簡単なことだった」

カイルが笑って言った。

「どうしたの、カイル：何をするつもりなのよ…やめて」
サクは震えた。これほどの恐怖を感じたのは初めてだった。

「司天地五神、運命の神エンドラ！」

カイルが叫んだ。

「エンドラ…？」

サクはカイルを喰っていたあの神々を思い出した。
その中の一人、全身が紫の髪で覆われていた神。

「今、あなたの力を借りたい。運命を操作せよ」

カイルはそう言うと、倒れているゼロの髪をわしづかみにして顔を持ち上げた。

「ゼロ、いいことを教えてあげるよ。ボクはサクが欲しくて仕方がない。」

しかしサクはボクのものにはならない。それを受け入れる代わりに」

カイルは狂気じみた笑みを浮かべた。

「サクをきみのものにもさせない」

「エンドラ！この二人の魂を分かち、永遠に結ばれぬ運命を与えよ！！」

全ての魂達が二人を引き裂き、いつかの心変わりや嘘で深き愛情が永遠に消える定めを！！

汝、エンドラに命じる！我が肉体を使い、この者達の結びつきあう魂を完全に分断しろ！！」

はた目には何も起こらなかった。

しかしカイルは満足そうに二人を見た。

第十三話 エンドラの分かつ魂

「第十三話 エンドラの分かつ魂」

次の瞬間、何の前触れもなくカイルの口から紫の長い髪の毛が吹き出した。

その髪は二束に別れサクとゼロに向かって弾丸のような速さで近づいた。

ゼロはサクをつかんですばやく迫り来る髪から逃げようとした。

しかし髪の手は容赦なく、的確に2人の足首に一気に突き刺さった。

変な感じだった。

刺さった髪の手の本一本一本から何かが身体に入ってくる。

サクは抜こうとした。

髪をつかむと髪自体が脈打ち、心臓が全身に血液を送るように何かをサク達の身体に送り込んでいるようだった。

「カイル、やめて！」

サクがカイルに懇願した。

カイルがサクを冷酷な目で見た。

ゼロが言った。

「黙っている、サク。こうなってしまうばもう手段はない。しかし……終わりじゃないんだ」

ゼロはサクが今まで見たこともない表情をしていた。

激しい悔しさと悲しみでカイルを見ていた。

ゼロがサクの前で初めてカイルの強大さを認めた瞬間だった。

髪がズルズルと2人の足首から抜けていった。

サクとゼロは目を合わせることもなくショックと絶望で呆然としていた。

髪はカイルの口の中に吸い込まれていった。

髪を完全に吸い込んだ後、ごちそうでも食べたかのように唇を舐めカイルは楽しそうに言った。

「ゼロは知ってるだろうから、サクにだけ説明するね。」

今のはボクの命令が細胞に組み込まれたエンドラの体液だ。

それがきみ達の魂に完全に染み込んだ。

これからはその『命令』がきみ達の変えようのない運命となる。

全てのグレイシス・グロリアスの魂達がきみ達を分かつべく動く。

そして」

カイルは目を見開いて興奮しながら言った。

「いつの日にかきみ達は必ず自分たちの意志で永遠の別れを受け入れる。

避けられない心変わりの時が必ず訪れる！」

ニヤリと笑って、カイルは踵を返した。

「ボクはゆっくりその時を待とう。

じゃあね、ゼロ。

愛してるよ、サク」

肩越しに軽く手を振るとカイルは自分の世界に戻っていった。

サクはどうしようもなく震えていた。

ゼロと出会ってようやくサクは救われかけていた。

サクは何故かインフェルノで医者がよくする余命宣告のことを思い出した。

インフェルノで生きていた時は、自分がもし余命1ヶ月だと言われたら、ようやく人生の最期に向かい心の整理もつけられ、嬉しいくらいだろうと思っていた。

しかし今サクは確実に魂の余命宣告を受けたのだ。

いつになるかは分からない。

だが確実に自分から温かいものは失われ、再び孤独という病魔に襲われる。

それはサクにとって死よりも過酷なものになるだろう。

サクはゼロを見た。

ゼロもゆっくりサクの方を見た。

2人はどちらも恐れていた。

今もうこの瞬間にも相手の心は離れつつあるのかもしれない。

2人はしばらく見つめ合った。

そして同時に動いた。

相手が変わっても、自分は迷わないと決意し、サクとゼロはお互いにすがりつくように抱き合った。

サクはゼロの顔に触れた。

ゼロの顔は死人のように冷たかった。

「そうだね。まだ終わってないね。大好きよ、ゼロ」

サクは泣きながら言った。

ゼロは無言で悲しそうに微笑んでサクにキスをした。

「ずっと、お前と出会える時を待ち焦がれてきた」

ゼロとサクは2人で寄り添い、サクの世界に流れる微風に吹かれて長い間ぼうっとしていた。

ゼロが遠い目をして言った。

「ずっとだ。あれからずいぶん…長い間だった」

「いつから？」

ゼロが微笑んでサクを見た。

「お前が想像もつかない遠い昔からさ」

サクが戸惑いの笑みを浮かべた。

「何それ？少し冗談入ってるでしょ？」

ゼロはサクを抱き寄せて笑った。

「そうかもな」

「ゼロ！何なのよ」

サクも笑った。

それから2人はしばらく黙っていた。

おもむろにサクはゼロを見た。

「私たち…どうすればいいの」

ゼロは姿勢を変えてため息をついた。

「これから」

ゼロが無感情に話し始めた。

「カイルの言うようグレイシス・グロリアスの神達とは例えどんな交流をしようと、それはオレ達の別離につながっていくだろう。身も心も美しい神々の誘惑は、どんなに固い意志があっても抗いたいものだ」

「私たちの想いが試されているのだと思えば…」

「愛情は試すものじゃない。

それは魂をかけた戦いを面白おかしくゲーム感覚で観戦しているのと同じだ。

オレはそんなことには関わりたくない。試すのも試されるのも無意味だ」

サクはゼロをじっと見た。

「じゃあ私の世界にずっと2人でいれば…」

「残念だがここも安全じゃない。カイルが来ただろう。基本的に髪さえ飲めば他人の心の世界には出入りは自由なんだ」

「それじゃあ…」

サクは絶望したように言った。

もう自分達の運命を受け入れて待つだけなのだろうか。

ゼロが立ち上がった。

悲しい、決意を秘めた表情だった。

「もうここにはいられない」

サクはゼロを見上げた。

「オレ達は神界を捨て、地獄へ堕ちる。そこにしかオレ達に聖域はない」

サクはゼロのこの言葉を聞いても恐怖を感じない自分に驚いた。

ゼロはまた、サクに孤独と絶望をもたらした世界に行くと言っているのだ。

痛みのないグレイシス・グロリアスから痛みしかないインフェルノへ…

サクも立ち上がった。

ゼロはサクを見た。

サクは一点の迷いもない微笑みを浮かべていた。

「あなたと一緒になら、どこへでも」

ゼロは頷いた。

サクも頷いた。

二人は歩き出した。

カイルは割れた鏡に囲まれた自分の世界に戻ってきていた。

足元には司天地五神の映る鏡の時計がある。

五神はカイルがいることを完全に無視してそれぞれ物思いにふけったり、他の神と会話したりしていた。

カイルは今更どうも思わず、五神を見もせずカツカツと生け贄である自分の分身がいる部屋へ入っていった。

狭くて、不気味な所だったがカイルにとって自分の世界の中でこの部屋が一番落ち着ける場所だった。

自分の心に巣喰う名も知らぬ神々の顔など見たくもなかった。

円形に並ぶ自分自身の中心に大皿のようなものがあつた。
その皿の中は水銀のような液体で満たされていた。

おもむろにカイルは口を開け喉の奥に手を入れた。

一本の髪がそこから引き出された。

カイルはその髪を悲しそうに見つめた。

「サク…」

しばらくサクの髪を見たあとカイルはそれを大皿の液体の中に入れた。

液体はシュウシュウと音を立てて微かに青い白に変わった。

「ふん：この色までゼロと一緒にか」

サクの髪を入れた液体は青白い光を放ち、それがカイルの苛立った白い顔をますます蒼白に浮かび上がらせた。

しばらくすると液体は元の銀色に戻っていった。

カイルは皿をゆっくり回転させ、再びその中に何かをつまみ出すように指を入れた。また青白い光が炸裂し、カイルは指先で銀色の液体からできた細い糸のようなものをつまんで引っ張り出した。

髪だった。

再生したゼロの銀髪である。

「またゼロの髪かね？」

カイルの背後から声がした。

真っ黒い体毛に覆われた筋肉隆々の人間の女の体に豹の顔をした女神が扉に寄りかかりニヤニヤしてカイルを見ていた。

カイルは振り向かずに一本調子に応じた。

「ファイアナか。いつも気配消して近寄ってきてくれてありがとう。自慢の筋肉は元気？」

ファイアナは皮肉を意にも介さず陽気に言った。

「ああ。お陰様でね。お前の世界の一部でトレーニングさせてもらってるよ。

最近は背筋つけるのにハマっちゃってさ。
無理しすぎて何度も背骨折っちゃってさあ。まあすぐ再生するけど」

カイルが冷たい目でファイアナを振り返った。

「んなことどうだっていいよ。何か用？」

ファイアナがカイルの全身を眺め回してフフフと笑った。

「どんなにその世界が居心地いいとはいえ『元恋人』だろ」

カイルの表情からは何の感情も読み取れなかった。

「『元夫』か。両性具有のお前には妻と夫両方の配偶者がいるからな。

しかも今度は元夫の恋人にまでハマっちゃって。少しは落ち着きな

よ」

カイルはファイアナをじっと見た。

「本当に好きなんだ」

ファイアナはあきれたように上を向いた。

「サク、だろ？そのコはお前がゼロの元だろうが何だろうが恋人だって知ってんの？」

「さあね。どうでもいいよ。そもそもゼロはボクのことなんか…」

「おいおい、ゼロのことまでもいじけるのはよせよ。今はサク命なんだろ」

ファイアナが少し悲しそうに微笑んだ。

カイルはドサツと床に座り、立っている自分の分身に寄りかかった。

「で、何？雑談しに割れた鏡の世界から出てきた訳じゃないんだろ？」

ファイアナはカイルをじっと見た後、無感情に言った。

「ゼロの世界が崩壊した」

カイルは一瞬目を見開いたが、鼻で笑った。

ファイアナが続けた。

「サクの世界もだ。おそらく2人でインフェルノへ堕ちていったのだろう。…どうするんだい、カイル」

カイルが何も言わないのでファイアナが聞いた。

「最初にゼロがやったみたいにサクだけでも神界に召し上げること
はできないの？」

ファイアナの質問にカイルは首を振った。

「きみは知らないみたいだね。

本来ボクも含め普通の神々が輪廻者を勝手に神界へ転生させるということは不可能なんだよ。

しかしその例外がゼロだ。

あいつだけが唯一神の中でその能力を持っている。

それに何故だか知らないが輪廻者が神界に昇天した時、必ずその身体はまずゼロの世界に降臨する。

そんな世界は恐らく二つとないだろう。

認めたくないけど、あいつはグレイシス・グロリアスでも特別な存在なんだ。腹立たしいことにね」

「しかしお前はそんな所に惚れたんだろ」

ファイアナが茶化すとカイルがむくれた。

「いい加減そういうこと言うのやめないと拘束具使うよ」

「どうぞどうぞ。お前のトロい投げ方じゃいくらやられてもよけないでいる方が難しいよ。自慢の我が筋肉の隆起を見よ！」

ファイアナがカイルに割れた腹筋を見せつけるように胸を張った。

カイルはバカにしたように目をそらした。

「気持ち悪いだけだよ。そこまでであると」

二人は一瞬笑みを交わした。

「ゼロの世界もサクの世界も崩壊したならどこに行くかな。ここに
いんのはやだし」

「どこがいいかなって…お前…振られたゼロの世界には入り浸って
たくせに。」

もう一人配偶者いるの忘れてない？彼女お前のこと必要としてるん
じゃないの？」

「ボクが必要としてない」

カイルは目の色を変えることもなくあっさり言った。

「あいつといるとイライラして踏みにじってやりたくなるんだ。ボクがどんなことをしても怒りもしない。

ひたむきに耐えてます的な態度取られると本当にぶっ壊してやりたくなるよ」

ファイアナがフンと笑った。

「でもサクはお前の性的願望を満たしてはくれないよ。メスの肉人形だと思って女房に溢れる性欲をぶつけてきな。少しはすつきりするんじゃない？」

カイルはどうでもよさそうな乾いた笑い声をあげた。

「あはは、それもそうかも。あいつならどんな倒錯も黙って受け入れてくれるしね。

だけどそれがサクと違っててイラつくんだよね。

ボクにとっては相手を愛し、思いやるってのも経験してみたいエロプレイのひとつだからさ」

「まあね、それが経験できないのは難点だが、せいぜい女房の望むままに身も心も壊れるようなお前の創作面白プレイで満足させてやんな」

カイルは濡れた唇を舐めた。

「そんなこと言ってたら本当にやりたくなっちゃった。ファイアナ、あんたに会えていい気分転換になったよ」

カイルは大皿から再び髪をつまみ出した。

「じゃあ、レクイエの所へ行くよ」

ファイアナがにっこり笑って手を振った。

「お手柔らかにな」

カイルは女神レクイエの髪を口に入れた。

第十四話 鬼畜たちの遊戯

「第十四話 鬼畜たちの遊戯」

カイルは妻である女神レクイエの世界に降り立った。

そこは美しい雲がたなびく世界だった。

夕焼け空のような薄い紫色と桃色の壮大な雲の隙間から光が幾筋も差し込んでいる。

そしてそこにはカイルの顔ほどの大きな蝶がたくさん羽ばたいていた。

それらの蝶の羽はいくつもの宝石が結合しあってできていた。

カイルはレクイエの世界にたったひとつ建つ建物らしきものに向かって進んでいった。

四方にとくに外を隔てる壁もなく、とても広い部分がベッドの天蓋のように囲われ、ベールのようなものが、天蓋から垂れてヒラヒラとはためいていた。

ベールはオーロラのように幻想的に色を変えて穏やかにこの世界でたゆたっていた。

カイルは特にこの世界の何に関心を示すこともなくズカズカと進んでボールを跳ね上げた。

そこには13、4歳くらいにしか見えない華奢なはかなさを漂わせた少女が立っていた。

とても淡いエメラルドグリーンの髪が腰まで垂れ、瞳の色も明るい緑だった。

「カイルさま…」

レクイエが優しい微笑みをたたえてカイルに近づいた。

カイルは冷たくレクイエの横を通り過ぎた。

「脱げ」

一言そう言っているとカイルはドカッと天蓋の中に唯一あるベッドに座った。

「はい」

レクイエは微笑みをたたえ、顔色を変えることもなく応えた。

カイルは異常に冷めた目でしかしレクイエを凝視した。

レクイエは薄衣一枚を脱ぎ捨てて裸になった。

カイルはレクイエの顔は一切見ることなく身体をじっと見ていた。

胸はほとんどなく陰毛もわずかししか生えていない。

身体の線は細く、健康的な痩せ方ではなかった。

カイルはレクイエの首を片手でつかみ、締め上げた。

レクイエの足が床を離れ、カイルの爪がギリギリとレクイエの肉をえぐった。

カイルはレクイエの身体を振り向きざまにまるでバスタオルでも放

るようにベッドに放り投げた。

レクイエを睥睨した後カイルは服のままレクイエに覆い被さった。

「期待してる？」

カイルが残虐に笑った。

レクイエは慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。

「壊して下さいませ」

かくして鬼畜の、天使への陵辱が始まった。

>i34995—3532<

カイルは指でレクイエの唇に触れた。

「舐めて」

指をそっとレクイエの口の中に入れカイルはレクイエが自分の指を舐めているのを見ていた。

「レクイエ。ボクが好き？」

レクイエの舌が止まった。

「舐め続けろ」

カイルは容赦なく言った。

「ボクはきみが全く好きじゃない。

だからと言って嫌いというほどの執着もないけどね。

ボクは一度もきみの肉に挿入したことがない。今回も期待するな。きみにはボクを『男』にするほどの魅力はない。だが好きだけイカせてやるよ」

カイルはレクイエの口から指を抜いた。

指が濡れているのを確認してからカイルはレクイエの肉の中に長くしなやかな指を挿入した。

カイルは手慣れたようにレクイエの内臓を掻き乱した。

この女をイカせる最短手順をまるで仕事のように義務的にこなして

いった。

レクイエの息が荒くなった。

「イキそう？」

カイルが無感情に聞いた。

カイルの手は激しく濡れ、レクイエの中から漏れる体液がベツトにこぼれた。

やがてカイルは指先に絶頂の手応えを感じた。

レクイエが抑えるように小さな声を上げた。

カイルが囁くように言った。

「我慢しないで」

「カイルさま…」

レクイエは頬を上気させ、息を切らしながら目をつむった。

カイルは再び指でレクイエの肉を刺激し始めた。

「レクイエ、ボクは両性具有だが基本的に『女の身体』になった時にイクのが好きだ。

男のペニスが勃起するようにボくら神の子どもの身体は興奮すると交合の相手に合わせて変化する。

相手が男なら女に、女なら男に。

きみの前では興奮しないからきみはボクの身体が男や女に変化するのを見たことがないだろうがね」

カイルはレクイエの肉が何度も絶頂に達するのを感じていた。

カイルは自分の体がだんだん熱くなってくるのに気付いた。

「ボクたち神の子どもはインフェルノで生まれて物心つくまで心を分断するべく様々な残虐な行為を身に受ける。

ボくらはその時あるひとつの技術を徹底的に教え込まれる。

自分や他人の身体を使って絶頂を経験し、また経験させる技術だ。

何故ならそれが神の子どもに許される唯一の癒やしだからだ。

神の子どもに与えられる愉しみは自慰行為だけなんだ」

カイルはレクイエの肉をいじり回しながらもう片方の自分の手の指

と指の間を舐めた。

昔、自分の指の間を誰かが舐めていた。

いつもその者のサラサラした銀髪が身体に流れていた…

カイルの目の色が変わった。

「ボクは相手の身体に触れただけで性感帯が分かる。
表面的な反応を見なくても相手の悦楽がどれほどのものかが分かる
！」

レクイエがとめどなく押し寄せる快感に、我慢できず叫び声を上げた。

「カイルさま…！！カイルさま、抱いて下さい！！私はもう…！」

その瞬間カイルはレクイエの肉の奥を突き破り膣と子宮をえぐり出した。

レクイエはヒクツと息を呑んだ。

カイルの手の中でレクイエの内臓はビクンビクンと脈打った。

カイルがレクイエを見下ろし、上気して言った。

「神界では内臓組織が身体から切り離されてもまだ生きている。よってこの臓器が受ける刺激をきみも感じるはずだ。」

カイルは切り離した膣の中に舌を入れた。その途端レクイエの身体がビクツと痙攣した。

カイルは静かな、しかし激しい興奮を感じ始めた。

息が切れ始め身体がじっとり汗ばんでくるのが分かった。

しかしそれはレクイエが原因ではなかった。

カイルはレクイエの子宮や膣をまるで食べようとするかのように隅々まで舐め尽くし、噛み、内部をえぐった。

レクイエは未だかつてない感覚に半分意識を失っていた。

カイルの頭の中では走馬灯のように目まぐるしく鮮明に快樂の記憶が蘇っていた。

流れる銀髪。

大きな手が『女』になった自分の身体を撫でる。

愛されていると錯覚してしまうほどのキスと包容。

心を包み、大切にされていると思わせてくれる優しい愛撫。

今自分がしている猟奇的な陵辱とは正反対の優しく穏やかなゼロの愛撫…

「ゼロ…」

その名を自分の唇が呼んだ瞬間、カイルは下半身からゼロの感触が激しく突き上げるのを感じた。

今この瞬間、自分の目の前で起きていることも、何もかも全てがゼロとの快樂の記憶に吞まれた。

胸が大きくふくらみ、下腹部に異常なうずきを感じた。

カイルは股間を押さえた。

自分の、女となった股から出た体液がレクイエの足をビチャビチャに濡らしていた。

カイルは自分の正面にあるボールをぼんやり見つめた。
やがてカイルは小さな声で笑い始めた。

「ゼロ…!!」

カイルの指先が自分の肉の中を激しくえぐった。

自分のもたらす快楽にカイルは崩壊したように笑って叫んだ。

カイルにはもうこの世界の何も見えていなかった。

「ゼロ…ゼロ…!! イかせて! イかせて!! ボクを破壊して…!!」

レクイエが不安そうにカイルを見た。

「カイルさま…？」

カイルはその瞬間レクイエの胸ぐらをつかみ、その顔を自分に近づけた。

カイルの顔を間近で見た時、レクイエは息を呑んだ。

カイルは泣いていた。

涙を流しながら笑っている。

「どうして何も言ってくれないの？ねえ、ゼロ！！激しいなって誉めてくれないの！？」

カイルが泣きながら無邪気にゼロを責める様を見て、レクイエはどうすればいいのか分からなかった。

ただ困惑と悲しみでカイルを見つめるばかりだった。

「入れて。もう限界だよ」

カイルが囁くようにレクイエに言った。

反応できないレクイエをカイルは目を見開いてすぎるように見つめた。

カイルの目から希望の光が消えた。

涙が幾筋も頬を伝って流れた。

「ゼロ…」

そのあまりに切ない目線にレクイエは全身に戦慄が走った。

この人は自虐に走る。

そう思わせるほどの痛々しさと深い傷の垣間見える表情だった。

カイルはおもむろにレクイエの胸に顔をうずめた。

レクイエは迷いながらもその頭を抱いた。

レクイエも泣いていた。

しかし幸せだった。

レクイエはカイルの心を知っていた。

カイルの叶わない希望も逃れられない絶望も、その心に自分がいないことも。

レクイエはその全てを拒絶も恐怖も感ずることなく愛していた。

カイルはゆっくり頭を上げた。

カイルとレクイエは見つめ合った。

ブルーグレイの瞳にはレクイエが映っていた。

しかしカイルの心はそこに別の人物しか見ていなかった。

カイルは何かを訴えかけるような表情をした。

カイルの手が再びゆっくりと自分の股をつかんだ。

瞳が空を漂い、カイルはぼんやりと囁いた。

「ゼロ…来て」

ズドツと肉と骨を一気に破壊するような音がした。

その瞬間、カイルは股を押さえる濡れた手から巨大な釘を出現させ、自分の膣から頭まで全身を一気に貫いた。

レクイエが悲鳴を上げた。

「カイルさま!!」

レクイエは泣きながらカイルに触れようとした。

しかしカイルはレクイエをベットに押し倒し、両肩を押さえつけた。

カイルは激しく痙攣していた。

それが快楽からくるものなのか、高ぶる感情がもたらすものなのか
レクイエには分からなかった。

「ゼロ、突き上げて…! ボクを興奮させて…!!」

カイルの涙がレクイエの顔にしたたり落ちた。

レクイエは訳も分からず腰を動かした。

しかしカイルの重さでほとんど何もできないのと同じだった。

「何やってるの？激しく！もっと激しくしてよ！！」

レクイエは腰を動かしたが、華奢な少女の力では無理があった。

レクイエは息を切らしてカイルを見た。

カイルのレクイエを見る目に今までにない狂気の炎がチラチラと蠢いた。

怒りではない。

激しい憎しみの眼差しだった。

カイルはレクイエの肩を押さえる片手をその腕の方へ滑らせた。

再び神の拘束具が出現しレクイエの腕を刺した。

そして次の瞬間、カイルはレクイエの腕を肩から切断した。

レクイエの身体が激痛のあまり跳ね上がり、カイルの肉に刺さる神の拘束具をこれ以上ないほどに突き上げた。

その時の勢いでカイルに刺さる釘が下腹部の内臓組織を破損し、カイルにもまた、凄まじい激痛が走った。

カイルは大声で笑った。

感じたことのない悦びだった。

カイルの口からは唾液が溢れ、目からは悦楽の涙が流れていた。

カイルはインフェルノで無理やり犯された時のことを思い出していた。

痛みがあった。

自分の真の身体が今ゼロに抱かれたのだ。

この痛みこそ今のカイルには真実だった。

ゼロが本当は自分を愛してなどいないと知りながらゼロに愛撫される痛み。

愛されていないのに泣いている時、優しく抱きしめられる痛み。

この身体が今感じている痛みはゼロに抱かれたゆえに感じる痛みだ。

そう思うと、カイルは泣きながら、喜びのあまり壊れたように笑い続けた。

第十五話 地獄の導き主セレイラ

「第十五話 地獄の導き主セレイラ」

サクはゼロに連れられゼロの世界の図書館のような所に来ていた。

そこは異常に広く、古くて分厚い本が雑多に本棚に並べられ、縦も横も突き当たりの壁が見えないほどの奥行きだった。

これからインフェルノへ堕ちる方法を確認する、とゼロは言った。

ゼロはある程度は知っているようだった。

「おそらくこれから、とても大変なことをすることになるだろう。お前にこんなことをさせなければならぬことをすまなく思う」

ここまで来る途中でゼロは静かな声でそう言った。

ゼロは図書館の本を読む訳でもなく、ただじっと本棚に寄りかかって何かを待っていた。

「広い図書館だね。何の本が…」

サクがそう言った時、声が返ってきた。

「これは全部インフェルノの記録さ」

白い布で目隠しをしたように目を覆った黒髪のおかっぱ頭の少年の神がスーッと現れて言った。

> i 3 1 5 7 8 — 3 5 3 2 <

「よう、ゼロ。待たせたな」

少年はスタスタとゼロの所に行って握手を求めた。

どうやら目隠しをしてもこの世界のことは見えるらしい。

「こちらは？」

少年がサクの方に顔を向けた。

ゼロが遮るように言った。

「すまない、セレイラ。とても急いでいるんだ。
オレ達はこれからインフェルノに堕ちる。その方法の確認と道具を
もらいに来た」

セレイラと呼ばれた少年が口をポカンと開けた。

「何言ってるんだ。ゼロがインフェルノに堕ちたらこの世界は崩壊する。」

ゼロの世界がなくなったら他の神との交流が大幅に制限される。
ここは色んな神がたくさん集まる大都市みたいな役割をしているの
に」

ゼロは苛立ったように頭を振った。

「悪いがそんなことを気にしてはいられない。急ぐんだ。
インフェルノのことに關してはオレはざっとしか分からない。堕ち
ていく方法を詳しく教えてくれ」

セレイラはため息をついた。

「この図書館ともお別れか…まあいい。じゃあついて来いよ。必要
なこと全部教えるから」

セレイラはヒラヒラした白いローブをひるがえして本棚の間を闊歩していった。

ゼロはサクの腕をつかんでその後について行った。

やたらときしむ古い階段を下り、三人は分厚い扉の前に来た。

セレイラはポケットから恐ろしくたくさんの鍵が付いている鍵の束を取り出し、その中から当たり前のように一本を選び出し鍵穴に差し込んだ。

扉が開き、セレイラはサクとゼロを招き入れた。

そこには美しいがとても荒々しい男神の石像があり、たくさんの火のついたロウソクが置かれてほの暗い光を放っていた。

その像は石で出来ていたが目の部分は真っ赤なルビーがはめ込まれていた。

セレイラがそれを眺める2人に向かって言った。

「これは大地父神インフェルノの像だよ」

サクは意味が分からずあっけにとられた。

「え？」

「知らないのか？インフェルノというのは世界の名前である前に、その世界を創った神の名前なんだ。そのインフェルノがこの像の男神だ」

セレイラが男神像を背に立った。

「さてゼロ。急ぐなら説明は後だ。何も言わずに俺の言うことを聞いてくれ。そちらのお嬢さんも、いいな」

セレイラがサクを真剣な目で見た。

ゼロはサクの腕を強く握った。

「じゃあまず裸になって」

セレイラが何の感情も差し挟まずに言った。

サクはセレイラを凝視した。

「は？」

セレイラが布で覆った目を上に向けてやれやれとでも言うように呆れた笑いを浮かべた。

「あんたら急いでるんじゃないの？ゼロ、このコ早く説得して」

そう言われた途端、サクはロウソクを蹴散らしセレイラの胸ぐらをつかんだ。

「クソガキのあんたに『このコ』とか言われたくないのよ。

あんた誰かに似てると思ったら、そうだわ。カイルよ！

神界の男ってみんなこういう斜に構えたイヤミな小僧ばかりなの！？

それで何が神よ！」

「サク！」

ゼロはこの時ばかりは笑っていなかった。

胸ぐらをつかまれているセレイラがそのままサクの腹部の布をわしづかみにして引っ張った。

「俺が脱がしてやろうか」

目隠しに阻まれ目は見えなかったがセレイラは歯を剥き出しにして笑った。

「セレイラ」

ゼロが静かに言った。

ドロリとした不気味な感触の風がズズッとセレイラに向かって渦巻いた。

「調子に乗るな」

「ふん…」

セレイラはゼロをチラリと見てサクの胸ぐらをつかむ腕をはねのけた。

ゼロはするすると服を脱ぎ始めた。

サクはそれを見ないで、セレイラを見ていた。

セレイラは首を傾げたようにサクを見ながら微笑みを浮かべていた。

『俺は急がずにあんたが戸惑い、迷うのを最後まで見ててあげるよ』

そう言うかのように口元が笑っていた。

サクはかんしゃくを起こして叫び声を上げ、自分の服を剥ぎ取り床に叩きつけた。

ゼロもセレイラも男神像も含めて、サクはここに居る全ての男を叩き壊したい衝動に駆られた。

ゼロは普通に脱ぎ終わり、サクを見ずにセレイラに無言で向き直った。

セレイラは微笑んだ。

「よし：じゃあインフェルノに堕ちていく前段階の準備を始めよう」

自分の目を覆う布に手をかけ、セレイラはゆっくりとそれを外した。

サクはその目を見た途端、恐ろしさのあまり総毛立った。

両目とも瞳がなく白目の部分だけが真っ赤に染まり、ギラギラと毒々しく光っていた。

「ゼロからだ」

セレイラは左手のひらでゼロの身体を撫でた。

そしてその目でゼロの身体を凝視しながら撫でさすった部分の一部に右手の指先を押し付け赤いしるしを付けていった。

頭から胴体へとその作業は続いていった。

ゼロの身体に何ヶ所もそのしるしが付いた頃、セレイラが語りだした。

「今からあんたらがしなくちゃならないことはとても大変なことだ。俺は今、身体 of 主要な内部組織である内臓のある場所にこの赤いしるしをつけている。」

これからインフェルノの人間としての肉体を造るにあたり、あんたらはこの場所に自分の肋骨で作ったナイフで『インフェルノの息』を吹き込まなければならない」

セレイラは汗を流しながら集中して作業を続けていた。

「それはどういうことかというと、大地父神インフェルノの息と呼ばれている消えない炎を肋骨のナイフに宿し、それで内臓組織を刺し貫くことで内臓一つ一つにインフェルノで生きることのできる力を与えていく。」

そして最後には神界での身体、つまり魂をこの炎で焼き尽くす。それで転生は完了だ」

「それって全部自分でやるの？」

サクがおどましそうに聞いた。

「まあ普通は、な」

セレイラが意味深に笑った。

ゼロの身体には最終的に数十カ所の赤いしるしが付けられた。

セレイラがサクの前に立った。

額が汗で濡れ、集中のあまり息が上がっていた。

セレイラはサクの身体にしるしを付け始めた。

サクの身体を撫でる手には下心などまるで見受けられなかった。

それは困難な手術に臨む医師の真剣さだった。

正確に内臓の位置を印さなければ転生に響くのだろう。

「あんたらはその作業が大したことではないと考えているだろう。痛みがないからと。」

しかしそんなに甘くはない。何故ならば肋骨で最初に刺さなければならぬのは人間の一番の主要器官、脳だからだ。

そこがまず働かなければ他の臓器に力はない。

そして脳が一度インフェルノでの働きをし始めると神経というものが力を持つ。

その意味は痛みを感じるようになるということだ。

つまりは脳を刺した後の他の部位への刺激は人と同じ痛みを感じる

んだ」

サクはそれは何となく大丈夫だろうと思った。

何しろゼロも自分もカイルの神の拘束具の痛みを受けたことがある者なのだ。

「それから次に心臓だ。心臓を刺す。それにより血が身体を巡るようになり、刺突による出血が始まる。

しかし神界にいる限りどんなに出血しても死にやしないから大丈夫だがな」

「実のところ本当の問題はそんなことじゃないんだよ」

セレイラが頭を振り、汗を飛ばしながら疲れたように言った。

「あんたらは恐らく恋人同士で同じ所に一緒に転生したいんだろ？インフェルノは何しろ危険な世界だからな」

「ああ、そうだ。聞きたかったことはまさにそのことだ。何か方法はあるのか？」

「あるにはある。昔から有効とされている方法がな」

セレイラはサクの身体にしるしをつける作業に戻って語り始めた。

「しかしな、ゼロ。この方法は聞くだけなら簡単そうだが実のところとても難しい。確実に急いで転生したいなら、たとえ別々になろうと一人で転生する方がいい。

それでも2人で一緒に堕ちる方を選ぶか？」

「ああ」

ゼロがサクを見ずに静かに言った。

「当たり前じゃない」

サクもゼロを見ずに抑揚のない声で言った。

セレイラは頷いた。

「その想いを忘れるなよ。」

なら教えてやるが、神界の者が一緒にインフェルノに堕ちるというのは本来大地父神が認めていないことなんだ。

堕ちる先は地獄であり、孤独や憎悪が支配する世界だ。そもそも神達がそんな複数での馴れ合いをしたいなら神界ですればいい。

それを破ってでも複数で転生するという場合は、大地父神インフェルノに魂を賭けてその絆の強さを証明しなければならない。

つまりこの方法を行った場合、途中でやめるということは許されず、もしそうなればインフェルノの息を吹き込んだ臓器から魂の腐敗が始まり最終的には醜く永遠に発狂する」

セレイラの汗ばんだ手がサクの下腹部を撫で、しるしを付けていった。

「あんたらのやることは」

大きく息を吐き出し、セレイラは歯をくいしばり集中力を持続させた。

「インフェルノでの肉体の創造をお互いの身体を使い、行う。

つまりゼロはサクの身体に、サクはゼロの身体に、互いの肋骨のナイフを刺し込みインフェルノの息を吹き込む作業をする。

早い話2人で今俺が印している場所を刺し合うわけだ」

セレイラが顔を上げ、2人を見た。

懸命に作業に打ち込むセレイラを見ていたサクは、今はもうセレイラの目を見ても怖くはなかった。

サクもゼロも互いに目を合わせなかった。

サクは不思議なくらい不安は無かった。

もうここまで来てしまったのだ。

ゼロと共に地獄だろうが発狂だろうが堕ちるところまで堕ちよう。

セレイラが心なしか悲しそうに笑って言った。

「何度も言うが、簡単そうに聞こえるだろうけどこれは地獄が神を試す試練だ。ヤバイ橋になるぜ。

出来ればあんたにはやめてほしい。

ゼロには世話になったし、サクはかわいいしな。

この試練で一番脱落する率が高いのは以外かもしれないが、あんたらみたいな恋人同士で堕ちようとする神達だ。

こう言っちゃなんだが成功例の方が少ないんだ」

セレイラはゼロを見た。

ゼロはおもむろに言った。

「終わったか？」

セレイラが立ち上がった。

「ああ」

セレイラは目隠しを手に取りそれを握りしめた。

その後セレイラは2人に意見することもなく淡々と説明した。

肋骨は基本的にどの部分から取ってもいいが脇下辺りからが一番取

りやすい。

その骨を体内から取り出す作業から試練は始まっており、互いに相手の骨を抜き出し合わなければならない。

抜き出した骨を削り、刺しやすくするのは手っ取り早くゼロの風の力を使う。

「そしてこれがインフェルノの息だ」

セレイラは床に置かれた太く長い炎の灯ったロウソクをゼロに渡した。

「肋骨のナイフをこの炎にかざすだけでいい。
無事内臓にインフェルノの息を吹き込めればその都度ナイフの炎は消える。

一回一回ナイフに炎を当てるのを忘れるな。
タイムリミットはこのロウソクが消えるまでだ。それまでに転生を完了させろ。」

「頑張れよ、2人共」

今はもう白い布で目を覆ったセレイラが笑って言った。

目を覆っているとその笑みは不敵に見えた。

本当は彼の目は夢げに心配そうに微笑んでいるのだろうとサクは思った。

しかしサクは今はセレイラの笑みが不敵な、何も心配していないような笑顔だと信じたかった。

その方が本当は震えている自分が勇気づけられる。

『適当に頑張っつけ』

セレイラが軽くそう言う、その程度のことなんだと。

第十六話 激しき肉の創造

「第十六話 激しき肉の創造」

2人はサクの世界に降り立った。

サクの提案だった。

ゼロとサクで創造した世界は最期の時まで2人を優しく見守ってくれるだろう。

太陽のような光の球の明るさにサクは目がくらんだ。

その明るさに、サクは何だか夏の終わりの気だるく、少し憂いを含んだ空気を感じた。

サクは視線の隅でゼロの姿を捉えようとした。

風で髪が流れている。

先ほど裸になった後、もう一度着た服の肩の部分をサクは軽く握りしめた。

「サク」

サクは横にいるゼロを見た。

ゼロの顔は逆光で見えなかった。

サクがまばゆさに目をつむった瞬間、ゼロの両手の一方が横からゆっくりサクの首の正面にかかり、もう一方がその重心を支えるように背中の中をつかんだ。

ゼロはサクの肩にキスをした。

ゼロの流れる銀髪はサクの身体でもつれ、サクの肩に顔をうずめるその姿はまるで、ゼロがサクにすがり泣いているようだった。

ゼロはサクの前にひざまずきその手の爪にキスをし、サクを見上げた。

風の刃がサクの服の肩の部分をチリチリと千切るようにゆっくり切り裂いていった。

サクはゼロの目をじっと見た。

ゼロの視線は無機質で、心の存在を感じさせなかった。

その視線の前ではどんな異常さも、奇妙さも、痴態すらも許されるように見えた。

サクはその永遠の無を感じさせるゼロの瞳に吸い込まれた。

服が肩から切れ半身があらわになったが、サクはゼロの目を見つめ

続けていた。

ゼロは立ち上がり、サクを見下ろした。

逆光でよく見えないゼロの眼差しは一見非情だった。

もう一方の服の肩の部分が風の力で切れ、サクの服がパサリと地に落ちた。

ゼロの瞳は空洞のように何も見ていなかった。

ゼロがしばらく目をつむり開いた。
その目にはかすかな魂が宿っていた。

「始めるぞ」

ゼロがサクを抱き寄せた。

自分の中の迷いや恐怖が一瞬でも表面化してしまう前に、ゼロは躊躇なくサクの脇下辺りを指で横一直線に切り裂いた。

サクは痛みを感じなかったが、その瞬間ゼロの全身から血の気が引き、その心臓が激しく鳴るのが分かった。

ゼロの指がサクの脇下をえぐり、肋骨に手がかかった。

ボキッという音がしてゼロは折れた肋骨を取り出した。

ゼロはサクの肋骨を見ることなく、それを持っている手をだらんと下げ、サクから二歩、三歩と離れていった。

それは激しい震えをサクに悟らせないためだった。

しかしサクには分かっていた。

サクはゼロの顔を見た。

それを見た一瞬、サクの胸が高鳴った。

その顔は泣き顔より悲しい笑顔より、死に顔よりも、切なく悲しく、サクをかき乱し心に突き刺さった。

ゼロは素早くサクに背中を向けた。

知らぬうちにサクの頬には涙が流れていた。

サクは震える手で口を押さえた。

それでも嗚咽が漏れるのをこらえきれず、しゃがみ込んでサクは泣き声をあげた。

ゼロが振り返った。

「ど…どうし……」

サクが顔を上げ、ゼロがサクに近寄った。

サクはゼロに駆け寄り、泣きながらゼロの服を滅茶苦茶に引き裂いた。

涙を流さない代わりであるかのようにゼロは全身が冷たい汗で濡れていた。

サクを切り裂いた一瞬のショックで長い髪が汗で顔に張り付き、ゼロはまだ震え、サクから離れようとした。

サクがゼロを抱きしめた。

ゼロはその抱擁に応えることなく、虚ろな瞳に絶望をたたえて立ちすくんでいた。

「私の番よ、ゼロ。私達は行かなくちゃ」

ゼロはまだ震えの止まらない手を自分の脇下に伸ばした。

自分の身体を何の迷いもなく切り裂き、ゼロはサクの手をつかんで傷口へもっていった。

サクは意を決してゼロの傷口に指を入れた。

想像を絶する恐ろしさだった。

温かいヒトの肉がドクンドクンと鼓動している。

サクは気持ち悪さでそれ以上指を挿入出来なかった。

激しい震えで歯がガチガチ鳴り、涙が幾筋もこぼれた。

「サク、オレの腕を噛んでいろ」

ゼロは震えで歯に負担がかからないようにするためにサクに自分の腕を噛ませた。

ゼロはサクの手をつかんだ。

「少し我慢していろ」

ゼロがサクの手を自分の傷口へ押し入れた。

肉の感触が否応なしにサクを襲った。

吐き気と激しい震えのあまりサクの歯がゼロの肉に深くめり込んだ。

サクは目をつぶり涙を流しながら、腕を引き抜こうと力を入れた。

しかしゼロの怪力がそれを許さなかった。

「サク、骨を探れ」

サクは目を見開き、震えながら指を微かに動かした。

自分が立てる肉をかき混ぜる音のおどましさに耐え難い思いをしな
がら、サクは必死でゼロの肋骨を探した。

固いものが指に当たりサクはそれに手をかけた。しかし震えで手に
力が入らない。

サクはゼロを涙でかすむ目で見上げた。

ゼロは目をつむり、サクの手首を力を入れて勢いよく引っ張った。

バキッという音がして肉片を飛び散らせながらゼロはサクの手で自
分の肋骨を取り出した。

サクの手を離し、ゼロはすぐにサクの肋骨を掲げて風の力で骨を尖
らせた。

ゼロはサクを感情抜ききの非情な目で見た。

ゼロも心が震え、これからしなければならぬことが怖かった。

しかしだからこそ、サクもゼロもお互いに優しく互いの恐怖を容認している時間はないのだ。

サクはゼロの目を見て、震える手を高く上げた。

ゼロの骨が削られ、サクはだらりと手を下ろした。

ゼロがゆっくりサクに向かい合うように立った。

「サク、まずお前がオレを刺す。

頭蓋骨を貫通させなければならぬから力があるだろう。

頭を固定して刺しやすくするためにオレは横になった方がいいな。全体重をかけて情け容赦なく刺せ」

サクの手を取り、ゼロはサクを座らせた。ゼロは足を伸ばして座り、不敵に笑って寝そべった。

サクは震える手で炎の燃える口ウソクにナイフをかざした。

炎を宿したナイフは燃えることなく、全体がオレンジ色に光った。

涙が首筋を伝い、胸に落ちた。

サクは涙に濡れる目でゼロの顔を冷たい、覚悟の眼差しで見下ろした。

「泣くな、サク。震えるな。オレももう何も恐れない。だからお前も怖がる必要はない」

サクは歯を食いしばり、ゼロの肋骨をゼロの額の赤いしるしめがけて振り下ろした。

サクの涙がゼロの顔に飛び散った。

その一撃ではナイフが脳を貫くことはできなかった。

サクはナイフを持つ手から力を抜き、身体を乗せゆっくり全体重をかけていった。

サクは目をつむり祈った。

早く…

ゴキツという音がしてナイフが深々と刺さっていった。

サクはすぐに慎重にナイフを抜いた。

オレンジの光が消えている。

サクはゆっくり息を吐いた。

気が付くと額が汗で濡れていた。

「次はゼロが私の頭を刺して。
かわりばんこに刺し合おう。」

そうしないとダメージが偏りすぎて相手を刺すのが難しくなると思うから」

「分かった」

ゼロが額を押さえて起き上がりながら言った。

サクの後頭部に手を添えゼロがサクの身体をゆっくり倒した。

サクとゼロは無表情で見つめ合った。

ゼロが肋骨に炎を宿し、サクの額のしるしに当てた。

ゼロはナイフを折らんばかりに強く握りしめ、悔しさからか、悲しさからか手が激しく震えていた。

ゼロのナイフがサクの頭蓋に押し込まれた。

ゼロは容易に頭蓋骨を貫通させ、その刃は脳に届いた。

その時サクの身体に変化が起こった。

頭が重苦しくなり、ふわふわ浮くように軽く痛みを感じることがなかった身体が全身張り詰めた、理由の分からない緊張に包まれた。

ゼロはサクを起こし、再びナイフを持たせた。

「次は心臓だ」

サクはもう涙も出なかった。

この絶望的な儀式は始まったばかりなのにもうすでにサクは逃げたかった。

どうしてこんなことをしなければならないのと絶叫したかった。

サクはナイフを握りしめ、ゼロの胸のしるしを見つめた。

サクはまた祈ろうとした。

しかし誰に、と思った。

今まで自分を助け、守り、愛し、サクの叫びに応えてくれたのはゼロだけだった。

サクは目をつむった。

「ゼロ、私に力を貸して」

ゼロは突然のサクにしか理解できないはずのその言葉を、まるでサクが何を想いそう言ったのかを全て知っているかのように静かに応えた。

「ああ」

サクはゼロの胸のしるしにナイフを当てた。

目をつむりサクは力を込めてゼロの胸にナイフを刺した。

血がつーっと刺さったナイフの隙間から滴った。

しかしサクにしてみれば力を入れたつもりでもナイフはほとんど刺さっていなかった。

二度、三度と力を入れたがゼロの体は固くしかも痛みがあると思うと、サクも躊躇して力を入れるのが難しかった。

ゼロがサクの腕をつかんだ。

サクはゼロを見た。

ゼロは震えてはいなかったが手は冷たい汗で濡れ、目はうつろだった。

ゼロは何も言わずサクを抱き寄せ、グッ、グッ、と力を入れてサク

ごとナイフを自分の胸に押し込んだ。

サクはナイフを見た。

かなり深々と刺さっている。

サクが身を離そうとするとゼロがサクから離れ、ナイフが引き抜かれた。

ゼロはゴクツと何かを飲み込み、後ろを向いて胸を押さえて身をかがめた。

サクの世界の植物の上にボタボタッと大量の血が落ち、ゼロがさらに口を押さえ、吹き出すように吐血した。

ゼロは身体を立て直し、しばらくの間、上を向いてゆらゆらしていた。

優しく穏やかに吹く風がこの状況に相反して、サクの恐怖を更に掻き立てた。

この状況でこれがゼロの精神状態だとも言うのだろうか。

ゼロは口を手で拭い、ナイフに炎を宿しサクを見た。

「サク、こっちへ」

ゼロは悲しそうに微笑んでいた。

その笑顔は逆光に輝き、まるで終わりゆく世界の一粒の希望の雫のようだった。

サクはそれを見た瞬間、衝撃的と言っていいほどにその笑顔に吸い寄せられた。

サクの目には、そして心には、ゼロの微笑みはそのままサクを抱きしめ、その先にある何の心配も不安もない世界へとサクをいざなう入口であるかのように見えた。

サクはゼロに思い切り走り寄り、ナイフを一瞬のうちに自分の胸の

しるしにあわせ、ゼロの胸に飛び込んだ。

ナイフが勢い良くサクに突き刺さった。

サクの口から血が溢れた。

サクは震えながら穏やかに微笑んだ。

ゴホッ、ゴホッ、という咳と共に口から大量の血が溢れ出したが、サクは気にすることもなくゼロの血だらけの胸に頬を寄せた。

ゼロは血に染まりもつれた髪が張り付いたサクの頬を両手で上に向け、貪るようにキスをした。

2人の舌は互いの血を味わうように絡み合い、相手の一部である血液を自らの極限の渴きを潤すように吞み続けた。

第十七話 死に物狂いの倒錯

「第十七話 死に物狂いの倒錯」

ゼロは静かにサクに刺さったナイフを抜いた。

ブツツという音と共にサクの胸から血が吹き出した。

その血はまともにゼロの身体にかかり、ゼロは蒼白の顔で倒れゆくサクを見下ろした。

サクは痛みに顔を歪め、血の溢れる胸を押さえた。

心臓が鼓動している。

インフェルノにいた時は当たり前に思っていたが、今のサクにはその鼓動が煩わしく、腹立たしかった。

鼓動が血を送り出し、痛みを増長させている。

サクは奥歯を噛みしめ、やたら重く感じる身体をやっこの思いで起

こし、ふらふらと立ち上がった。

「続けよう…」

そう言ってサクはゼロに微笑んだ。

サクとゼロはだんだん朦朧とする意識の中、義務的に、言葉を交わすこともなく次々と相手の身体を刺した。

インフェルノで生きてきたサクも、もはや赤くしるされた場所に何の臓器があるのか分からなかった。

サクはかすむ目でロウソクを見た。

これが尽きる時が自分たちの魂の終わる時…。

発狂も悪くない、とサクは思った。

もうすでに自分たちは狂っている。

世界で一番愛する者に何度も刃を突き立て、だんだんそれに慣れてきているのだから。

神の拘束具に耐えた経験のあるサクも徐々に痛みの限界に激しく消耗し始めた。

痛みが緩和される間もなく次の刺突が容赦なく来る。

そして自分もゼロの筋肉に覆われた身体に力を込めて刺さなければならぬ。

これは本当に絆を試す試練だとサクは痛感した。

ここまで来てサクはゼロを疑いはじめていた。

これほど情け容赦なく自分を刺すゼロは、最初はともかく今はもう何も感じず、ただ人形に針を刺すようなノリで自分を刺しているのではないか。

そして自分もそんなゼロへ、まるで復讐するかのように、刺突の一打一打を死ね、死ねと思いながら刺している所がないか。

サクの脳は完全にインフェルノに侵されつつあった。

何もかもが信じられぬ恐怖。

絶望と憎しみのあまり真実が見えない。

サクはゼロの名を呼ぼうとした。

しかし口から出るのはしわがれた息と喀血だけだった。

サクはゼロの身体の上でしめがけて、力なくナイフを振り下ろした。

もはやサクにはゼロの身体がその一撃でどれほど痛むかなど感じている余裕はなくなっていた。

サクはナイフを抜いた。

しかしナイフは内臓に届いておらず、オレンジに光ったままだった。

「もう一度だ、サク……」

ゼロが激しく吐血しながら言った。

サクは再びナイフを刺し、今度は出せる力を込めてナイフを押し込んだ。

力んだせいでサクの身体のあらゆる傷から血が吹き出した。

ナイフが深く刺さったのを見計らってサクはナイフを抜いた。

光は消えていた。

サクは口中の血を飲み込んだ

ゼロがナイフに炎を宿し、まるで仕返しかと思うほど強い力でサクを刺した。

ドスッという音と共にサクの身体がビクッと跳ねた。

サクの心は今や混沌としていた。

苛立ち、疑い、絶望、恐怖、憎しみ、そしてやはり捨てることのできない愛情…。

サクは震える手でナイフを炎にかざし、失敗しないよう力をこめてゼロを刺した。

その衝撃のせいでゼロが苦しそうに顔を歪めた。

サクはナイフを抜いた。

しかしサクが今出せる力の全てを出したにも関わらずまたもやナイフの光は消えていなかった。

すどん、という音がした。

サクの目から完全に色が消えた。

サクは横たわるゼロの身体に、場所を定めることもなく無感情にナイフをトンと刺した。

トン、トン、トン…

今のサクにとって、そこに横たわるものはゼロであってゼロではなかった。

サクの心からやっとのことで保っていた、わずかな理性と正気が消

えていった。

まるで大地に座って暇つぶしにこぶしで地面を軽くトントン叩くような調子でサクはゼロを何度も刺した。

トン、トン…

ゼロに自分が何度も痛みを与えている事実でサクはもはや極限状態にあった。

無駄な刺激などあってはならなかった。

サクの心はぷつつりと切れてしまった。

本能的に現実を見えなくさせることでしかサクは自分の心を心として保つことが出来なかった。

サクの脳はインフェルノのやり方でサクを守ったのだ。

ゼロは血に染まった顔を苦しそうに横に向けたまま、目だけをサクに向けた。

そしてサクのしていることを受け入れるように黙って目をつむった。

サクの頬から涙のように血がしたたり、サクの手の甲に落ちた。

「うああああああ!!」

サクは泣き叫びながらゼロをめった刺しにした。

ゼロは目を半眼に開いたまま、刺されるがままになっていた。

血が傷からピューッと吹き出し、口からはゴボゴボと激しく吐血した。

吹き出す血がサクの身体を赤黒く染めていった。

「もう終わりにするのよ!! 全部! 全部!!」

サクは泣きながら何度も何度も力を込めてゼロを刺した。

サクの身体も動くたびに出血し、激痛が走った。

ゼロはサクを見た。

そして絶望の中、笑った。

「お前がどんなに望もうと何も…終わらせることはできないさ」

ゼロは優しくサクの腕をつかんだ。

その腕に握られたナイフはあれだけゼロの身体を刺したにも関わらず、まだ光を放っていた。

ゼロはサクの目を見た。

サクはゼロの目を凝視した。

サクの目からは苛立ちや憎しみは消えていた。

しかし今や凄まじい恐怖がはりつき、心の狂乱がまだ終わっていないことを告げていた。

「いやあああああ！！！」

サクは自分の喉にナイフを突き立てようとした。

ゼロは素早く起き上がり、サクの喉とナイフの間に手のひらではなく、こぶしを挟んだ。

ゼロの予想通り、サクの渾身の力が入ったナイフはゼロの固い手の甲を容易に貫き、こぶしで庇ったにも関わらずそれを貫通し、サクの喉に突き刺さる勢だった。

ゼロは血にまみれて泣き叫ぶサクを抱きしめた。

「サク…」

ゼロはサクが自傷に走らないよう、サクが身動きがとれないほどにきつく抱擁し、うつろな目でサクの髪に頬を寄せた。

「…泣くな…」

ゼロが末期の息を吐き出すように言った。

サクはゼロの腕の中で、まるで泣き疲れた子どもが安心して母に身を預け、身体の緊張を解いていくように力を抜いていった。

ゼロはサクの力の抜けきった身体を横たえようと、サクの頭を支えて身体を傾けた。

「ゼロ…私を放さないで…」

サクが苦しそうに言った。

ゼロがサクを見て微笑んだ。

「大丈夫か…」

「全然大丈夫じゃない」

サクも痛みにながら微笑んだ。

そして血を吐き、息を切らしながら言った。

「ゼロ、抱いて…」

ゼロは力なくそう言うサクのうつろな目に吸い込まれた。

「私達の世界はそうして始まった。また私達は始まっていかなければならない。私達の新しい世界への祝福よ」

ゼロは震えながら笑って頷いた。

銀髪が血と汗で固まり顔や身体に張り付いていた。サクも似たようなものだった。

血だらけのサクの胸にゼロの喀血のがかかり、サクの身体から吹き出る血がゼロの顔や口に飛び散った。

ゼロとサクは互いの血の海の中で溺れるように、激しく互いを愛撫し続けた。

サクの腕に当たりインフェルノの息のロウソクが倒れた。

サクの意識がそちらに向きそうになった。

ゼロはサクの両頬を片手でつかみ自分に向けた。

そしてその唇に無理矢理血だらけの唇を重ね、ロウソクを邪魔なもののように弾き飛ばした。

炎が辺りの木や草を焼いて不自然なほど激しく燃え上がった。

サクが希望してそうだったかのように、炎はサクとゼロだけをよけ、サクの世界を驚異的なスピードで焼き尽くしていった。

サクはゼロを愛撫しながら、ごく自然に、まるで最初から約束されていたようにゼロの身体にナイフを深々と刺した。

そして光が消えたナイフを抜くと、その場所に唇を押し付け溢れる血をすすった。

ゼロが呼応するようにナイフで炎をかすめ取り、サクの身体に勢いよく刺した。

二人の身体感覚は完全に痛みを超えた。

極限の愛の快楽が痛みも恐怖も不安も、全てを凌駕し超えていく力となった。

サクとゼロは相手を傷つけ、そして相手に傷つけられる悲しい甘美さと官能の中に沈んでいった。

二人にとってそれはもはや互いの魂を感応する、死に物狂いの倒錯した愛の交わりだった。

相手の傷、吹き出す血、喀血、全てが互いを欲情させた。

二人は凶悪な、しかし壮絶なまでに相手を魅了する微笑みを浮かべて相手を刺した。

心を心地よくえぐっていく快感に二人は今すぐにでも相手が欲しかった。

そして二人はいよいよ最後に回していた顔への刺突に入っていた。喉、舌、耳、鼻、そして一番最後は目である。

相手の顔を壊すという最後にして最高の猟奇を、二人は互いに優しく狂気と快楽に身をゆだね、行った。

もはや力が足りないなどということはなかった。

傷つく快感、傷つける快感、そのために二人は貪るように相手を刺

した。

サクは最後の刺突部分であるゼロの両目を何の躊躇もなく横一線に切り裂いた。

ゼロの目から流れる血を舐めながらサクは視界を奪われたゼロの手を持ち、そのナイフで自分の両目を一気に切り裂いた。

サクの目から血の涙が溢れ出た。

ゼロはサクの顔を撫で、潰れた目に触れてその目を噛むように唇を当て、血をすすった。

二人は互いの血に染まった肋骨を手放した。

骨はカランという音を立てて地に落ちた。

二人のすることは全て終わった。

サクとゼロに残ったのは互いの感触だけだった。

炎はサクの世界で揺らぎ、全てを焼き尽くしていった。

ゼロの風が炎を煽り火炎がサクとゼロの体に巻き付いた。

一気に二人の身体や顔の肉が高温の炎に焼けただれ内臓が溶け出した。

舌と喉を刺したので痛み悲鳴をあげることも出来なかった。

サクの頬を血に混じって涙が流れた。

サクはゼロの名を呼びたかった。

ゼロの肉体を撫でて、体の各部所を確認するとサクはゼロに覆い被さった。

全身の火傷が触れ合い、黒く焦げた部分が愛撫のたびにベロリとはがれた。

身体が焼ける激烈な痛みが二人の肉体を激しく突き動かした。

サクの肉体もゼロの肉体も目で見ていたなら完全に醜く崩壊していた。

しかし紛れもなく愛する者の身体だった。

快楽に上気したサクの赤くなった頬。

ゼロのサクを見つめる官能的な金の瞳。

サクには、そしてゼロには相手の目、唇、髪、そして身体が自分を愛撫する姿が完全な形として、感じるのを超えて見えていた。

インフェルノの肉体でのゼロの細胞片がサクの肉体に放たれ、サクの細胞と結合した。

サクはゼロの体の上に倒れた。

薄れゆく意識のなかでサクは元の自分の美しい世界に戻っていった。

その世界でゼロがサクに笑いかけ、そのまま背を向け歩き出した。

サクは笑いながらゼロの名を呼び、その背を追って走り出した。

第十八話 愛さず愛されもせず

「第十八話 愛さず愛されもせず」

カイルはレクイエのベッドで目を覚ました。

レクイエはその場にはいなかった。

一人になりたかったカイルはレクイエを他の世界に追いやり、自分はそこで眠りについた。

どうしてあんなにレクイエ相手に興奮してしまったんだろうと思った。

しかもゼロのことを思い出して、あんなに欲情するなんて。

カイルは何だか恥ずかしくなってきた。

今すぐ自分の狂乱ぶりを見たレクイエを呼び戻し、魂を狩り取って自分のしたことをなかったことにしたかった。

しかし今の神界に神を殺す方法は存在しない。

そう言えば、とカイルはぼんやりしながら考えた。

ゼロとの初めての性交の後、恥ずかしくてカイルは慚然としていた。

性行為で優しく愛されたのはその時が初めてで、カイルはゼロに對して自分でも思いもよらないことをした自分が、冷静になった時、信じられないほど恥ずかしかった。

ゼロが笑ってどうした、と聞いた。

カイルは、自分があんなに性交で激しく人を求め乱れたのは初めてで、すごく恥ずかしいのようなことをボソボソと言った。

ゼロはカイルに微笑みかけ、大抵はそんなもんだと言った。
慣れればそれも楽しめるようになる。

しかしカイルは慣れなかった。
何しろカイルのいつもの性交時の乱れ方はまともではなかった。
頭がおかしくなるほど強迫的に性的絶頂を求め、異常な行為をし、
相手にもそれを求めた。

大抵は絶頂に疲れ寝てしまうのだが、起きた時、どうしてあんなことをしたのかといつも顔から火が出る思いだった。

だからカイルはいつも性交の後是非常に機嫌が悪かった。

ゼロはそんなカイルの気持ちを知ってか、そんな時でもとても優しくしてくれた。

「ふん…」

カイルは腕を両目の上に置いてしばらくじっとしていた。

腕が押さえたまぶたにある笑顔が浮かび上がった。

サク：

その名が浮かんた時、カイルはゾクツとした。

サクがカイルの精神世界でカイルの腕を庇ってその胸にかき抱いた。

サクの胸の感触を身体に感じ、それだけで一瞬にしてカイルの身体は『男』に変わった。

実のところカイルは男の身体で女を抱いたことが一度もなかった。女に欲情したことがなかったし、カイルは抱擁するよりされる方が好きだった。

自分にはサクを抱ける能力がない。

サクとの未来を漠然と夢見ていたが現実はきつと自分にはゼロのよう
うにサクを満たす力はない。

カイルはまた自傷に走りたくなった。

「カイル様」

誰かがベールの外からカイルを呼んだ。

レクイエムではない。

低くもなく高くもない声だった。

カイルは上半身を起こし、めまいを抑えるためにしばらくうなだれていた。

それからおもむろに言った。

「シャドウとスノウか？」

「はい。カイル様、緊急召集がかかっています。ゼロの世界が崩壊したことにより、次の神界の中心世界を決めなければならなくなりました。もう様々な上級神が女神スターテストの世界に集まっています」

カイルは鼻で笑って再びベッドに寝転んだ。

「適当に決めれば？ボク、スターテストって嫌いなんだよね。ついでにあの女の世界も嫌い。神王様がそう言ってたって伝えて」

しかし外にいる声の主は動じることもなく機械的にカイルに言った。

「カイル様、お急ぎ下さい」

カイルは舌打ちをして起き上がり、裸で外へ出た。いったん男になった身体は元に戻っていた。

カイルは足元にひざまずいている二人を睥睨した。

シャドウが両手を差し出した。

その上には一本の髪があった。

カイルは髪を無造作につかみ口に押し込んだ。

世界が変わりカイルは巨大な大聖堂のような建物の前に立っていた。

カイルはバカにしたように笑った。

何て健全で、アホみたいに壮大で、普通の世界だろうと思った。

神界にはこういうのが溢れている。

ありふれすぎていて、こういう世界は美しさを感じる前に退屈さを感じざるを得ない。

カイルは鎖骨を軽く叩き、歩き出した。

その動きが合図であるかのように、白いローブが巻き付くようにカイルにまとわりつき、髪もひとつにまとまった。

聖堂は扉がなく誰でも入れる開けた造りになっていた。

異常に細かい彫刻が施された長い廊下を通り抜け、カイルは目の前に現れた扉を八つ当たりするかのようにバーンと開けた。

長いテーブルに20人程の神々が着席していた。

カイルが入って来ると皆話を止め目を伏せた。

カイルはそのまま彼らを見ずに上座の席へ向かったが、ある所に来た時凄まじい殺気を感じて立ち止まった。

黒髪を首まで伸ばし、目を布で覆った少年が目にと止まった。頬づえについてカイルを『見ている』。

「やあ、セレイラ」

カイルが冷たく笑ってセレイラに声をかけた。

セレイラは何も言わず口角をキュツと上げそれに答えた。

カイルはそのまま進み、席についた。

「ではよろしいか」

カイルの斜め前に座っている凛々しい女神が言った。
人間としての年齢は30代前半くらいの厳しさと美しさを兼ね備えた大柄な女だった。

「ゼロの世界が崩壊したことはみんなもう知っているな。

今まで彼の世界が神界に転生した時の初めの地であり、たくさんの神々がそこで交流し、住する者もいた。

いわば複数の精神世界で構成される神界の中心的な世界だった。

それがなくなった以上、かつてのゼロの世界の役割を果たす新たな世界を探さなければならぬ。

皆どこか推薦または立候補でもいい。何かないか？」

「スターテスタ、その前に何故ゼロの世界は崩壊したのだ？」

神々の中の一人が凛々しい女神に問いかけた。

カイルはクスツと笑って大声で言った。

「あのさー。ゼロの世界の代わりだけどさ。

もうここでもよくない？ スターテスタの世界でさ。

つつーかどうでもいいよ。みんなボクの意見に文句ないよね。

じゃあ会合終了！ 解散ー」

カイルはニコニコと立ち上がった。

その時冷たく静かな声があった。

「座れよ、神王」

その場の空気が凍った。

カイルがうすら笑いを浮かべて声の主の方を見た。

「あんたの最愛のゼロはもういない。

肉欲だけで生きてるあんたの暇つぶしはもうない。
よって時間ならたっぷりあるだろ。座れよ」

セレイラがカイルを見ずに抑揚のない声で言った。

その声は大部屋の中でよく響いた。

「セレイラ、口が過ぎるぞ」

スターテストが無表情で忠告した。

カイルは笑い出した。

狂った爆笑の中、ヒュンヒュンと音がして数百本の神の拘束具がカイルの背後に並んだ。

周りの神々がギョツとした顔をした。

「カイル、よしなさい」
スターテストがカイルを諫めた。

セレイラが大声で言った。

「それを全部俺に刺すのか？いいぜ。やれよ。

気に入らないからってゼロとサクを追いつめインフェルノに墮としたように。

感情のおもむくままに全てを壊せ。

愛も希望も何もかも。

そして永遠に愛さず愛されもせず狂って生きるがいい」

釘が一本高速で下からセレイラに向かい、シュピツという音をたててその目隠しを切り裂いた。

はらりと目を覆っていた白い布が落ち、セレイラの恐ろしい赤い目があらわになった。

周りの神々が息を呑んだ。

カイルは体を折り腹を抱えてクスクス笑っているように見えた。

しかしそうではなかった。

「あっはっは…ヤバ〜い」

カイルが困ったように自分の身体を抱きしめるような素振りをした。

カイルが身体を起こした。

上半身を押さえる細い腕から大きな胸がこぼれていた。

「どうしよう。何か欲情しちゃった」

男の心を崩壊させるほどの妖艶な笑みを浮かべてカイルはセレイラを見た。

セレイラの目を露出させたことがカイルにとって思わぬ興奮の起爆剤となってしまった。

その恐ろしい目はおそらくセレイラにとって誰にも見せたくない恥部であろう。

カイルはそれを暴いた。

そのことでカイルは、まるで自分がセレイラを強姦したような気分になった。

カイルはもはやこの男がどんな味がするのか、その興味で頭が一杯だった。

カイルはまとった服を自分でめちやくちやに引き裂きながらセレイラに近づいていった。

その美しい裸体にその場にいた男神はもちろんのこと、女神さえもが釘付けになった。

神界ではまことしやかに男神の間で、女になったカイルの顔と身体は美の女神をも凌ぐ美しさだと囁かれてきた。

「神王のボクを侮辱してくれたおしおきだよ。
いまここできみをイカせてやる。

その醜い目がどう快楽に歪むのか見せてみる。
きみの味をこの身体に教えて…！」

カイルは荒い息づかいそう言い、セレイラのこめかみを舐めるように唇を押し当てた。

セレイラは椅子に座ったままカイルを無視するように前を向いていた。

カイルが優しくセレイラの髪をいじった。
そして次の瞬間、乱暴に髪をわしづかみにしセレイラの顔を上に向けさせた。

「ボクを見ろよ、セレイラ」

セレイラは赤い目でカイルを見つめた。
そして静かに言った。

「好きなようにするがいい。」

俺に何かをした所でお前が俺の心に影響することなどできない。
お前がいつそうけがれていくだけだ」

カイルは身をかがめてセレイラの耳を舐め、官能的な声で囁いた。

「もっとけなして。二人きりになろう」

カイルの目が妖しく光った。

その瞬間、ズドドドドツという音がして周りにいた神々の体に神の拘束具が突き刺さった。

神々はそれがセレイラに向けられているものと思い、全く防衛していなかった。

そして釘がかつてのゼロにしたように神達の身体を引き裂き始めた。

神達は断末魔の悲鳴を上げてのた打ちまわった。

「カイル…止めろ」

スターテストが痛みに震えながら言った。「今すぐ…皆の……」

ドスドスツという音がしてスターテストにさらに何本もの釘が刺さった。

カイルはスターテストを見もせず、神々の悲鳴が交錯するのを無視して、上気して言った。

「これで誰も見てない…二人きりだよ…！」

カイルの目は肉欲に濡れてほとんど抗い難い甘美さを感じさせた。

セレイラはカイルを見つめた。

そしておもむろに立ち上がり上着を脱いだ。

カイルは妖艶な微笑みを浮かべてセレイラの顔に手を伸ばした。

セレイラはその手をつかみ下ろさせた。

そして脱いだ上着をカイルの裸身に掛けて言った。

「お前の苦しみはみんな知ってる。
しかし苦しんだ末狂うことが自分にだけ許されている特権だと思
うな」

カイルは目を見開いた。

セレイラはそのまま踵を返し扉へ向かった。

扉を開けようとしながらセレイラは少し止まった。

「カイル」

カイルが潤んだ目をセレイラに向けた。

「俺をバカにして女の身体で誘ってきたりしないというなら、お前
に話しておきたいことがある。
ゼロと…サクに関することだ。気が向いたら俺の世界に来な」

「今すぐこのまま行っちゃだめなわけ？」
カイルが悪戯っぽく笑った。

「だめだな。こいつらに刺さった釘を抜いて…もう少し落ちついてから来いよ」

カイルはうつむいた。

「なあ、セレイラ」

「何だ」

少し黙ったあとカイルは抑揚の無い声で言った。
カイルの身体が元に戻っていった。

「ボクはサクを愛してる。ゼロよりも」

「なるほど」

セレイラが言った。

「そういうことか。でも理解できるよ」

セレイラが振り返りカイルに少し笑った。

そしてセレイラはそのまま出て行った。

第十九話 愚者たちの歴史

「第十九話 愚者たちの歴史」

結局ゼロの世界の代わりはスターテストの世界となった。

拘束具から解放された神々は、カイルの妖艶な笑顔の『ごめんネ』に思わず寛大になってしまい、無条件でカイルの提案を受け入れる形となった。

スターテストだけが惑わされることなく、激怒してカイルを叱りつけた。

「私はあなたを見ていると恥ずかしくなる！あなたのような者が神王だなんて！！」

他の神々と一緒に出て行こうとするカイルの腕をつかみスターテストは憎々しげにカイルに怒鳴った。

「あなたは確かに苦しみの代償に我々を統治する力を得た。

しかし真面目な場で自分の快樂のために、のべつまくなしに皆を傷つけるなんて！

もはやあなたは正気ではない！！」

カイルは優しく微笑んだ。

「スターテスト、神王になるということは正気を失うことなんだよ」

カイルとスターテストは睨み合った。

「健全なきみには見るのも耐えられない世界というものがある。
ボクはきみに解ってもらおうとは思わない。
だからきみもボクを自分の精神世界にあてはめて矯正しようとする
のはやめろ」

スターテストは黙ってカイルを見ていた。

カイルは冷たい表情でスターテストの目を見ながら言った。

「大嫌いだ。きみも、この世界も」

カイルはスターテストを残し、部屋を出た。

セレイラにフラれた鬱憤をスターテストではらせたこともあってカイルは鼻歌を歌いながら長い廊下を歩いた。

外に出てカイルはこれからどうしようかと思案した。
すぐにセレイラの世界に行くのもいいが、少しだけスターテストの

世界を見て回ろうと思った。

本人に向かっていやな態度を取っておきながら、実はそこその興味があるというのはカイルの常だった。

カイルはふわりと浮き上がり、空中遊泳を楽しむように飛んだ。

大聖堂を中心に街が広がっていた。

建物は一つ一つに手の込んだ彫刻が施され、どれひとつとっても適当な感じのするものはなかった。

カイルは本人には大嫌いと言ったが、それなりにこのスターテスタの世界が気に入った。

ゼロのようにシンプルな世界もいいが、ここも神王である自分にふさわしい美しい世界だと思った。

あの大聖堂をボクの寝室にしよう。

そんなことを考えながらカイルは街に降り立った。

街にはもう、他の神々と交流したいというカイルには理解しがたい能天気な神達が行き交っていた。

誰にも会いたくなかったのでそのまま自分の世界に行こうと思った。

しかし神界の中心世界には、一度来るとそこから別の世界に移動した時、身体が抜け殻として中心世界に残ってしまうことを思い出して、カイルは誰もいなさそうな建物に入った。

入口に誰も入ってこれないようにシールドを張りカイルは目をつむり自分の世界へ戻っていった。

カイルは即座に様々な神の髪を精製できる大皿の所へ行きセレイラの黒髪をつまみ出した。

カイルはしばらくそれを見つめたあと、舌でセレイラの髪をからめ取り、その世界へ入っていった。

そこは巨大な図書館だった。

カイルは書籍を見もせず、セレイラを探した。

セレイラは、おそらくこの図書館の中心であろう開けた場所で、机に積み上げられた本の山に囲まれ何かを書いていた。

「やっほ、来たよ」

カイルはセレイラの座っている正面にしゃがみ込んで机に肘をつき顔を出した。

セレイラはそれを無視して何かを書き続けた。

「何書いてんの？」

セレイラはしばらくペンを走らせたあと疲れたように書くのをやめ、背伸びをした。

「ふゝ」

「お疲れさん。そう、きみはインフェルノの記録者であり導き主だったね。

ここの図書館の本は全部きみが書いたものだろ。すごいね」

目に巻いた布ごしに目をこすりながらセレイラが言った。

「少しは頭が冷えたか？」

「んゝ、あんまり」

カイルはセレイラの目を覗き込むように見た。

「おい、お前！ そんな目で俺を見んな！

お前もうちよっと自分の危険性みたいなものを認識した方がいいぞ。そんなんだとその内、知らねー神からレイプされんぞ」

「それはつまりセレイラがボクをレイプする危険性もあるってこと？」

セレイラがイラついた顔でカイルを見た。

「恥を知れ、バカが」

セレイラは積み上げられた本を下から持ち上げ本棚に持っていた。

カイルは机に座り大声で言った。

「あゝあ、ボクはこんなに魅力的なのに何でサクもゼロもボクを見たくないんだろ。やっぱ性格？」

「違うよ」

カイルには意外だったが静かな声で即答が返ってきた。

「あいつらが結ばれるのは数億年の昔から約束されていた。運命だよ」

「でもボクはその運命を壊した！」

カイルは何故か泣きそうになりながら言った。

再びセレイラを見た時カイルは少し震えていた。

「…数億年って？」

セレイラが戻ってきて言った。

「やはりお前があのだ二人の神界での運命を操作して、結果奴らはここにいられなくなったのか。

よりによってあのだ二人に真剣に惚れたお前も可哀想だが、あいつらにしてみればとんだ災難をこうむったもんだな。

特にゼロが可哀想だ」

カイルはセレイラが自分の座っている机の近くの椅子に座るのを見ながら言った。

「どうということ？」

「話は全ての世界の創世までさかのぼることになる」

張りつめた空気がセレイラとカイルを覆った。

セレイラが疲れたように話し出した。

「カイル、お前はそもそも創世の話をどれだけ知っている？」

「あんまり。インフェルノにいた時に教えてもらったけど忘れた。確か始まりは大地父神インフェルノと天界母神グレイシス・グロリアスが出てきてその子どもが何か…そんなんだろ」

薄暗い図書館のなかでロウソクの炎がカイルとセレイラの顔を官能

的に浮かび上がらせた。

「世界の始まる遙か昔、『無』があった。無は生きていた。生命を持ち、心を持ち、そして永遠に広がり続ける身体を持っていた。

無はたった一人で孤独に夢想していた。

光ある自分。

希望と愛で満たされる自分を。

しかしどんなに望んでも自分は無でしかなかった」

セレイラはため息をついた。

「絶望した無は自分の腹をその腕で突き破り自らの生命を絶った。しかし無は腹に子を身ごもっていたのだ。

長い間光や希望を望むことで、その胎内には、無の理想の集合体の生命が宿っていた。

破られた腹からまばゆい光が溢れ、そこから光の女神グレイシス・グロリアスが誕生した。」

「それは新たな世界の誕生だった。

光に溢れる理想郷。

グレイシス・グロリアスはそこでたった一人の力で子をはらみ、司天地五神を始めとする、後に見えざる神々と呼ばれる者達を生み出した。」

「あのクソ共ね…あいつらグレイシス・グロリアスの子どもだったんだ」

カイルは髪をいじりながら何気なく言った。

「そんなある時、光の女神は自分の背中に蠢く存在に気付く。それは闇だった。

たくさん増えた神々はその心により光の理想郷を汚し始めていた。光の世界で交錯する神々の傲慢さや愛憎などが光の女神に闇をはらませたのだ。

グレイシス・グロリアスの背中が破れ、吹き出した黒い血と共に闇の化身の神インフェルノが生まれ出た。」

カイルが嬉しそうに無邪気に微笑んだ。

「昔っからあいつら随分ご立派だったんだ。他人の痛みなんかお構いなしの所なんか全然変わってないね」

セレイラは何も聞かなかったように話を続けた。

「新たに生まれた自分に相反する闇の男神を光の女神は憎んだ。

女神は様々な迫害を試みたが、インフェルノはそんなグレイシス・グロリアスをあざ笑うだけだった。

ある時インフェルノは面白半分でグレイシス・グロリアスを自分の虜にしてその魂を貪ってやろうと考えた。

そしてある神がインフェルノにその方法を授けた。

あらゆる神の中で最も邪悪ながら最も美しく神秘的な神、司天地五神の一人の愛と交合の神ジェラストだ。

愛の神はやり方次第では相手を壊すことも、また愛されることも出来る『交合』というものの技術をインフェルノに教えた。それはまた、一人で子を成していたグレイシス・グロリアスにインフェルノの種を持った子を産ませる方法でもあった。」

「インフェルノはやったのか？」
カイルはニヤニヤしながら聞いた。

「ああ。インフェルノは光の女神を最初は強引に陵辱した。しかし女神が身を任せるにつれ優しく繊細に…光と闇が交合している時、光の世界はいつもの光り輝いた時間と闇に覆われる時間が交互に来了。

千の光と闇の時を超えてインフェルノとグレイシス・グロリアスは愛し合った」

「なっ…それってインフェルノとグレイシス・グロリアスは人間時間にしたら千日やり続けたってことだろ？」

「簡単に考えるとそうなるな。
しかしその時、光と闇がどれくらいの間隔で来ていたのか分からない。おそらくもっと長かっただろう」

「あはは…！インフェルノ凄いいタリテイだな！いっぺんお相手
願いたいもんだよ」
カイルが目を見開き上気して言った。

「この話したら絶対お前そう言うと思った」
セレイラがイラつき気味に顔をしかめた。

「インフェルノはどんなに交合してもグレイシス・グロリアスを愛することはなかった。
しかしグレイシス・グロリアスはインフェルノを愛してしまった。
光の女神は闇の神を夫とした。
その時からインフェルノの闇は光を通さないが、光は常に闇を、影をまとうようになった。
そしてグレイシス・グロリアスはインフェルノの子どもを身ごもった。」

セレイラはカイルの顔をじっと見た。

「ここで説明しておくが光の女神が一人で生んだ神達は何故見えざる神々なのか、それは闇の血が流れていないからだ。
光と闇が混合して初めて目に見える姿となる。
つまり産まれてくるインフェルノとグレイシス・グロリアスの子どもは俺達『見える者』の始祖となる」

カイルが座り直し、目をパチパチさせた。

「どんな奴なの」

「この子どもは『癒やしの化身』として生まれてきた。二人の子どもには全てを優しく愛撫する力があつた。全ての神を。光の世界を。」

その力は後に『風』と呼ばれることになる」

「か……ぜ……？」

カイルがゆつくりと立ち上がった。
その背筋にはゾクゾクとした感覚が広がっていった。

「グレイシス・グロリアスは自分を生んだ哀れな『無』を想い、その子どもに無にちなんだ名前……『ゼロ』と名付けた」

カイルはセレイラを凝視した。
セレイラはカイルを静かに見返した。

「本当か……？」

「ああ」

カイルはゼロの顔を思い浮かべようとした。

しかし何故かゼロの顔がはつきり浮かぶことはなかった。

癒やし…愛撫…風…ゼロ…

それがカイルの混乱した頭の中でぐるぐる回っていた。

第二十話 酷き悲恋

「第二十話 酷き悲恋」

「いつそれを知った？」

「…ゼロ達がインフェルノに堕ちていく準備をする時この目でゼロとサクを見た。俺の裸眼は目の前にいる者の全てが見える。記憶も、辿ってきた人生、輪廻全ても」

カイルが動揺して唇を噛み、スタスタと本棚の所まで行って、目をつぶりそこにもたれかかった。

セレイラはカイルの思考を邪魔しないように話を中断し、黙っていた。

「ゼロは話してくれなかった」

しばらくの後、カイルがぐぐもった声で言った。

その顔はセレイラからは見えなかったが、セレイラは笑って言った。

「カイル、泣いてるのか？」

カイルは黙った。

セレイラは冷静に言った。

「安心しろ。サクにも言っていないさ」

「サクと比べられると、なおのこと腹が立つんだよ！向こうの方がみんな公認のゼロのお相手みたいに！」
カイルがしゃくり上げながらわめいた。

セレイラは首を傾げてカイルを見た。
そしておもむろに言った。

「カイル、お前サクがゼロより好きだって言ってたよな。
俺がサクを『見た』時、その心も見えた。
どうだったと思う？」

「え…？」

「言っとくけどお前の存在は彼女の心の中でかなりの位置を占めてるぜ。」

驚いたことにゼロよりもだ。

それなのに何故恋人にならないのか。

それはサクがお前の中に自分を見ているからだ。

好き以前に見ていて悲しくなってしまう。お前の痛みが分かりすぎてしまう。

でもサクはとにかくお前のこと嫌いじゃないぜ」

セレイラはニヤリと笑った。

しばらく本棚の横で鼻をグズグズすすっていたが、カイルはツカツカと暗闇から出てきて、勢いよく椅子に座った。

目が少し潤んでいたが、口元が微かに笑っていた。

サクの心に自分がいると知り、かなり気をよくしてカイルはセレイラに照れ笑いをした。

ゼロのことでショックを受けたことがあっても、サクが自分を想ってくれている事実だけでゼロのことなどどうでもよくなってしまふ。やはりカイルはサクを一番愛していた。

「全く…ゼロだったりサクだったり忙しい奴だな」

セレイラが頬杖をついてカイルを見つめた。

それはまるで長年の親友をじっくり眺めているような雰囲気だった。

「どうしたの？」

カイルが戸惑ったような顔をした。

セレイラはしばらく黙った後言った。

「さっきお前のことも『見た』。」

カイルはセレイラを凝視した。

「お前はめちゃくちゃにされてきたんだな。心も身体も。大変なことだ。」

お前はいつも他人の愛情深さに殺される。

悪意にはあれだけ強いのに、たったひとつの愛ある言葉に、行動に、お前は張り裂けてしまう。

サクもゼロももう忘れてしまえ。

あいつらはお前の痛みを自分の痛みとして感じた。

そしてそのことがお前を壊し、狂わせてきたんだ。分かっているだろう」

カイルも何も言わず、セレイラも黙っていた。
長い沈黙が続いた。

そしてカイルの涙がピタピタと机に滴る音をセレイラは聞いた。

カイルは何も言わなかった。
ただ泣いていた。

しばらくの後泣きながらカイルが言った。

「それでもボクは……」

カイルは最後の言葉を、
すがるように万感の思いで言った。

「愛されたい……！」

「なら俺はお前を呪縛から解放するために残酷な事実を語らなければならぬ。

サクとゼロの強い絆を。そしてお前にとつたら……裏切りの事実を」

セレイラが厳しく言い放った。

カイルが濡れた目でセレイラを見た。

「ゼロが生まれた所からだったな。」

セレイラは再び創世の物語を語り始めた。

「ゼロはその後、インフェルノとグレイシス・グロリアスによって妻を与えられることになる。

インフェルノの肋骨により肉体を、グレイシス・グロリアスにより清らかさを与えられたその女神は『愛される者の化身』として生きることとなった。

二神はその女神の命名権をゼロに与えた」

「まさかその女の名前は…」

「サク」

セレイラが無感情に言った。

「そう。『サク』だ。ゼロは妻となる女神にサクと名付けた」

「『前世』か…」

「そしてグレイシス・グロリアスは二人への祝福として世界を贈った。

それは今の神界の基盤である自分の心の世界を具現化する力だった。二人は互いの世界を行き来して幸せな時を過ごしていた」

「実はな、カイル。

ここからゼロとサクの記憶が抜け落ちている所が多くなってくるんだ。

恐らく何かがこの時起こり、それをきっかけに二人には受け入れ難い悲劇が起こったのだろう。

それによる記憶の解離だと思う。

ここから再びはつきりした記憶として残っているのはそれから少し後……」

「インフェルノが妻であるグレイシス・グロリアスを殺し、サクをゼロから奪い、自らが作り上げた闇の世界へ連れ去った所だ」

カイルが驚いたように目を見開いた。

「インフェルノはサクが誕生した瞬間に、サクに恋した。

強烈な愛の衝動でインフェルノは静かに崩壊し始めていた。

闇の神は妻を見ることがもなく、長い間休む間もなく心の中でサクを犯し続けた。

結果インフェルノは想像のみで、サクの肉の味をゼロより知るまでになった。」

> i 3 5 3 9 6 — 3 5 3 2 <

「そして最後の時が来た。

インフェルノはグレイシス・グロリアスをサクだと思って抱くことにした。

それは二人にとって感じたことのない悦楽だった。

インフェルノのサクへの切なさ、恋しさが激しくグレイシス・グロリアスの身体にぶつけられた。

もはや攻撃だった。

そして絶頂の時、インフェルノはサクの代わりの光の女神の肉体に、全ての心の闇、憎しみと愛を放った。

それは凄まじい破壊の力となって女神の身体を襲った。

グレイシス・グロリアスの身体は粉々になりその魂までもが破壊された。

このことは神が神を殺した最初で最後の事実として残っている」

「妻を殺し、闇の力でゼロをも壊して、インフェルノは意気揚々とサクを自分の作った闇の世界にさらっていった。

そしてインフェルノは殺した光の女神の破片でその世界を飾った。

それは太陽、星、月などに姿を変え、闇の世界を輝かせた。

現在の輪廻の地、インフェルノの原形だ」

「グレイシス・グロリアスが死んで、見えざる神達や光の世界はどうなったの？」

「そう、そこだ。まともな質問だよ。

しかし光の女神が死んだ直後の神界の有り様は実のところ分からないんだ。

歴史の空白期間なんだよ。

ゼロの記憶もほとんど消えていた。

ここから再び神界のことが分かるようになるのは、かなり後のことになる。

かつてサクやゼロが授けられた、自分の心の世界を具現化する力が神界を形作り始めて、いわゆる『神王』が現れた所からだ。

もう光の女神はいなかったが、その頃からもう神界は『グレイシス・グロリアス』と呼ばれていた」

「ふーん。じゃあもうインフェルノに神の子どもがいた頃だね」

「ああ、そうなるな。

一方のサクとインフェルノだが、サクはもちろんゼロを愛していた。しかし闇の神はそんなことはどうでもよかった。

インフェルノはサクと交合を繰り返し、様々な生物を生ませた。

今インフェルノに生きるあらゆる生物、虫や動物、亜人種、人間、全ての種の始祖となる命達はインフェルノとサクの子どもなのだ。」

「『愛される者の化身サク』と『闇の神インフェルノ』が混合することで大地インフェルノの地獄が始まった。

愛されたいばかりで愛することを知らない者達。

自分を愛せないなら殺す。

自分が愛せないから殺す。

こうして憎しみと対立が深まり、世界には孤独と絶望が蔓延してい

った。」

「そしてサクは闇の細胞片に身体を侵され続けた結果、身体はもちろんのこと、その心も崩壊していった。

何千種もの命を誕生させた後サクは謎の死を遂げる。」

「インフェルノは怒り、絶望した。

永遠にサクにもう会えない事実を受け入れられなかった。

そこでインフェルノは、地獄の住人達全てに輪廻転生の呪いをかけた。

苦肉の策だった。

サクの血が入った何億という魂が輪廻することにより、サクの魂が再び形作られ、またサクに会えかもしれない。

そんな不安定な要素に賭けなければならぬほどインフェルノは必死だった」

「しかし神界のゼロの方では、サクの転生する詳しい血筋と日時が報告されていた。

どういう手段だかは今もって分かっていないんだが。

さあ、カイル。サクはこの時から何年後に転生するとゼロに報告されたと思う？」

「え…まあ、大きく見積もって千年とか二千年後くらい？」

セレイラが微笑んだ。

「六億七千万年後だ」

カイルはあまりのことに口をポカンと開けた。

「何それ……」

「ゼロは待つて待つて待ち続けた。

ただひたすらサクと会えるのを楽しみに。

その間サクを自分の所へ確実に連れてくるために色々な力も身に付けた。

そして気が遠くなるような時を経て、ゼロはようやくサクと会えた。それほど想う女を…。

インフェルノに堕ちる時サクとゼロは肉体を互いに刺し合った。

ゼロはどんな思いでサクの身体にナイフを突き立てたんだろうな。

やっと幸せになれると…インフェルノからサクを取り返したのに」

カイルの眉がつり上がった。

「ボクを責めてるの？」

少しイラつきながらカイルは聞いた。

「何かきみ、さっきボクに対するゼロの裏切りの事実とか言ってたよね。」

ゼロのサクへの思いなんてどうでもいいからそっち教えてよ」

「そうだな」

セレイラが挑戦的に笑った。

「カイル、お前の夫、または妻となる者の寝室に必ず置かれる大きな水盆があるだろう」

「ああ、うん。」

あれは水盆の水を通してインフェルノでのことを見たり、ほんの少しなら輪廻者の運命を操作できる…」

「そうだ。あれは神王が代わるごとに、新たな神王の選んだ伴侶の寝室に置かれるのだ。」

「あれは元々サクがいつ転生するか知ったゼロが、その時の神王に頼んで作られたものなのだ。」

しかしその神王はそれを見る条件を出した。

ゼロに自分の伴侶となることを要求したのだ。

ゼロはその時は断っている。

だから神王はその水盆を自らの伴侶となった者にしか見せることはないと言張した。」

「ゼロはサクを安全に転生させるために、その血筋の者を絶やさぬよう、水盆を使って見守り、守護したかった。」

セレイラはカイルの目をじっと見た。

「ゼロは神王に自分の魂を売るしかなかった。」

「しかしゼロが自分を心から愛していない事実を知る神王は、そのことが許せなかった。」

怒った神王は、自分の手で永遠にゼロを呪縛するために、水盆を歴代神王の所有物とし、代々の神王の伴侶でないと見ることができないようにした。」

「それはつまりゼロに、水盆を手にしたくば神王たる者達に永遠に仕えよということだった。」

ゼロはだから水盆を手にするために今まで歴代神王の夫として生きてきた」

セレイラは黙った。

何故かそれ以上説明することができなかった。

「もういいよ」

カイルは立ち上がった。

カイルもう聞きたくなかった。

セレイラにこれ以上、抗いようなない事実を話されるのは嫌だった。

カイルは何故かゼロに『愛してる』とは言えなかった。

ゼロはきつと同じように『愛してる』とは言ってくれないだろうと思ったからだった。

ゼロは運命づけられ歴代神王を愛さなければならなかった。
サクを死ぬほど愛したゆえに、神王に愛されねばならなかった。
そのために……

カイルはふらふらと机にぶつかって転びそうになりながらセレイラの所から離れ、歩いた。

完全に麻痺した顔面に涙が伝った。

ゼロが笑っている。

カイルの髪に触れ、抱きしめる。

抱かれるカイルの心にはゼロしかない。

抱きしめるゼロの心にはサクしかない。

全ては義務だったのだ。

カイルは荒い息でしゃくり上げながら、微かに笑い声を上げた。

インフェルノはグレイシス・グロリアスを殺した。

ボクも、ゼロを殺す。

「ゼロ、今までご苦勞様。」
自分にしか聞こえない声でカイルは言った。

第二十一話 君と死ぬため生きるため

「第二十一話 君と死ぬため生きるため」

サクとゼロはインフェルノのルシエルカテゴリという、魔人種と呼ばれる者達の住む街に身を寄せていた。

普通の輪廻者にとって魔人種というのは謎の種族とされ、サクも彼らのことをよく知らなかった。

「今やオレ達のインフェルノでの人種は魔人種だ」
ゼロがサクに説明した。

「魔人種というのは神界からインフェルノに堕ちた者達の呼び名だ。この辺りは樹海に囲まれ普通の輪廻者は近づけない。」

ゼロとサクの転生は成功した。

二人は魔人種の街で目を覚ました。
身体の痛みは消えていた。

フェルダという下半身がムカデの男が樹海の中で倒れている二人を見つけ、助けてくれたらしい。

フェルダは漆黒の艶やかな髪に挑戦的な一重瞼の目をして、白い裸の上半身に人間の女性の頭部と花を合体させたような飾りの大きな首飾りをしていた。

そしてムカデの下半身にはシルバーのピアスをいくつも飾り、全体的にムカデの気持ち悪さより美しさと格好良さの際立つ外見をしていた。

そのまま美男子としていればいいものを、彼はオカマのようで、低い声で女言葉で喋っていた。

「久しぶりじゃない、ゼロ」

サクとゼロが目を覚ますなりクールな女を気取ったような言い方でフェルダが言った。

サクは二人は知り合いなのかと思ったが、神界の中心世界の主だったゼロはおそらくグレイシス・グロリアスの住人なら誰もが知る存在だろうと思い直した。

案の定ゼロはフェルダをよく知らず、フェルダの方もゼロのことを顔しか知らないような感じだった。

「ゼロ、あなたがインフェルノに堕ちるなんてね。」

フェルダがサクをチラリと見た。

「恋人と新婚旅行するにしておかしな場所を選んだこと」
フフとセクシーに笑ったフェルダを見てサクは彼の完全な女性性
へのセルフプロデュースぶりに舌を巻いた。

ゼロがフェルダを見て言った。

「細かい事情はぼちぼち話す。悪いが少し落ち着くまでここにいて
もいいか？この街の長は誰だ？」

「アタシよ」

フェルダが腕組みして言った。

「いいわよ。あんたら二人キレイだから。アタシの集落には美しい
ものしかないの。」

アタシの美的感覚にかなったものしか。醜いものは嫌いよ」

サクは顔をひきつらせながらも、その極端な物言いに笑った。

数日経ち、新たな問題がサクとフェルダを悩ませ始めた。

サクとフェルダは知らないことだったが、ゼロは神界で生まれたの

で、『ヒト』の身体を持ちインフェルノで暮らしたことがなかった。故に少しのことで痛みを感じたり、不快感を感じる身体になかなか馴染めなかった。

しかし一番の問題はそんなことではなかった。

ゼロは食べることが出来なかった。

食物によって保たれる身体というのがゼロには信じられず、口から異物を摂取するのに猛烈な不快感を感じずにはいられないようだった。

空腹になるのだが口に物を入れ、飲み込んだ瞬間に、身体の中に食物が入る感覚の気持ち悪さで吐き戻してしまうのだった。

水さえも飲めず、渇きにも苦しむ羽目になっていた。

しかし、口から食物を摂取することもそうだったが、ゼロにとって一番あり得ないのはどうやら排泄らしかった。

サクとフェルダで1から10まで説明し、ゼロが実際それが出る所が見たいと言うのでフェルダが捕まえて檻に閉じ込めた亜人を使い、実際排泄する所を見せた。

サクは嫌な予感がしたが案の定ゼロはそれを見るなり失神しかけた。

サクに過剰反応を怒鳴りつけられようやくゼロは正氣に戻った。

「だってお前ら、よく考えてみろ」

サクはゼロを睨んだ。

「この身体がモノを食べるのは何のためだ？ あんなおぞましいものを出すためだろうか」

ゼロがまるで悟ったように重々しく言った。

再び数日が過ぎ、もはや笑い事ではすまなくなった。

ゼロは飢えと渴きで正氣を失い、意識がある時は目に映るものを手当たり次第、口に入れては吐いていた。

ゼロが特によく口に入れるものは泥だった。

渴きと飢えを両方癒せるように見えるらしく、ルシエルカテゴリの研究施設から排出されるヘドロにまみれて倒れているのを発見され、サクが呼ばれたことがあった。

サクはゼロのそばにすることが出来なくなっていた。

ゼロの苦しむ姿を見続けているうちにサクも徐々に生きる氣力を失い始めた。

水も飲むことの出来ないゼロはこのままだと餓死する。

一日生き延びるのも大変そうな所を見るとゼロはもってあと数日だろうとサクは思った。

サクにとってゼロの命の終わりは自分の命の終わりだった。

だからこそサクはゼロが死ぬことに冷淡だった。

サクも半分正気を失っていた。

その日は弱い雨が降っていた。

サクは鎖でゼロの腕をベットに縛り付け外へ出ていけないように固定していた。

ゼロはやつれた顔で、子どものようにぐっすり寝ていた。

赤ん坊のように昼夜関係なく目を覚ましては空腹のあまり暴れるゼロをサクはもはや放っておいた。

サクは全く寝ていなかった。

ゼロが食べることが出来ないように、サクは眠ることができなかった。

まだ理性があった頃、よくサクはゼロに向かって泣き叫んだ。

それはゼロを救えないつらさではなく、ゼロの痛みを知ることのできない恐怖からだった。

ゼロはそんなサクを苦しいながら抱きしめ、笑って大丈夫だと言った。

そのたびにサクは絶望で胸が痛くなった。

ゼロだけが極限の苦しみに悶えて、自分は普通だということがサクを激しく壊していった。

サクは顔を手で覆って、ゼロの寝ているベットの横の机で死んだようにじっとしていた。

半分頭が冴え渡り、半分は完全に思考が停止した状態だった。

やおらゼロを縛った鎖がはっきりジャラジャラと鳴った。

サクがふっと覚醒した瞬間、シートが裂ける音がした。

サクははっとしてゼロを見た。

ゼロがシートを噛みちぎり飲み込もうとしていた。

サクは無表情でゼロを見ていた。

ゼロは鎖に縛られた腕を無理やりよじり、鎖から逃れようと暴れた。

もはやゼロはシートを口に入れたいがために命がけで鎖を外そうと
していた。

鎖から手首を抜くために自分の手のひらを切断しようと、ゼロは獣
のように手首の肉を大きく噛みちぎった。

鮮血が飛び散り、ゼロの身体が痛みで跳ね上がった。

しかしそれでも、自由になるためにゼロは激しく痙攣しながら自分

の肉をえぐり続けた。

ゼロの目は完全に色を失くしていた。

サクは自傷に走るゼロを見ながら、だんだんと胸の中をメラメラと憎しみの炎が舐めるのを感じた。

サクは椅子から立ち上がり、ゆっくりとゼロに近づいた。

ゼロの横に立った時、吹き出す鮮血がサクの顔と服に跳ねた。

サクはおもむろにゼロの頭に触れた。

そして次の瞬間、寝ているゼロの髪を片手でわしづかみにしてゼロの頭を持ち上げ、その頭を宙吊りにした。

サクは、非情な目でゼロを見下ろして言った。

「ゼロ、私に分かる？」

ゼロは止まない痙攣で震えながら言った。

「…ああ」

ゼロの目はひたすら虚空を凝視していた。

「ああ…分かる…」

激痛で麻痺した感覚の中、しかしその目はどこか安らかで、サクが自分に何をしているのかも、何も分かっていなかった。

サクはゼロを吊し上げたまま、ベットの上のゼロの身体にゆっくり馬乗りになった。

サクは人形のような瞳孔の開ききった目でゼロを見つめた。

「ゼロ、もう死ぬ？」

サクが何の感情もなく言った。

ゼロが笑った。

その途端、サクは片腕を伸ばし、ベットの横にある窓ガラスを突き破った。

バシャーンと音がし、ガラス片がサクの腕を傷つけてベットに散らばった。

サクはゼロの髪をつかむ手を放した。

そのままゼロの頭がベットに跳ね、サクはゼロの胸元を服を引きちぎるように開いた。

沈黙の中、サクはガラス片を撫で、つかんだ。

サクはゼロの胸に頬をよせた。
感情のこもらない目から涙が一筋流れた。

「ゼロ、好きよ」

サクはゼロの胸からガラス片を上方へ向かってつーつと滑らせた。
ガラスは容易く、ゼロの肉に傷をつけていった。

サクがガラスでゼロの唇を撫でた。

ゼロはうつろな目でサクの持つガラスにキスをした。

そしてガラス片がサクの身体の一部であるかのように優しく舐めた。舌が切れ、新たな血が滴るのも気にせず、ゼロはガラス片を愛おしむように舐め続けた。

サクは冷酷な眼差しで、ガラス片をゆっくりゼロの唇の隙間に挿入した。

ゼロは母乳を求める赤子のように従順に、ガラス片を飲み込んだ。

気が付くと、何故かサクは無感覚の中にありながら、全身に凄まじい汗をかいていた。

汗を前髪から滴らせ、サクはゼロの額にキスをした。

ゼロはすぐに動いた。

サクを弾き飛ばし、横を向いて激しく嘔吐した。

ガラスが口腔と喉を傷つけ、吐瀉物にはガラス片のほかに多量の血が混ざっていた。

雨音と血を吐くゼロの咳の音が薄暗い光の中で絶望的な静けさを更に強調していた。

サクの目が再び鬼女のような狂気で燃え上がった。

サクは咳き込んでいるゼロの髪を乱暴につかんだ。

そして凍死体を連想させるような冷たく乾いた声で言った。

「死ねばいいのに。あなたが死ねば私も死ねる。もういいよ」

その時サクの意志とは全く無関係にサクの頬に涙が伝った。

涙は止まることなく流れ続けた。

サクは不思議そうに涙を手で受けた。

そして涙が滴り落ちる先に目をやった。

ゼロの腕があった。

温かい身体が、顔があった。

その瞬間サクは理解した。

ゼロにとって死んでしまうことなど容易かった。

それなのに生きているのはサクのためだ。

食べられない物を吐いても吐いても無理やり口に入れ、生きること
を諦めず、気が狂うほどの飢餓に耐えているのは、生きてサクのそ

ばにいたいからだ。

サクはゼロが死に、自分が死ぬことしか考えていなかった。
しかしゼロはサクが生きているから自分も生きていけると、全てに
耐えていたのだ。

サクは静かにゼロが吐いたガラス片を拾い上げた。

サクは泣きながら穏やかに微笑んだ。

「ごめんね、ゼロ。許して」

サクはガラス片をゴーフレットでも食べるかのように飲み込んだ。

身体の中に焼け付く痛みが走った。

今は自分をバラバラに壊してしまいたい一心だった。

第二十二話 極限を呼ぶ絆

「第二十二話 極限を呼ぶ絆」

ゼロは急に覚醒した。

数日ぶりに頭が冴え、空腹感より不安感が頭を覆っていた。それが何故なのか分かるまでしばらくかかった。

ゼロはサクを探した。

サクは床に震えながら倒れていた。

ゼロはサクの所に行こうとした。

身体が勢いよく前へ出たが、手を縛る鎖に腕を持っていかれ、ゼロは後ろ向きにベットから落ちた。

「サク！」

サクはゼロと目が合わないように、ゼロのいる方向とは反対に身体を向けた。

「サク！こっちへ来い！！」

ゼロは叫びながら鎖を外そうとあがいていた。

しかし先ほどの手のひらを噛みちぎった時の傷の激痛で身体に力が入らず、ゼロは苛立ってわめき声を上げた。

「サク！オレを見ろ！！サク！」

サクは手に力を入れ、立ち上がろうとした。
しかし胸の激痛と呼吸の苦しさとで全身が震え、再び肩を地面に打ちつけるように倒れた。

サクとゼロの目が合った。

サクが目を伏せて笑った。

「ゼロ…ごめんね…」

サクの唇から血が溢れた。

その瞬間ゼロの血が逆流した。

ゼロの頬を一筋の風が流れた。

その風がゼロの頬をぱっくり割った。

ぬめりのある風がゼロを取り巻き、流れる血を上方に舞い上げた。

ゼロはサクを静かに凝視していた。

その心の中では狂ったようにサクの名前を何度も何度も絶叫し続けた。

ゼロの心の狂乱に呼応するように、風は辺りから集まり、練り合わされ、強さを増した。

荒れ狂う風がゼロの全身を切り裂いたが痛みを感じることもなく、ゼロは心の中の何もない世界で静けさと共にサクと向き合っていた。心が静けさを増せば増すほど、風は巨大な渦となって辺りのものを巻き上げ、破壊していった。

ゼロの風は柱のように地から天へ伸び、竜巻となってルシエルカテ

ゴリを襲った。

フエルダが竜巻に気付いたのはルシエルカテゴリの美男美女に囲まれ優雅にお茶をしていた時だった。

突然窓ガラスが割れ、爆風で家の中の物が吹き飛んだ。

「何!?!」

フエルダは顔に傷がつかないようにかばいながら外へ出た。

サクとゼロに貸し与えた家の辺りから、暴風が粉塵を巻き上げ、螺旋を描き上空へ伸びていた。

ルシエルカテゴリの住人達が集まってきた。

フエルダはサク達の家に近いだけ近づきながら怒鳴った。

「あんた達は危ないから避難していなさい!?!」

その時、住人の一人が叫んだ。

「フエルダ、あれを見ろ!?!」

砂ぼこりがもうもうと立ち込める中、荒れ狂う風の影響を一切受けることなく、歩いてくる者がいた。

ゼロがサクを庇うように抱きかかえて、こちらへゆっくり向かってくる。

ルシエルカテゴリの住人達は爆風が吹き荒れる中、髪一本すら揺らない『風の神』の崇高な姿に言葉を失い、ただただ黙ってゼロを見ていた。

ゼロは丁寧にサクを大地に寝かせると、フェルダを見つめた。
フェルダは『大丈夫よ』と言うように頷いた。

ゼロは安心したように目をつむり、そのまま意識を失った。

竜巻はゼロが倒れるのと同時に急速に威力を失っていった。

サクはルシエルカテゴリの病院兼収容所のような施設に運ばれた。

人間達の医療施設とは違い、設備が機械ではなく何だか得体の知れない内臓のようなもので構成されていた。

しかし治癒の技術は人間のそれより格段に上で、サクは身体を切開されたが跡は全く残らなかった。

意識はまだ戻らなかったがサクは命をとりとめた。

サクが絶対安静状態の時、ついに飢えたゼロは事件を起こした。

ゼロは美しい者を集めたというルシエルカテゴリの中にあってもその美貌は突出していた。

外でゼロが変なものを口に入れては吐いている所に人垣が出来たかと思えば、それは全員ゼロ見たさの女達だったりした。

竜巻が消えた後、ゼロはフェルダの家に収容されていた。

例によってフェルダがお茶会を開いていた時に、それを知る女達が数人でフェルダに内緒でゼロの寝室に忍び込んだ。

後から彼女らが言うには、全員で寝ているゼロの顔を覗き込んだらしい。

飢えたゼロは鼻先に肉の匂いを突き付けられて、制御を失った。

ゼロに噛みつかれ、数人が激しい内臓損傷や出血多量で死亡し、数人が顔や身体に醜い傷跡が残る大怪我をした。

フェルダが騒ぎに気付いて駆けつけた時には、ゼロは血と反吐の海の中で吐き疲れて寝ていた。

普通に考えればサクとゼロがルシエルカテゴリから追い出されるはずだが、追放となったのは顔や身体に傷跡が残った女達だった。フェルダの美的感覚が、醜い傷のある者をルシエルカテゴリの住人として認めなかったのがその理由である。

ゼロはサクと同じ施設の収容所に入れられた。

そこは身体の異常が原因によって住人を傷つけたりした者達が入る所で、大抵は収容された時点で身体も心も壊れ過ぎている場合が多く、すぐに死んでしまう者がほとんどだった。

数日経ち、サクの方は意識は少し混濁していたが、身体は確実に快方に向かっていた。

それでもまだたくさんチューブのようなものに繋がれ命を保っている状態だった。

ある夜だった。

完全無菌のサクが寝ている部屋に訪問者があった。

人の足ではない何かがズルズルとサクににじり寄る音がした。

寝ているサクの前髪を誰かが優しくいじり、独り言のようにつぶやく声がした。

「サク…」

フェルダだった。

フェルダはサクの安らかな寝顔を眺めていた。

しばらくしてフェルダは寝ているサクに語りかけるように言った。

「あんたと話しに来たわ。寝ているならそのまま、起きているなら寝たふりをして聞いてちょうだい」

フェルダはサクの頭を撫でて、おもむろに言った。

「サク、あんたはきれいね」

フェルダはサクを無表情でじつと眺めた。

「この連中はゼロの美貌に首ったけだけど、私はゼロなんかよりあんなの方が美しいと思ってる。比べようもないほどに。

美の絶対条件である、はかなさ、危うさ…あんなにはそれがある。まるで花だわ。

どんなに賞賛されても驕ることなく咲き、静かな風に身を任せ散っていく…。

あんなはゼロという『木』が咲き誇る『花』なのね。きっとあんなの全てはゼロと共に…そして今」

フェルダが厳しい顔でサクを見下ろした。

「その『木』が死のうとしている」

サクは微動だにせず、周りの奇妙な医療設備だけが不思議な音を立てていた。

「サク、あんなは寝ているからこれは私の独り言よ。ルシエルカテゴリでは重病人を無理やり動かすようなことは禁止されているからね。

いいこと？ここに鍵の束とこの施設内の地図を置くわ。行くべき場所
は赤い線で示してある。鍵は最初から順に現れた扉に使いなさい。
収容所の方には警備の者がいる。いくら私でも彼らを説得する権限
はないの。例外を認めたらキリがないから。

だから奴らにはあなたの力で振り切るのよ。大丈夫。あなたなら何
でも出来るわ」

フェルダが目を開じ、そして開いた。

強い目だった。

「今あなたの意識があらうとなかろうと、ゼロの所へ行くのよ。走
りなさい。どっちにしてもあなたは最期に向かうのかもしれない。
でももし最期が来るなら」

悲しい目でサクを見下ろし、フェルダは言った。

「その時は一緒にいなさい」

フェルダはサクの額にキスをして、そっと立ち去っていった。

フエルダがいなくなり数十秒経った時、サクの目がパッと見開かれた。

その目にはすでに鋭い眼光が宿っていた。

サクは当たり前のように勢いよく起き上がって鍵と地図をわしづかみにした。

自分に刺さっているチューブを全部手早く抜き取り、サクはベットから飛び降りて地図を見ながら歩き出した。

サクは歩きながらしばらく地図を眺めた。
脳が研ぎ澄まされ、いつもの何倍もの速度で情報が吸収されていた。

サクは顔を上げた。

「フエルダ、ありがとう」

地図を握りつぶし、サクは走り出した。

病院内は暗かったが特に問題はなかった。

サクは足音を殺すのが得意だった。

それは走っていても変わらず、病人の看護をする者達がサクに気付くことはなかった。

収容所の方に来た時、最初の嚴重に管理された扉の横にいた看守がサクを睨んだ。

「こんな時間に何を…」

看守が言いかけたのを無視して、サクは看守を突き飛ばし、目の色を変えて扉に鍵を差し込んだ。

重い扉をものともせず押し開け、サクは走った。

「おい、待て!!」

看守の男がサクを追った。

長い廊下をサクは追われるまま駆け抜けた。

「待て！！何故鍵を持っている！！囚人を脱獄させる気か！？」

看守が走りながら非常ベルを叩くように押した。

途端に異常を知らせる爆音ブザーが鳴り響き、看守が四方から集まってきた。

ブザーの音すらサクの集中をかき消すことは出来なかった。

サクの耳に聞こえるのは、流れる空気のかくもった音のみだった。

サクはひたすら走った。

足が肉離れを起こし、全身の筋肉が抵抗の悲鳴を上げていた。

肉体の限界を超え、激しく鳴る心臓も、きしむ骨も筋肉も、破裂しそうな肺も、今のサクには全て他人事だった。

看守がそんなサクに追いつけるはずがなかった。

サクの脳はゼロに向かい、完全に人間の能力を凌駕する力をサクに与えていた。

「あの女、何て速さだ!!」

看守達は大の男だったが、全力で走ってもサクに追いつくことができず、何人かは音を上げてその場に座り込んだ。

サクは鍵を回し、独房に続く扉を蹴破るように開けた。

囚人達が走るサクと看守に野次を飛ばした。

サクは囚人達を見もせず、独房を確認もしなかった。

ゼロのいる場所は分かっている。

サクは輪に連なる最後の鍵を差し込み、ゼロの姿をまともに確認することもなく、地図が示していたゼロの独房に飛び込んだ。

ゼロは確かにそこにいた。

床に打ち捨てられているように倒れて動かない。

こんなに酷い状況だからこそ、流れる銀髪や美しい蒼白の顔が相まって、ゼロの姿は神の最期を彷彿とさせる偉大な存在感を感じさせた。

サクはゼロの身体の上に、勢いよく倒れ込んだ。

走るのを止めたとたん汗がどっと吹き出し、極度の疲労感がサクを襲った。
麻痺していた感覚が消え、サクの全身の壊れた組織が否応なく激痛を放った。

サクは服の上からでもゼロの身体の冷たさを感じ取った。

看守が牢屋の前に集まってきた。

「何をしている！囚人から離れろ！」

看守の男数人が激しく息を切らして牢に入ろうとした。

その瞬間サクは自分の服を破るように剥ぎ取った。

その行動と真っ白い裸身に看守達は言葉を失い、全員が自ら牢屋から後ずさった。

美しいものを見慣れ、目が肥えたルシエルカテゴリの人間だからこそ、看守達は一瞬にしてサクの必死さに心打たれ、サクを止めるよりその姿を見たいと思わずにはいられなかった。

看守の一人が静かに牢屋の扉を閉め、全員がヘルメットを脱ぎ、サクとゼロの行く末を見守るために扉の前で立ち尽くして、サクを凝視した。

サクはゼロの服を引き裂いた。

サクの身体はガクガク震え、全身の爆発的な鼓動でゼロの鼓動を感じるところではなかった。

「ゼロ、こんな所で死ぬの？ 私達はまだまだこれからよ」

サクも脳のタガが外れたことで身体が壊れ、激痛で発狂しそうだった。

しかしゼロに笑いかけたその笑顔は、透き通ってどこまでも健康的だった。

第二十三話 それは授乳する光景

『第二十三話 それは授乳する光景』

サクはいまだかつてないほど濡れていた。

最後になるかもしれないゼロとの交わりを思い、心地よい絶望と静かな興奮で、身体の内部が激しく高鳴った。

肉欲に支配され、唇は紅く潤み、その目は凄艶な官能をたたえてゼロを凝視していた。

看守達はサクのあまりの艶やかな顔に、啞然として息を呑んだ。

フェルダが言ったことは本当だった。

今のサクは、単純な美しさにおいて遥かにゼロよりも勝っていた。

無防備なゼロの肉体を前にして、サクは今までにこれほど強く性欲というものを感じたことはなかった。

ゼロはもう死んでいるのかも知れないとサクは思った。

それなら自分は魂をかけて死姦するまでだ。
そうすればゼロに必ず届く。

サクはゼロの肉体を撫でた。

自分がかつてめった刺しにして、その肉の感触を嫌というほど思い知らされた。

しかし今サクはそれを思い出し、全身に鳥肌が立つような性的な興奮を感じた。

サクは頬を上気させ微笑んでゼロの肉体に口づけした。
その笑みは妖艶さを通り越して、邪悪だった。

サクはゼロの、かつて肋骨を取り出した脇腹に静かに、しかし力強く爪を立てた。

サクの目から歓喜の涙が流れた。

あの時必死だった二人。

過酷な試練から逃げ出そうとするサクを連れ戻す力強い腕。

あの時あれほど生命力に溢れていたゼロの脇腹はもう今は冷たく、命が宿っているのかも分からなかった。

サクはゼロの鼓動を確かめなかった。

生きているか死んでいるかなど小さなことだ。

「ゼロ、私をあげるわ」

サクはのけぞって笑った。

涙がゼロの全身に飛び散った。

サクの涙は、ゼロの乾いた身体が渴きを潤すように、その皮膚にしみこんでいった。

ゼロの魂がサクを感じ、サクの心へ向かって必死に感応を始めた。

サクは目を閉じ、ゼロの身体に頬をすべらせた。

髪がゼロの全身を流れ、サクはゼロの脇腹を消毒するように舐めた。

「ゼロ、痛みを感じて」

サクはゼロの脇腹を強く噛んだ。

ゼロの肩をつかみ全身に力を込めて、肉に歯を食い込ませた。

爪がゼロの肩をえぐり、血がにじんだ。

やがてサクの口の中をゼロの血が満たした。

サクは獣のように頭を振り上げ、ゼロの肉を噛みちぎった。

口から血を滴らせサクはその肉を丸呑みした。

見物人はこの異様な光景から目をそらしたくて仕方がないのに、何故かそれができなかった。

看守達が握りしめた牢屋の鉄の棒が彼らの震えに共鳴してガタガタ鳴った。

サクはゼロの肋骨に触れようとその傷口に指を挿入した。

その瞬間、サクの下腹部から頭へ向かって不思議な興奮が突きぬけた。

あの時は気付かなかった。

サクは自慰の時の自分の感触を思い出していた。

ゼロの傷口に入れた指が感じる肉の感触は、まるで女の陰部の中のようなだった。

涙が頬を伝い、口に入った。

サクは悲しく微笑んだ。

サクはゼロの傷口を優しく突いた。

子宮がじわりと熱くなるのをサクは意識の奥で感じた。

サクはゼロの首にまたがり、舌なめずりして笑いながら血でぬめるゼロの肉を力強く何度も何度も突いた。

激しく突かれた傷口からブシュッと音がして血が吹いた。

サクは高い声で笑い声を上げた。

突く快楽の味は想像以上だった。

サクは男が女を犯す快楽こそが性交の真の快楽であり、女には想像もつかないほどの官能なのだということを知った。

突くたびにゼロの傷口から血が飛び散り、まるで女性器が潮を吹いているようなその様に、サクは涙を流しながら、狂ったように笑った。

熱を持ったサクの下半身から体液が吹き出して、ゼロの顔を濡らし

た。

看守達はサクのしていることの意味を悟り始めた。

残酷さと官能の間で、看守達の心に恐怖と言いつくのない歓喜の念がこみ上げ、何人かは上気した笑いを隠すように口を押さえた。その衝撃に、涙をにじませる者さえいた。

ゼロの魂は暗闇へ引きずり込もうとする力に抗い、サクのいざないにより徐々に光ある世界へ昇ってきていた。

『サク…』

ゼロの力無い微笑みがサクを突き抜け、その下腹部を震わせた。

サクは脱ぎ捨てた服を破り、腕の付け根を非常にきつく縛った。

血液が滞り、徐々にサクの腕が冷たく痺れていった。

サクは痺れた腕に力を込めた。

そして浮き上がった手首の静脈をサクは皮膚ごと噛みちぎった。

激痛が走ったが、サクは次のことを考え、そのことが全ての感覚を支配していた。

サクは血が出る前に手首を押さえた。

腕の付け根を縛る布のおかげで飛び散るほどの出血はなかった。

サクの心臓が激しく鳴った。

それでいい、とサクは思った。

たくさん血を送り出せ。

「ゼロ、イクよ」

サクはゼロの傷口に手首を押し込んだ。

サクは目を閉じ、開いた。

そして腕を縛る布を勢いよく外した。

バツという音がしてゼロの傷口へサクの血が吹き出した。

サクの『体液』がゼロの『性器』に発射された瞬間だった。

それを強く感じ、激痛をかき消すほどの絶頂の快感がサクの下半身を突き刺した。

その悦楽にサクは泣きながら、悲鳴を上げるように大笑いした。

サクの腕に血が通い始め、ブツブツと途切れることなくサクの血がゼロを犯し続けた。

サクの下半身から滴る雫がゼロの口に流れた。

その雫はゼロの喉を通り抜け、ゼロの内臓に染み渡った。

今まで一滴の水すら通さなかった喉が初めて異物を受け入れた。

それがもたらした変化は急激だった。

ゼロはカッと目を開いた。

ようやく飢餓感を癒やす力を手に入れたゼロは、なりふり構わずサクの下半身にかじりつき、その体液をすすった。

ゼロの身体の体温が上がっていった。

ゼロはサクの頭をつかみ、狂った獣のようにサクの髪に喰らいついた。

舌でサクの髪をからめ取り、無心に、無邪気に、髪を飲み込むその光のない目には、涙がにじんでいた。

サクはゼロの長い髪を引っ張り、ゼロの顔を引き寄せ、口を開いたままその唇に口づけした。

ゼロはサクの両頬をつかみ、貪るようにサクの口中の唾液を舐め取った。

やがてサクがゼロから口を離し、唾液が二人の唇を繋ぐように糸を引いて切れた。

「サク：喉が渴いた」
ゼロがあえいだ。

サクは母親が子どもに乳をやるように、倒れているゼロの頭を支えて、唾液を口からゼロの口に垂らした。

ゼロは少しずつ垂れるサクの唾液を、命の水のように無心に飲み込んでいった。

それは授乳の光景だった。

ゼロはサクの血より受胎して、今呪縛された神の肉体から、ヒトの身体へと魂が移り、この世界に生まれたのだ。

二人は見物人達の前で何度も何度も性交を繰り返した。

ルシエルカテゴリの看守達は、その場から立ち去った方がいいと思いつつも、誰一人としてサクとゼロの常軌を逸した倒錯から目を離すことが出来なかった。

サクとゼロと見物人達の夜が明けていった。

朝になって、ゼロは病院に移された。

罪を犯した身であるが、サクとゼロをすっかり気に入ったたくさんの看守達がフェルダに直談判に行き、フェルダがゼロを自由の身とする許可を出した。

それはかなりあっさりしたもので、ルシエルカテゴリでは暗黙のうちに、突出した美を持つ者は何をしても許されるという法がまかり通っていた。

住人達も誰一人フェルダに異を唱える者はなく、女達はむしろゼロの復活を喜んだ。

サクとゼロは病院の同じベッドに寝ていた。

もう夕方だった。

夕焼けの光が白いカーテンを通し、サクとゼロをオレンジ色に照らしていた。

サクの腕の傷とゼロの腰の傷を治療するのに時間がかかり、二人がベッドに入ったのは昼近くだった。

突然病室のドアが開き、ドヤドヤと人が入ってきた。

「ほらほら、あんた達いい加減起きなさい！食事持ってきたわよ」

フェルダが怒鳴り、カーテンを開けた。

サクは鋭い夕焼けの光を受けて、目をしばたいた。

ゼロは寝ぼけてサクを抱きしめ、その胸に顔をうずめた。

フェルダがゼロの耳元でブリキの皿をガンガン叩いた。

「ゼロ！起きなさい！あんたが一番何か食べなきゃいけないのよ。

サクの髪や何かで腹が完全に満たされるワケないんだから」

ゼロが気分が悪そうに目を覚ました。

サクが起き上がりフェルダに笑いかけた。

「フェルダ、ありがとう」

フェルダは肩をすくめ笑った。
まんざらでもない笑顔だった。

「さあ、食事よ！運んできなさい！」

フェルダは扉の外にいる誰かに命令した。

扉が開き、食事を持って入ってきたのは病院の人間ではなく何故か看守達だった。

昨日の夜は全く気付かなかったが、この看守達もフェルダに認められただけあり、恐ろしく綺麗な顔をしていた。

看守がおずおずとサクに笑いかけた。

フェルダが呆れたように看守達を見た。

「こいつらがサク達と是非話したいってうるさいから連れてきたのよ。

つつーかあんたら、さっきからニヤニヤと気持ち悪いのよ。サク達に失礼でしょうが。言いたいことがあるならさっさと言いなさい。

サクとゼロは病人なのよ」

看守の一人が姿勢を正した。

「あっ、はい！ええっと：オレもゼロさんのように格好良くなって、サクさんのように情熱的な彼女を作りたいって思いました！オレ達みんなお二人を応援してます！」

フェルダは再び呆れた顔をしたが、サクとゼロは笑った。

フェルダは食事をたくさん用意してくれていた。

サクは久々にまともに摂る食事だったのでたくさん食べた。

ゼロは味の濃いものや固いものはまだ抵抗があるようだったが、おむね栄養を摂取することが出来るようになった。

数日の入院を経てサクとゼロはようやく退院許可が下り、外に出られるようになった。

サクはとりあえずフェルダの家に行こうとゼロに言った。

改めてフェルダに礼を言いたかった。

最初に二人を助け、家を与えてくれて、最後はサクをゼロへ導いてくれた。

サクは基本的に他人に情が移るといことがほとんどない人間だが、何気なしにいつも助けてくれるフェルダのことは好きになりかけていた。

サクとゼロはフェルダの豪華な家の居間に通された。

フェルダは美しいカップで一人で優雅に紅茶をすすっていた。

「あら、来たのね。二人共顔色がだいぶよくなったわね。まあ座んなさいな」

ゼロは普通に座り、サクは何だかおずおずと座った。

フェルダが微笑んでサクを見た。

サクは落ち着かなげに笑った。

「フェルダ：その：本当に色々ありがとう。それを：言いに来たの。それだけなんだけど」

「サク：あんたって本当にいいコね。何だかそそるわ」

フェルダが妖しく微笑んだ。

ゼロがその顔をじっと見た。

「安心なさいよ、ゼロ。サクを襲う気はないわよ。私は『女』だもの」

フェルダが頬づえをついてため息を漏らした。

「でもあんた達はあのコ以来のキレイなあたしの宝物だわね。ヴァナ以来の」

その名前を聞いた途端、ゼロが啞然として立ち上がった。

フエルダが頬づえをついたまま笑った。

「ああ、ゼロはもしかしたら神界での顔見知りかしら。

『ヴァナ・セルジュラ・グレイス』。

彼、元神王だった神の子どもよ。すごいでしょ。ここに元神王がいるなんて」

フエルダは嬉しそうに、しかし何気なく言った。

しかしゼロは呆然と立ち尽くし、サクは総毛立った。

第二十四話 地に堕ちた淫王

「第二十四話 地に堕ちた淫王」

「ここに：元神王が：？ヴァナ：？」
ゼロの首筋が緊張して汗ばみ始めた。

「ゼロ：」

サクも不安そうにゼロを見た。

サクの中で神王、神の子どもといえば、異常な心の傷を受けた、壊れやすい、手に負えない者というイメージがあった。
またそういう者と関わり合いになるのはサクには負担すぎた。

ゼロの方はいえれば歴代神王は全員、元恋人である。

サクの前でそれをあからさまに暴露されるのはつらかった。

しかもゼロの知るこのヴァナという者は、いとも簡単にそういうことをしてくれそうな人物だった。

「サク、もう行こう。邪魔したな、フェルダ」

ゼロがサクに目配せして、サッとドアに向かった。

サクは少しオロオロしたようにフェルダを見た。

「あの：それじゃあ：。突然ごめんね」

フェルダは二人に何か起きたことを察して、優しく笑った。
「いいのよ。でもまた二人で無茶するんじゃないわよ」

サクは微笑み返し、ゼロを追った。

「よりによってヴァナだと！？くそ！これだけの日数ここにいてどうして気付かなかったんだろう」

ゼロが早足で歩きながら爪を噛んでわめいた。

サクは小走りについていった。

「そりゃそうよ。ゼロの状態を考えれば……。でもそんなに取り乱すほどヤバい奴なの？カイル以上ってことはないでしょ？」

ゼロが乾いた笑い声を上げた。

「サク、お前は神王って奴らがどんなものが全く分かってないな。オレは昔から歴代神王を見ているがカイルは：少なくともお前に出会ったまでのカイルは、奴らの中ではかなりまともな部類に入る。現にカイルが治める神界は平和だ。とりあえず今のところは」

「ヴァナって神王はどうだったの？」

サクが恐る恐る聞いた。

「神王ってのは神の子どもだった時の経緯を考えると理解できるんだが、大抵の奴は性に対して物凄く貪欲なんだ。しかしそれも一対一の性交で済んでる内は何の問題もない。

ヴァナはそんな神王達の中で一、二を争う色情狂だった。

奴は神王になるなり、自分の欲望を満たしたいがために神々が犯し

合うのを奨励する法律を作った。自分を一番満足させた者に褒美をやるとか言って、他の者の身体で練習を積んでこいときた。まあ、退屈な神界の神達はそれを楽しんだ所もあったかもな。」

ゼロは話しているうちに少しずつ落ち着いてきたが、サクは落ち着くどころの話ではなかった。

「そんなのが…今、私達の近くにいるわけ？」

「あいつがインフェルノに堕ちていたなんて…こんな所で何をやっているんだか。まあ、まともなことでないのは断言できるな」

サクとゼロはルシエルカテゴリを出ることにした。行くあてはなかったが、互いの思惑は違えどヴァナからなるべく遠ざかろうというのが二人の結論だった。

二人は夜が明け始めた頃に誰にも言わず、出発した。

サクはフェルダに最後に一度会いたかったが、そのことを言うこともなくゼロに従った。

二人は朝露に湿った森の中を進んだ。

薄衣一枚しか羽織っていなかったので早朝の冷気が少し身にしみた。

「サク、寒くないか？」

サクの手を引き足早に歩くゼロが聞いた。

「うん。ゼロは寒いのか？」

「少しな」

そう言うゼロの顔はサクからは見えなかったが、ゼロの肩は少し震えていた。

サクは笑ってゼロに走りより、その背中におぶさるように飛び乗った。

「な…サク!？」

「ゼロ、おぶって！疲れちゃったから」

サクがゼロの首にしがみついて笑った。

「まだ歩き始めたばかりだろ」

そう言いながらゼロはサクをおぶった。

「ゼロがあんまり速く歩くからだよ。もっとゆっくり歩いて」
サクはゼロの背中を暖めるように、ゼロにしがみついた。

「それじゃあ奴に早晚気付かれる」
ゼロが笑った。

サクはゼロの肩にもたれかかって目をつぶった。

ゼロの首筋から熱を感じて、サクはまたゼロにキスしたくなった。

二人はしばらく無言だった。

「サク、寝たのか？」

サクは答えなかった。

ゼロは黙って歩き続けた。

「ゼロ」

「ん？」

サクはゼロの髪に頬をすりよせた。

幸せだった。

サクは微笑んでゼロに言った。

「この世界はね、嫌なことしかないけど、ごくたまにいいことが起きるんだよ。でもだからその嬉しさはすごいんだ。神界にいる素晴らしさを超える幸せをこの世界で感じるんだよ。不思議だよね」

「ああ」

ゼロが答えた。

ゼロのサクを支える腕に力が入った。

「今それを感じるよ」

ゼロの顔はサクからは見えなかった。

抑揚のない、どこか木霊のような声でゼロが言った。

「ゼロ、どこかの町に着いたら今度デートしよう。色んなお店見て、一緒に何か食べてさ。いいよね？」

「ああ」

ゼロが寂しそうに笑った。

「きっとオレには知らないことだらけなんだろうな。でもずっとそんな時を待ってた」

ゼロは自分の首に回されたサクの腕を優しくつかんだ。

ゼロは鼻腔に風を吸い込んだ。

その途端、ゼロは歩みを止めた。

「ゼロ？」

張りつめた空気が二人を覆った。

「すまない、サク。いったん下ろすぞ」

ゼロはサクを下ろし、風の気配に意識を集中させた。

なぜ今まで気付かなかったんだろうと思った。

風がおかしな流れ方をしている。

ゼロは背中サクの温もりに夢中で、辺りを警戒するのを怠った自分を責めた。

何か風をまとい、上空の木々の間を軽やかに抜け、こちらへ向かって進んでくる。

猿だろうか？

ゼロはサクの腕をつかみ走り出した。

走りながらゼロは風が取り巻いている者の形状を把握しようとした。

しなやかで艶のある肉体。

ヒトの身体だ。

その身体の回りになびく服の存在を感じられないことから、この者が裸だということが分かった。

裸なら奴かどうかが分かる、とゼロは思った。

両性具有の肉体はヒトとは違う。

ゼロは意識を集中させた。

胸はなかった。

性器は：

その時上空から嬉しそうに叫ぶ声がした。

「二人共、見つけ！！」

ゼロの風がドツと鳴り、かまいたちとなってその者を襲った。

「ゼロ！誰なの！？あいつなの：！？」

ゼロは上空を睨み、サクの問いには答えなかった。

風が止んでしばらくすると森に静けさが戻った。

サクが息を切らしながら走るのを止めた。

「…殺したの？あれは…」

上を向いたサクの頬に水滴が落ちた。

サクは水滴を手で撫で、見た。
血だ。

その瞬間、木々の間を縫い、風で切り裂かれた時の血で、全身が真っ赤に染まった人間がサクの身体に覆い被さるように落ちてきた。

サクは押し倒され、その者の血まみれの顔がギラギラと笑った。

その者はサクの口と鼻を手でふさぎ、サクの下半身に自分の固くなくなった股関節を押し当てた。

サクは大暴れしたが、その者の華奢な割に意外な怪力になすすべがなかった。

「くくく…暴れろ、暴れろ。拒絶されればされるほどこっちは興奮マックス。でもお前には、性感に声も吐息も上げさせてやんねえぜ。無理やり興奮を抑えると、二倍早く昇天できるんだよ」

その者がサクの胸に顔をうずめた瞬間、ゼロがその者の腹部を凄まじい力で蹴り上げた。

身体が宙に浮き、ゼロはその者の首をわしづかみにして、そのまま木に叩きつけた。

サクはその者を見た。

ゼロにつかまれた途端、その者の身体が恋人を肉を認識したかのように、目に見えるほど上気し、乳房がふくらみ、ペニスが身体に吸収されるように小さくなっていった。

その者は息を深く吸いながら、頸動脈が感じるゼロの手の感触に酔いしれた。

「ゼロだな…？」

唾液がからんだ舌で唇を舐めながら、その者が聞いた。

ゼロはその者の耳元に唇を近づけ囁いた。

「殺されたくなかったら、余計なことはしゃべるな。いいな？」

ヴァナはゆっくりゼロから顔をずらし、サクを見た。

そしてニヤリと笑い、サクにも聞こえる声で言った。

「仕方ねえなあ。一つ貸しだぜ、ゼロ」

ゼロが手を放し、ヴァナは軽やかに地に降り立った。

そしてひざまずいてサクに視線を合わせ、ニヤリと笑った。

「噂のヴァナです。よろしく。ちよつと血がウザイからあんたの服で拭いていい？」

そう言うが早いか、ヴァナはサクのスカートの部分で顔と身体をゴシゴシとこすった。

サクはあまりのあつかましさに啞然としてヴァナを眺めていた。

「それで？素っ裸でオレ達を追ってきたのは何の意味があるんだ？」

「ゼロが恋人と一緒にこのインフェルノに堕ちたって聞いてよ。何か二人で森ん中に入ってたから、あわよくば朝露に濡れながら3Pでもと思ってな」

「色狂いの白豚め」

心底嫌そうにゼロが吐き捨てた。

「お前ね、ヒトの手が何で二本あると思ってんだ？いっぺんに二人の人間をイカせるためだろうが」

ヴァナが大真面目に言った。

サクはヴァナをじっと見ていた。

短髪のサラリと長い、淡い紫の前髪。

血のような赤い瞳。

長くしなやかな手足。

確かにヴァナはルシエルカテゴリーの美男美女達とは美しさのレベルが違った。

しかしヴァナのあまりの下品さがその美貌をかすませていた。

サクにはヴァナが、ただの下世話な口の悪い小僧にしか見えなかった。

「あとフェルダからの伝言があるぜ」

「え？」

サクがハッと顔を上げた。

「あいつが言ったまんま伝えるぜ。『あんた達、この樹海を案内もなしでさまようつもり？ 無茶するなって言ったでしょ。何か知らないけどヴァナのこと心配してるみたいね。大丈夫よ。あのコ少しばかり性欲が強いけど結構いい子なのよ。』

それにヴァナは私の言うことは聞くから、いざとなったら私がおさえてあげるわよ。戻ってらっしゃい。せっかく元気になったんだからルシエルカテゴリー内の探索でもしてゆっくりしなさい』だとか。分かったか？」

「フン、何が『少ばかり性欲が強いけどいい子』だ。フェルダはお前が神界で『乱痴気魔王』と呼ばれたほどの色情狂だったのを知らないのか？」

「オレとフェルダは神界での『世代』が違うからな」

ゼロはサクを立たせた。

「…どうする？ 戻るか？」

サクはヴァナを見た。

「フェルダは何で自分で私達の所へ来ないであんたを伝言役にしたの？」

サクがフェルダをなじるように言った。

「そりゃ、決まってんじゃないか。今、早朝だろ。寝不足はお肌に悪いだろうが」

ヴァナがイラついたように、しかし真面目な感じでフェルダをかばった。

ゼロがうんざりしたように口を挟んだ。

「大方、移動の問題だろ。お前は敏捷で、神王だった頃の名残で少しは千里眼なんてのも使えるだろうからな。あてもなくさまようオレ達の居場所もすぐ分かる」

しかしサクとヴァナはゼロの話を聞かず、見つめ合っていた。

二人の中で互いに対する不思議な感情が生まれていた。
共感と嫉妬のようなものだった。

二人共互いに対して同じことを考えていた。

『こいつもフェルダが好きだ』

サクとヴァナは睨み合っていた。

サクはまたもや神王なる者と自分の少し悲しい共通点を見つけてしまった。

母に愛されなかったサクはフェルダに出会って初めて、自分に向けられる母性のようなものに包まれた気がした。

そしてこの元神王も、育った過程で愛されたことなどなかったに違いない。

例えフェルダが姿形の美しさにとらわれているにせよ、優しく、時に厳しく保護者のように自分に接するフェルダに、ヴァナも愛慕のような気持ちを抱いているのがサクには分かった。

「あんたフェルダが好き？」

サクはそれを口に出して聞いた。

「まあな」

ヴァナはふてくされたように言った。

「私も」

サクは微かにヴァナに笑った。

「ゼロ、戻ろう。この乱痴気魔王はフェルダが何とかしてくれるから」

サクはゼロの手を取り歩き出した。

「おい！オレをその名前で呼ぶんじゃないやねえ！！」

素っ裸のヴァナが笑いながらサクの後ろ姿を追った。

第二十五話 あいつを壊したのは

「第二十五話 あいつを壊したのは」

「それでお前、ルシエルカテゴリで一体何をしてるんだ？
ゼロが冷ややかにヴァナを見ながら聞いた。

「ん？そりやお前、美男美女のための絶頂屋よ。カップルに楽しい
性交渉を教えたり、満たされない奴らの相手をオレ自らが喜んでつ
とめたり…」

「もういい。黙れ」

「でもさあ、ルシエルカテゴリでちょっと不満なのが、美男美女し
かいねえってことなんだよな。オレって割と醜い者との性交ってス
ゲー燃えんだよ。例えばデブの汚ねえハゲオヤジとかに超くせえ口
臭をかけられながらやりたい放題に抱かれんのかってキクぜ。あと…」

>i33925—3532<

「いい加減にしないとその股関節り上げるわよ」
サクがギロリとヴァナを睨んだ。

ヴァナは今や乳房がふくらんでいながら、股関節には男根が垂れてい
た。

「何をどう興奮したらそうなるのよ。おかしすぎるでしょ」

「何だよ、お前、これできる神王って少ねえんだぜ。いや、おたくら二人見てたら、何かこいつらとマジで3Pしたらえれえ凄そうとか思っ、一人で興奮しちゃってよ」

ヴァナが延々と一人で下ネタ話をしているうちに三人はルシエルカテゴリの入り口に着いた。

入り口にはフェルダが待っていてくれた。サクはフェルダに駆け寄った。

サクは何だかとても嬉しくて、フェルダに抱きつきたかった。しかし母に植え付けられた拒絶される恐怖が、無意識にサクにそれをさせなかった。

フェルダはそんなサクの頬に手をやり、微笑んだ。

「もう、バカね。心配かけんじゃないわよ。何かあるなら一言私に相談しなさいよ」

「うん。ごめんなさい」

サクが少し顔を赤らめて言った。

その光景を不服そうに見ていたヴァナが、サクを押しつけフェルダに抱きついた。

「ただいま、フェルダ！」

フェルダの頬にキスして、ヴァナは嬉しそうに言った。

「言われた通り、ゼロ達見つけてきたぜ！えらいだろ！」

「はいはい、そうね。だけどあんた自分の姿分かってる？さっさと

服着なさい」

「ちえっ。分かったよ。じゃあな、ゼロ。それに……」

「サクよ」

フェルダが言った。

「じゃあな、サク」

ヴァナが微笑んだ。

その場にゼロとサクとフェルダが残ったが、フェルダは何だか思案していた。

「どうしたの、フェルダ」

「うーん、あんた達のその後の住居を考えてたんだけどね。ほら、前の家は竜巻でなくなっちゃったし」

フェルダが別段気にする様子もなく言った。

「……フェルダの家は？」

サクが不安と期待を込めて聞いた。

フェルダは優しくサクに笑いかけた。

「それももちろん考えたわよ。でも私の家って客室が一つしかなくて、今改装中なのよ。ほら、そこで誰かさんが血と反吐をブチまけてくれたおかげで」

サクとフェルダがゼロを見たが、ゼロはよく分かっていない顔をした。

覚えていないらしい。

フェルダは少し言いづらそうに言った。

「実はね、ヴァナとも相談したんだけど、あの子の家って宿屋みたいに部屋がいっぱいあるのよ。それで…」

「嫌よ」

「ありえんな」

サクとゼロが同時に言った。

フェルダがムツとした顔をして怒った。

「いいこと、あんた達！これはこの集落の長である私の命令よ！あんた達はヴァナの家に行きなさい！ヴァナにも了承を得てあります！

あの子があんた達にその…何かしたら私が責任取るわよ！！
ついてらっしゃい！案内するわ！！」

フェルダが憤怒の形相であまりにもいきり立つので、ゼロとサクは気おされし、黙ってついて行った。

フェルダは何だか異様な建物の前に来て止まった。

「ここよ」

サクはその建物を見て、あからさまに嫌な顔をした。

ギラギラと飾り立てられたネオンが光り、悪趣味な看板に『絶頂屋』と書いてある。

その建物は六階建てのかなり大きな造りになっていた。

ゼロがフェルダを睨んだ。

「本当に責任取ってくれるんだろうな？」

「はいはい、取るわよ。ほら入って。こんなところでぐずぐずして、人に見られたいの？」

フェルダは扉の中にゼロとサクを押し込んでウインクすると、滑るように去って行った。

中はこれまたいかかわしいもので溢れていた。

オシャレな鞭やろうそく、媚薬などの他、ヴァナが自ら考案して作り上げたらしい怪しい器具が並び、そこにその用途と値段が書いてあった。

ヴァナが奥の部屋から服を着ながら、ニコニコして現れた。

「いらっしやうい！早朝だから今は時間割引がつくよ！まずオレとの性交の、愛のあるなしを選んでね。愛ありはちょっとお高いぜ。ん？何、カップル？…ってお前らかよ」

ヴァナはあからさまにがっかりしたようにため息をついた。

黒い服にシンプルなダイヤモンドのネックレスをして出てきたヴァナはなかなか格好良かった。

「おおかた、フェルダに言われて来たんだろ。部屋に案内するぜ」

ヴァナは非常につまらなそうにサクとゼロを一瞥して、歩き出した。

最初、ヴァナは気化した媚薬が充満した部屋にサク達を案内した。
「この部屋を満たす媚薬は身体の感度が信じられない程上がるんだぜ」

サク達の冷ややかな視線をものともせずヴァナは嬉しそうに説明した。

「普通の部屋はないの？」

サクがイライラしながら聞いた。

「あるわけねーだろ」

ヴァナのその一言でサクは議論の余地がないことを悟った。

その後ヴァナは、サク達を部屋に案内するはずが、自分の作ったアブノーマルな部屋の紹介に夢中になり始めた。

そんなヴァナに業を煮やしたゼロが、寝られさえすれば何でもいと適当に部屋を選んだ。

「いいか、絶対入ってくるなよ。お前がオレ達に何かすればフェルダに責任が行くからな。もちろんお前もただでは済まんぞ」

「はいはい、分かってるって。安心しろ。何もしねーよ」

ヴァナはさっぱりそう言い、背中ごしに手を振って立ち去っていった。

サクは、いつも下品なヴァナがたまに淡泊なことを言うと、変に良

く見えるものだと思った。

しかしその淡泊さはどこへやら、ヴァナは最終的に三度、サクとゼロの部屋に忍び込み、二人を襲おうとした。

一度目は寝ているサクに覆い被さり、サクにキスしようとしている所をゼロに見つかり、絞め殺されそうになった。

もうしないと何度も約束し、ヴァナは許され部屋を出された。

それからものの一時間もしないうちに、今度はヴァナは女の身体でゼロを犯そうとし、サクから何発も張り手を食らった。

ゼロは、お前はもちろんのことフェルダをも殺すぞと脅し、ヴァナは泣きながら、それは止めてくれとすがった。

それで納得したサク達はまだまだ甘かった。

サクとゼロがようやく落ち着いて寝静まった一時間半後、何だか異臭がしてサクが目覚めました。

ヴァナが異常に性欲を掻き立てる効能を持つ媚薬を二人の部屋に大量に噴霧していた。

ゼロに首根っこをつかまれ外に出される間中、ヴァナは暴れて大声でわめいていた。

「いいじゃねーかよー！！オレはテメーらと3Pがしてーんだよ！客も来なくてオレもう三時間以上やってねーんだよ！！飢え死にしちまうよー！！」

ヴァナは結局、台所の柱に鎖で縛り付けられ動きを封じられた。それでもめげることなく、部屋に戻るサクとゼロに『二人でオレを鞭でぶちのめしてくれたら一発分くらい興奮するんだけど』などと言った。

もう日が昇っていた。

部屋に戻り、ゼロは再び眠りについたがサクは眠れなかった。

喉が渴きサクはゼロを残し、再び台所に向かった。

「サク！」

縛り付けられたヴァナが嬉しそうに叫んだ。

「余計なこと言うんじゃないわよ。私、喉が渴いたの。果汁が飲みたいわ。ジュースない？」

「ない。でもリングがあるぜ。冷蔵庫の下の段」

サクはリングを取りナイフを探した。

「ナイフは洗い場のとこだよ」
ヴァナが言った。

ナイフを見つけてサクは器用にリングの皮をむいた。
ヴァナは黙ってそれをじっと見ていた。

サクはリングを四つに切り分け、一つをかじりながらヴァナを見た。

「あんたも食べる？」

「いいのか？」

ヴァナが不敵に笑った。

サクはリンゴを一口サイズに切り、ヴァナの口に入れた。

ヴァナは口を動かしながら、サクを見つめた。

そしておもむろに言った。

「お前ら、何でインフェルノに堕ちたんだ？」

サクはヴァナを見た。

しばらくのちヴァナから目をそらしてサクがつぶやいた。

「あんたには関係ないわ」

「それはカイルに関係あることか？」

サクの言葉を見無視して、ヴァナが真剣な顔で尋ねた。

サクは目を見開いた。

「神の子どもや元神王ってのはな、サク。神王と一心同体なんだよ。必要とあらば神王はオレ達の身体を自由に使える。そしてオレ達も神王の心の動きを感じることができる。」

そしてオレはこの間、カイルの心が激しく動くのを感じた。身もだえするような叶わぬ愛。あいつは何度も何度もその相手の名を呼んだ。

『サク』と」

サクは何も感じていないかのような無表情で下を向いた。

「サク、オレはあいつを知っている。人の愛情を誰よりも求めて止まない奴だ。それはあいつ自身が誰よりも愛情深いからだ。」

神の子ども時代、あいつはどんなに酷く踏みにじられても他者を信じることをやめられなかった。

周りの奴はそんなカイルを、面白がってますます痛めつけた。しかしカイルはそれでも他者に対する愛情を失わなかった。

たった一人、激烈な痛みにも狂うことができず、ただただ優しくかった。」

サクは驚いてヴァナを凝視した。

どうしてこんな話をするのだろう。

「ヴァナ？」

「そんなあいつを壊したのは」

ヴァナが少し震えながら笑った。

「オレだ」

「オレがあいつを壊したんだ。

サク、すまない。聞いてくれ。あいつはお前を愛した。だからこそお前にあいつのことを知ってもらいたい。

オレはカイルが好きだった。独りよがりだがこれがオレにできる奴への最後のあがないだ」

ヴァナは今まで見せたことがない悲しい目をしていた。

それは多くの苦悩を身に受ける『神王』の目だった。

サクは静かに頷きヴァナの目の前で膝を抱えて座った。

二人は対座し互いに真剣に向き合った。

第二十六話　オレとお前と二人きりで

第二十六話　オレとお前と二人きりで

「だいたい、あなたとカイルって生きた時代的に接点があるの？　あなたがいつ頃神王になったんだか知らないけど」

「オレがカイルと出会ったのは、神王をやめてインフェルノに堕ちた後だ。

普通の神と違い、神王だった者はインフェルノでも半永久的に生きられる命をもらう。それはなぜかという神の子ども達の『調教』にあたるためだ。

『神王の座』を経験すると、否が応でも次の新たな神王の器を作る必要性を感じる。そのために神界から堕ちる元神王は多い」

サクはヴァナをじっと見つめて頷いた。

ヴァナは別人のように真剣な顔で語り続けた。

「これから…オレの記憶を見せる。存分に…」

言葉を切り、ヴァナが笑った。

その微笑みは悲しく優しく、慈悲深かった。

「罪深いオレを蔑んでくれ」

ヴァナが目を閉じ、しばらくすると額に蒼く輝く光が現れた。

光は周囲から集まって蒼さを増した。

ヴァナは疲れたように笑い、サクに言った。

「人差し指と中指でこの光に触れてくれ」

「大丈夫なの？」

「ああ、あんたの意識が一時オレの記憶に入るだけだ。戻りたいと望めばすぐに戻ってこれる」

サクは不安そうに、しかしヴァナの光に向かって手を伸ばした。

指をピースサインのようにして伸ばしたサクの指先に光が触れた。

途端にサクの目を鋭い蒼い光が突き刺した。

かすんだ画像がだんだんはっきりし始め、サクには二人の人間が話している所が見えた。

「…ほとんどの連中が人格分断が完了している。一名を除いて。神の子どもは生まれてから二十年間は人格分断の可能性があるとされる。それを過ぎると我々の中で生きる価値がないとされ、殺される。ヴァナ、お前の手で奴を壊せ。」

白い絹のような髪が腰まで垂れた、両性具有にしては男っぽい者が冷酷に言った。

「任せとけ。神界で覚えた凶悪なカンジの性交で、完全崩壊させて

やるさ。で、そいつの名前は？」

「カイル・セヴェリオ・グレイス」

白い髪の男がそう言い、ヴァナの唇が何かを言った時、蒼い光がサクの目を眩ませた。
場面が変わった。

牢屋のような小部屋で誰かが、積み上げられた薄汚い毛布を一生懸命繕っていた。

人間年齢で言えば12、3歳の金髪の美少女のような子どもだ。

「カイル、またそれやってんの？」

カイルはかすかに歌っていた鼻歌を止めて壁に寄りかかっているヴァナを見た。

「ちゃんと直さないね。今年の冬は寒いって話だし。みんな、寒いのは嫌だろ？」

そこには確かにごちゃごちゃに積み上げられた山の他に、きれいに繕われた毛布がたくさんたたんで積み重ねてあった。

「つつうかそれ、何か意味あのかね。その毛布お前と『同年代』の奴らが使ってるやつだろ。あいつらもう正気失ってんぜ。また噛んだり、引き裂いたりでめちゃうちゃんになるだけじゃん」

「そしたらまたきれいにすればいい」

カイルが嬉しそうに再び毛布を繕い始めた。

「それにその毛布臭えだろ。連中、気が狂ってっからその上に糞尿垂れ流しだぜ」

「生きてる証拠だ」

カイルが糸を噛みちぎりながら言った。

「誰も喜ばない」

「ボクがこうしてると幸せだ」

何気なくそう言い、カイルはまた楽しそうに鼻歌を歌い出した。

ヴァナは静かにカイルを眺めていた。

サクの耳の中にヴァナの声が響いた。

『汚泥の中に咲く花だ』

それはヴァナの心の声だった。

そして次の瞬間、サクが驚くほどの勢いでヴァナの心の中が憎しみに冷たく凍りついた。

サクにはそれがなぜなのかヴァナの心が伝わってきた。

嫉妬だった。

『オレは簡単に壊れた。それなのにこいつは…』

ヴァナは嵐のようにカイルに近づき、カイルの髪をわしづかみにして吊し上げた。

カイルの持っていた針が宙を飛んだ。

カイルの腹を力一杯蹴り上げ、ヴァナは倒れたカイルに馬乗りになった。

ヴァナは拳でカイルの顔を何度も何度も殴りつけた。

カイルの目や鼻が潰れ、血が吹き出した。

ヴァナは自分のベルトを外し、カイルのローブを引き裂いた。

「可愛い偽善者が。興奮させやがって。早く女になれよ」

ヴァナは血の溢れるカイルの口に舌を入れて口づけした。
優しくカイルの歯を舐め、舌を愛撫するように丁寧に絡ませた。

ヴァナはカイルの身体が熱を帯び始めるのが分かった。

その肉体に重なり、ヴァナは神界でも感じたことのない、身を焼かれるような興奮を感じた。

カイルの感触は暖かく、優しく、清らかで、どんな愛撫よりヴァナを癒やした。

汗ばんで上気した顔でヴァナはカイルを見た。

顔面が変形したカイルがヴァナから顔を背け、その目から涙が流れ

落ちた。

カイルの涙が鼻を伝い、荒い息を吐く口へ流れた。

悲しく、清らかなカイルの瞳に、ヴァナは顔を押さえて爆笑した。
密かに流れる涙がその手のひらを濡らした。

カイルを優しく愛撫したかった。
恋人のように癒やしてやりたかった。

しかしカイルのために、それは許されなかった。

ヴァナは情け容赦なく、笑いながらカイルを痛めつけた。
骨の折れる音が何度も響き渡った。

激痛とヴァナの笑い声に呼応するように、カイルの身体が『女』になっ
ていった。

場面が変わった。

少し成長したカイルが綺麗な部屋のベットに傷だらけで横たわっている。

気を失っているらしい。

汗ばんだ身体のヴァナが少し息を切らしてカイルを見下ろしていた。ヴァナはカイルのまぶたを開き、完全に失神しているか確認した。

ヴァナの緊張が緩んだ。

感情のない虐待者の仮面を剥いだヴァナは優しくカイルの頬と額にキスをした。

「この時を待ってた。やっとイってくれたな」

ヴァナが悲しく微笑み、言った。

サクはヴァナの言ったことを理解した。

ヴァナはカイルの意識がない時にしか、本当にしたいことができないのだ。

カイルを壊さなければならぬヴァナは、カイルに慈悲など絶対見せてはならなかった。

ヴァナにとって、カイルが失神している時だけが、カイルを愛撫することが許される時間だった。

しかしヴァナはこの時になると、ほとんどカイルの肉体に触れられなかった。

ヴァナにとってその身体はあまりに神聖で尊かった。

ヴァナは自分が傷つけたカイルの身体を呆然と眺めた。

ヴァナが変形させた顔面は、希望のない世界でいつも病んだ者達に優しく笑いかけていた。

折った腕は、脚は、喜ばれることを期待することもなく他者のために働くことを楽しみとした。

ヴァナが犯した身体は、愛情など存在しない世界で愛することを覚え、踏みにじられても踏みにじられても、立ち上がり、許し、再び愛した。

ヴァナは笑い、目をそらした。

ヴァナの息使いが荒くなり、その目から涙が落ちた。

「こんな世界、なくなっちゃまえばいいのに……！全ての生物が死んで、オレとお前と二人きりで……生きて……！」

否が応でも目に飛び込んでくる自分のつけたカイルの身体の虐待痕が激しくヴァナを戦慄させた。

ヴァナは半分笑いながら、片手で頭をかきむしり悲鳴のような声を上げた。

ヴァナは心の許容量を超える絶望感に、もはやじっとしていることができなかった。

落ち着かず、部屋の中を歩き回っていると、姿見が目に入った。自分が映っている。

何の傷も痛みもなく、つややかな、美しい自分の身体……

カイル：

ヴァナは絶叫した。

そして衝動的に机の上にあるペーパーナイフを取り上げ、自分の身体に突き刺した。

その瞬間、ヴァナの身体に激痛と共に、凄まじい快感が走った。

ヴァナの身体は一瞬にして『男』になり、勃起した男根から精液がほとばしり出た。

大声で笑いながら、ヴァナは何度も何度もナイフで自分の身体を刺した。

もっともっと痛め。

そうすれば自分の罪が許されていく…。

再び場面が変わった。

ヴァナがたくさん並んだ神の子ども達の小部屋の前を走っていた。

ひとつの扉が開いていて、そこから笑い声や罵声がした。

ヴァナはその扉の近くまで来ると、止まって呼吸を整えた。
それから静かに扉の前に立った。

「何してんの？オレも仲間に入れろよ」

そこにいたのは三人の成人した神の子どもとカイルだった。

一人はカイルを犯している最中で、あとの二人はくつろいでそれを見ていた。

「よう。ヴァナか。何かこいつ壊れねーらしいからさ。最後の一人らしいじゃん？だからオレらで壊そうと思って。誰がやれるか賭けてんだ。

あんたは仲間に入ってくれんなよ。その道のプロだからな」

座っている赤毛が笑って言った。

ヴァナは黙って部屋に入った。

「瞳孔は割れたか？」

「は？」

「人格分断が完了すると瞳孔が四つに別れるだろ」

「ああ、そうか。おい、目を見ろよ」

ヴァナはその先は聞いていなかった。

こんな奴らに分断できるほどカイルの人格はヤワではない。

出し抜けにヴァナが言った。

「お前ら何甘いことやってんだ。元神王のオレがプロの何たるかを見せてやるよ。ほら、どきな」

ヴァナが残酷に笑い、前へ出た。

カイルを犯していた者が上気して、その座をゆずりたくないような顔でヴァナを見上げた。

その瞬間、その者の顔が硬直した。

ヴァナの顔は夕日の逆光に赤く輝き、余りに神々しく、そして凄惨

だった。

そのぬめった唇に食いちぎられることを心配したのか、神の子どもは首筋を撫でた。

「どけ」

ヴァナはカイルの前に立った。

カイルは自分の吐いた吐瀉物にまみれて、目の色を失って震えていた。

カイルに意識があるのを確認すると、ヴァナはベルトに手をかけ、後ろの三人に言った。

「お前ら、いいか？壊すための性交ってのは自分の快楽に酔いしれてばかりじゃだめだぜ。どう身体を傷つけると心に響くか、それを自分に置き換えて考えてみる。なかなか楽しいぜ」

ヴァナは喋りながら、密かにカイルの女になった身体の膣に指を挿入した。

子宮の状態を確認するためだった。

カイルの子宮は破壊されていた。

ヴァナの血が逆流し、頭の中が真っ赤に染まった。
怒りで、ではない。

嫉妬だった。

パンツという音がしてヴァナがカイルの頭の一部を突いた。
その途端にカイルは目を開いたまま、意識を失った。

ヴァナは神界で性に関する知識を制覇するために、人体のあらゆる
知識を得た。

性感帯の他、ヒトの生き死に関わる身体の流れと、それを思いの
ままにする技術を習得していた。

再び三回パンパンパンと乾いた音がして、次の瞬間三人の神の子
どもは首を変な方向に向け絶命していた。

ヴァナが凄まじい憎悪に燃え、笑った。

「カイルを汚しているのはオレだけだ」

ヴァナはカイルの横にしゃがみ込んでその身体を優しく撫でた。

「お前もお前だぜ。オレ以外の奴相手に女になんなよ」

ヴァナはカイルの両頬をつかみ、口を開いたまま口づけした。

そして舌でその口腔に残った吐瀉物を舐め取って取り除いていった。

サクは初めて目にする神の子ども達の常軌を逸した状況にめまいがした。

そしてヴァナがカイルを愛していたことを知った。

しかしそれでもヴァナはカイルを壊したのは自分だと言った。

ヴァナは本当にやり遂げたのだろうか？

再び蒼い光が走った。

また恐ろしい愛憎を見ることになる、とサクは思った。

そして場面が変わった。

第二十七話 裏切りへ向かう冒涇

第二十七話 裏切りへ向かう冒涇

カイルが見晴らしのいい丘のような所で穴を掘っている。

「お前、もうそれはやり過ぎなんじゃねえの？ そいつらお前のこと輪姦したんだぜ」

ヴァナはカイルの横にある三体の遺体を見た。

数日前ヴァナが殺したあの三人だった。

カイルは無心に穴を掘りながら言った。

「この人たちが何をしたかなんて関係ない。命があったんだ。彼らもボクらと同じように人生があったんだ。死んだからといって冒涇していいわけではない」

こいつはどこまで、とヴァナはあきれながらも鳥肌が立った。

カイルは墓穴を掘り続けた。

カイルは物心ついた頃から死んだ神の子どもを丁寧に埋葬していた。そうでなければここでは、遺体は放置され、動物の餌にされる。

しかしカイルの死者の埋葬に手を貸す者は皆無であった。

ヴァナもカイルに手を貸す事もなくカイルが土にまみれて穴を掘るのを眺めていた。

「ねえ、ヴァナ：神界ってどんな所なの？」

カイルが息を切らしながらヴァナを見ずに聞いた。

ヴァナがカイルを見た。

しばらくの後、ヴァナは冷たく言った。

「普通にいい所なんじゃねえ？痛みもないし。神王になるのはまた違うがな」

カイルは動きを止め、ヴァナを見上げた。

「そこなら神の子どもも愛されることが出来る？」

ヴァナは目を見開いた。

しかしすぐに平静さを取り戻し、静かに聞いた。

「愛されたいのか？」

「贅沢で傲慢だよね。でも一瞬でいいから心から向けられる愛情を感じてみたいなって。」

カイルはヴァナに向かって無邪気に微笑んだ。

よく晴れた、明るい日だった。

少し汗ばんで土で汚れたカイルは、普通にいる健康的な人間の少年のようだった。

もし本当にそうならば、とヴァナは思った。

一瞬の愛情を受けるなどという普通にしたら当たり前のことをこんなに渴望することなく、カイルはこの世界で愛されていただろう。

「そんな望みは捨てろ。神界には簡単には行けないし、神の子どもとして生まれた以上この世界にも希望はない」

「そうだね。ごめんなさい」

なぜ謝る、とヴァナは心の中で叫んだ。

いつだってお前が悪かったことなどないとカイルに向かって怒鳴りたかった。

再びカイルの肉を欲して自分の身体が男になるのが分かった。

「ボクはもうすぐ二十歳だ。ボクは…殺される」

そのことをまるで何とも思っていないように、カイルはつぶやいた。

そして真剣な眼差しでヴァナに聞いた。

「死ぬのって気持ちいい？」

ヴァナはその目に吸い込まれた。

もう心の動揺を隠すことは出来なかった。

胸があまりに強くしめつけられ、嘔吐しそうだった。

しばらく二人は互いにすがり合うかのように黙って見つめ合っていた。

カイルがヴァナに吸い寄せられるように、墓穴からよじ登ってヴァナの前に立った。

ヴァナは驚いて、ますます強くカイルを凝視した。

カイルは震える指先でかすかにヴァナの頬に触れた。

カイルが自分からヴァナという虐待者に触れた。

ヴァナの全身全霊が絶頂を超えた快感に震えた。

それはもはやヴァナにとって、性交を凌ぐ官能だった。

ヴァナは思わずもつれた足で後ずさりし、地面に尻もちをついた。

カイルが倒れたヴァナに近づき、へたり込むように目の前に座った。

ヴァナはほとんど怯えたようにカイルを見ていた。

カイルはヴァナと目を合わせることもなくヴァナの足首をそつとつかみ、両手で足を持って、その靴の裏を舐めた。

「カイル…」

カイルはあまりにも情熱的にヴァナの靴の裏にキスをし、舐め続けた。

その唾液が靴から滴った。

ヴァナの足を自分の胸に当て、カイルは祈るように言った。

「ヴァナ、今ここで極限までボクの魂と命を傷つけて。殺すつもりで本気で」

それはヴァナへの祈りの言葉だった。
あまりに静かで決意に満ちていた。

ヴァナはその時初めて感じたことのない、凄まじい恐怖を感じた。

カイルが死ぬ…

そのことを目の当たりにした瞬間、ヴァナは自覚する間もなくカイルを手刀で失神させていた。

ヴァナはどうしようもなく震えていた。

倒れたカイルの背中に頬を寄せ、その髪を握りしめた。

「殺させねえ…！絶対に死なせるものか…！」

空も空気もどこまでも澄み渡っていた。

日の光が二人を愛撫するように優しく降り注いでいた。

場面が変わり、神殿のような建物が見えた。
ヴァナは不安の中、神殿の中を早足で歩いていた。

神殿の中心部に着くと白い髪の男が、二体の神像の前にひざまずき
祈っていた。

「イベリスク…」

白い髪の男が目を開けた。

そしてそのまま神像を見上げながらつぶやくようにヴァナに語りかけた。

「ヴァナ、カイルは壊れないか？」

イベリスクは立ち上がり、ヴァナに向かってゆっくり近づいた。

「それともこう言った方がいいか？ 『壊すことができない。恋しくて。愛しすぎて』」

イベリスクはヴァナの回りを周り、ヴァナの髪をしなやかな指先でつまんだ。

「何のためにここに戻ってきたのだ、神王ヴァナ」

イベリスクは笑うことのない者だった。

それは普通に喜びなどで笑うこともそうだが、嘲りや、優越感、そして性交で悦樂のあまり笑うということもなかった。

まばたきをすることもない仮面のような顔に見下ろされ、ヴァナはこの時初めてイベリスクが怖いと思った。

あまりないことだが二十歳まで狂わなかった神の子どもを、まるでゴミ同然と言わんばかりに、情け容赦なく『処分』してきたのはこのイベリスクだった。

神の子どもの義務として全員が集められ、イベリスクが同胞を惨殺する光景を見せられた。

> i 3 3 9 2 6 — 3 5 3 2 <

「イベリスク…カイルを…」

ヴァナは恐怖のあまり身体の芯が震えて、それ以上言うことが出来

なかった。

イベリスクが頭を傾げた。

「カイルを…何だ？カイルを助けてくれ？」

だめだ、とヴァナは思った。

とても自分のかなう相手ではなかった。

沈黙が広がり、それが二人の立場の上下をさらに明確にしていくようだった。

イベリスクが虚空を見つめながら何となく言った。

「私がカイルを壊すか」

ヴァナは総毛立った。

イベリスクが今まで壊せなかった神の子どもはほとんど皆無だった。しかしイベリスクが手を下した者達は五体満足ではいられなかった。殺されることもめずらしくなかった。

「神の子どもとしてはめずらしい。カイルが壊れないのは、その心を満たす愛情によって魂が強固に守られているからだ。慈悲と言ってもいいほどの他人に対する深い愛。それなら」

毒々しいほど光をたたえたイベリスクの緑の瞳がヴァナを捉えた。

「その『他人』を破壊すればいいと思わないか」

イベリスクがシュッと手を振った。

ヴァナの服が肩の部分を切り裂かれパサリと床に落ちた。

その身体を見てイベリスクが少し目を見開いた。

ヴァナの身体は隙間なく火傷や切り傷、刺し傷の傷跡に覆われていた。

「自責の念による自傷か」

イベリスクが何の感情もなく言った。

『壊せるものなら壊してくれ。極限まで命も魂も傷つけてくれ。殺すつもりで本気で』

ヴァナは静かにそう思い目を閉じた。

カイルの笑顔が、泣き顔が、傷が、頭の中に浮かんだ。

お前を析るから、そばにいてくれ…

ヴァナの目から涙が落ちた。

イベリスクが黙ってヴァナに近づいた。

目の前に立ち、イベリスクはヴァナの頬に触れた。

「私を見るがいい」

ヴァナが顔を上げて見たイベリスクの顔は、表情が全くなかった。

早く、オレがカイルに与えた以上の痛みをくれ：

しかしイベリスクはヴァナの心を読んだかのように言った。

「お前が望んでいることは何も起こらない。それが破壊というものだろう」

イベリスクはヴァナの頬に冷たい唇で触れた。

ヴァナはその行動の意外さにゾツとした。

「イベリスク…何を…」

イベリスクは表情のない目でヴァナを見て、人差し指を唇に当てた。そして立ち尽くすヴァナにひざまずき、その細い足に手を絡ませた。

イベリスクはヴァナの内股から股間に向かって舌を優しく滑らせた。

ヴァナは正面を見据えて震えていた。

イベリスクの冷たい感触がじわじわとヴァナを侵食し始めた。

残虐で冷酷なイベリスクに優しく愛撫されることが、ヴァナの中で望みもしないのに快感として心に突き刺さった。

ヴァナは目をつむって上を向いた。

頭を振り上げた途端に身体が弾けるように女に変わった。

「許されたいか、ヴァナ。お前は許されない」

吐息を吐くようにイベリスクがヴァナに囁いた。

イベリスクがヴァナの手を握り、床にゆっくり押し倒した。

その胸を指でなぞりイベリスクが言った。

「お前に自分の肉を潰され、貪られ、命を踏みにじられ、魂を冒瀆され、カイルはどんな顔をして泣いていた？ 思い出してみろ」

小さなその声がヴァナの耳の鼓膜を破り、心臓を爆発させるほどの大音響で響いた。

イベリスクはヴァナの唇にそっと口づけし、その首筋を手のひらで強く撫でながらヴァナの頸動脈をなぞるように舐めた。

ヴァナは心底おぞけ立った。

いま体中がカイルの肉を潰し、骨を潰す衝撃を感じていた。

カイルを殴りつけ、一瞬、皮膚の柔らかい感触を感じた後、その内側にある硬い組織を潰す。

何度も何度も何度も…

それでもオレに微笑むカイル…

それでもカイルを潰し続ける自分…

『殺すつもりで、本気で』

迷うことなく最初にそうしていれば…

ヴァナの身体が激しく上気した。

傷つきたい：

自分を傷つきたい：

ヴァナの身体がカイルの痛みを感じて、今ここで死ぬほど痛めつけられたいと欲情し燃えた。

しかしイベリスクはその想いを冒瀆するかのように、今まで以上にヴァナを繊細に優しく愛撫した。

五感が激しく尖った今、それは普段の何倍もの悦楽だった。

そしてそれは、今の自虐的な状態のヴァナにとって、心を崩壊させるほど残虐な仕打ちだった。

イベリスクはヴァナの女性器に舌を挿入した。

ヴァナのカイルへの愛の証である罪と罰の執着を、イベリスクが与える快楽が消していきそうだった。

「私に身を委ねろ。どんな望みも叶えてやる」

ヴァナはとうとう快樂に屈した。

カイルの笑顔が頭から吹き飛び、ヴァナは全身に流れる痺れに身を任せた。

「イベリスク…あんたが欲しい」

イベリスクはゆっくり立ち上がりヴァナに覆い被さった。
長い髪がヴァナの首筋を撫でた。

イベリスクはヴァナの内部が達した時を感じて同時に達した。

ヴァナは息が上がっていたが、イベリスクは何事もなかったように立ち上がった。

二人の目が合った。

おもむろにイベリスクが言った。

「楽しかったよ、ヴァナ。しかしこれで証明されたな」

ヴァナが目を見開いた。

「お前はカイルを救えない。お前には何もする資格はない」

ヴァナの目に再びカイルが浮かんた。

しかしもう、その顔が笑うことはなかった。

その瞬間、ヴァナの口から血が吹き出した。

イベリスクは冷たくヴァナを見た。

血は溢れ続けた。

ヴァナの横にかがみ、イベリスクは血で汚れるのも構わずヴァナの口の中に指を入れた。

「歯が刺さっているだけ。舌を噛みちぎる勢いすらないのか。死ねば愛するカイルを正気という地獄から救えたのにな」

イベリスクはヴァナをそのままに、ローブをひるがえし神殿を出て行った。

第二十八話 一つの魂として

第二十八話 一つの魂として

再び場面が変わった。

不思議なことに今度は蒼い光ではなく黄色い光がサクを包んだ。

同じ神殿の中だったがたくさんの神の子どもが、真ん中に道をあけて左右に整列していた。

サクは最後の時が来たことが分かった。

カイルが何ら拘束を受けることなく、一人で真ん中の道を歩いてきた。

神殿の開いた天井から差し込む光を受け、死へ向かっていくカイルの顔は穏やかだった。

その表情はまるで、これからの幸せを信じて止まない花嫁がバージンロードを歩いている時のような様だった。

神殿の最奥には赤茶けた女神像と男神像が一体ずつあり、その前に

はイベリスクが立っていた。

カイルがイベリスクの前に立った。

「我らが父神と母神に挨拶を」

イベリスクの声が神殿に響いた。

カイルが神像の前にひざまずき、胸に手を当てた。

「ボクをこの世界に一つの魂として生み出してくれたことに感謝します。」

この世界で命に愛情を感じる力をくれたのはきっと、お父さんとお母さんでしょう。

ボクはまたこの世界に輪廻する。」

カイルが言葉を切り、顔を上げて神像に微笑んだ。

「ボクの魂はお父さんとお母さんといつまでも共にあります。再びこの地に降りる時、ボクの命がまたお父さんとお母さんによって生み出されることを望みます」

イベリスクに気づかれないようにだったが、神の子ども達がこの挨拶に密かに驚愕するのがサクには分かった。

サクもこの挨拶を聞きながら、カイルは前もって用意されたセリフを言わされているのかと思った。

しかしそれを言い終わったカイルの顔は、自らの父神母神に向かい、感謝で輝いていた。

「カイル、お前は神の子どもとして、器たる役割を果たすことが出来なかった。お前は命あるまま『聖水』となり、我らの父神母神を清めることで、その魂を浄化しなければならない」

イベリスクが言った言葉をサクは反芻した。
命あるまま聖水となる？

サクは何となく彼らの崇拜する二体の神像を見た。
赤茶けている…

まるで血をかけられ続けたような…

「お前はこれから血も肉も骨も粉々にされ、生きたまま『液状』にされる。

お前の肉体は『聖水』となり、神への供儀として、神像にそれをおけることでお前の魂を清める。全ては神の慈悲だ。」

カイルは神々しいほど優しい微笑みを浮かべてイベリスクを見た。

「感謝します」

サクは何が神の慈悲よ、と思った。

会ったこともないが、ヴァナの記憶の中に少し出てきたこのイベリスクという者がサクはほんと嫌いになった。
憎いくらいだった。

イベリスクが先端が球形で細かい棘がたくさんついている美しい槍のような器具を手にした。

「服を脱ぐがいい」

カイルは肩に手をかけた。

その時後方の神の子ども達がざわめいた。

イベリスクが全て分かっているような顔でそちらを見た。

ヴァナが二人の神の子どもの生首を両手に持って神殿の入口に立っていた。

ヴァナはボロボロだった。

服の上半身の大半が焼けてなくなり、傷だらけの身体がむき出しになっていた。

ヴァナは二つの生首を放り投げた。

「シャドウとスノウを殺したのか。戦闘人形も使えないものだな」

イベリスクがどうしてもよさそうに言った。

ヴァナが倒れそうになりながらカイルだけを凝視して進んだ。

「カイル……」

カイルの表情がヴァナが現れて、初めて陰った。

その時、イベリスクの持っている器具の球の部分が高速回転を始めた。

カイルは近づいて来るヴァナを悲しみとも怯えともつかない目で見つめた。

ヴァナとカイルの濡れた瞳が互いを凄まじい引力で引き寄せ合った。

ヴァナがカイルに手を伸ばした。

その瞬間、イベリスクが破壊器具でヴァナの背中を激しく打った。

回転する棘の球がヴァナの背中中の肉をえぐり、血が吹き出した。

ヴァナが前屈みに倒れそうになった時、再びその腹部を破壊器具が襲った。

イベリスクが渾身の力で放った武器が、ヴァナをカイルから離れた所へ弾き飛ばした。

ヴァナはふらふらと立ち上がった。

しかしその目は身体の傷など何も感じず、ひたすら執念に燃え、狂っていた。

ヴァナは大量に血を滴らせながらカイルの元へ早足で向かった。

再びカイルに近づいた途端、イベリスクが無表情でヴァナを打ちのめした。

ヴァナはそれでもカイルに近づこうとした。

それは引き離されても引き離されても、親の元にすがりつこうとする乳幼児の姿だった。

本能が認識した愛する者へと向かうことで、ヴァナの心は自分の無力さも傷も全て忘れて、その者が立つ場所へ行くことのみに全生命を燃やしていた。

カイルは震えながらヴァナを凝視していた。

理解できなかった。

カイルにとってヴァナとは、自分を何年にも渡って虐げてきた虐待

者だった。

しかしこれは…

ヴァナは何度も立ち上がり、カイルの元へ向かった。
そのたびに破壊器具がヴァナを滅多打ちにした。

ヴァナはついに上を向いて、破れかぶれに叫ぶように嗚咽をもらした。

悔しかった。

イベリスクに対する怒りではなかった。

どうしてこんなに非力なのか…

どうして…

ヴァナは涙を飛び散らせカイルの名前を叫んだ。

えぐられた腹部から血が吹いた。

カイルは何もかも分からなかった。
なぜこの人は泣きながらボクの名前を叫んでいるんだろう。

カイルはヴァナの身体を見た。
ヴァナはもう崩壊していた。

何度もイベリスクの攻撃を受けたせいで、全身の肉が深くえぐれ、
内臓や骨が見えた。

それなのにカイルに向かうヴァナは生命力に溢れていた。

死の限界を超えて、この人に前へ進む力を与えているものは…

ヴァナはカイルに手を伸ばした。

カイルは震えながらその手に触れた。

その瞬間カイルの身体にビリッと電流のような感覚が走った。

ボクはこの手の感触を知っている…

カイルの心がまるでヴァナの記憶を吸い上げるように、今までカイルの知ることのなかった真実を映し出した。

手のひら、唇、目…

ヴァナはその全てでカイルを密かに愛撫していた。

そしてカイルの魂を傷つけようとすることでヴァナの魂が激しく損傷していたことを知った。

カイルはようやく答えにたどり着いた。

ボクは愛されていたんだ：

ヴァナはカイルを抱き寄せ、その胸に顔をうずめた。

ヴァナはカイルにすがりついて泣き叫んだ。

なりふり構わず子どものように泣きじゃくった。

カイルは呆然とヴァナを見た。

その目の奥にはまだヴァナが狂おしい衝動にかられて苦しむ姿が映っていた。

カイルはかつて愛して愛されることを求めて止まなかった。

しかし自分を愛してくれた者は、これほどの凄まじい残酷さと激しい切なさの中に追いつめられ、どんな痛みをも超える痛みを感じていた。

ヴァナがカイルを虐待する絶望のあまり、絶叫して泣いている。
そして自分を傷つける…

ボクは一人よがりだった。

救いなどではなかったのだ、愛は…

ヴァナ……

カイルの目から涙が流れた。

カイルの涙はヴァナに何かを気づかせたいかのように、ヴァナの頬
に落ちた。

ヴァナは顔を上げてカイルの目を見た。

カイルの瞳孔が割れていた。

その心が自分を愛してくれた者の全ての痛みを負い、裂けた。

ヴァナは立ちすくんだ。

イベリスクが目を見開いてカイルの目を凝視した。

カイルはヴァナに微笑んだ。

しかしそれはもう昔のカイルの微笑みではなかった。

全てを超越した女神のようなその笑みは、ヴァナに、カイルに対して異様なおぞましさを感じさせた。

カイルは目を閉じ、全身を快楽の中解放していくかのように深く息を吸い、天井を仰いだ。

カイルの歓喜と猟奇が混ざり合った空気が、神殿内をゆっくりかき回すように広がっていった。

ヴァナの瞳孔が縮まった。

イベリスクでさえ警戒して、体制を立て直した。

息を吐き出し、悦楽を感じているかのようにカイルが言った。

「全ての束縛が消えていく…

人の痛みも罪悪感ももう何も感じない。

無慈悲になれることがこれほどの快感とは…」

ザーッとスコールが降ったような音がした。

カイルの周りを巨大な釘が取り巻いていた。

「人格分断が完了すると、特殊能力が使えるようになるって本当だったんだ」

カイルが目を開け、静かに言った。

そして次の瞬間、カイルの釘が神殿内の全ての肉に弾丸のように向かった。

ヴァナとイベリスクは神速の技をもってそれをかわしたが、神の子ども達は動く間もなく命をかすめ取られた。

カイルの釘はあらゆる方向からではあるが、正確に全ての神の子ども達の心臓を貫いていた。

「さよならみんな。次は普通の人間として生まれてくるんだよ」

ヴァナは嬉しそうに笑ってそう言うカイルにゾツとすると同時に、悲しくなった。

もうヴァナが愛したカイルは死んだ。

嬉しそうに毛布を繕い、丁寧に死者を埋葬していたカイルはいなくなってしまったのだ。

カイルはヴァナに向き直った。

二人はしばらく黙って見つめ合っていた。

カイルはおもむろにヴァナの身体を見た。

「身体、早く手当てしてもらいなよ」

真剣な顔でカイルはヴァナを見つめた。

不本意にもヴァナの目から再び涙が流れた。
ヴァナはカイルから顔をそむけた。

カイルはヴァナに触れようとする仕草をしたが、結局手を下ろした。

しばらくしてからカイルが言った。

「ヴァナ、ボクは神王になる。これから神界へ行く」

ヴァナがカイルを見た。

「カイル……」

「今のお前なら神界へ行けるだろう」

今までのやり取りを静かに眺めていたイベリスクが言った。

カイルが、こいつもいたのかと言わんばかりにイベリスクを見た。

「カイル、お前が先ほど使った特殊能力は神王になった時、他の神々を圧制するのに使う『神の拘束具』というものの原形となるものだ。詳しいことは神界で教えられるが」

イベリスクが、神の子どもが全員殺されたことを意にも介さず淡々と説明した。

「そう。ご親切にありがとう。でもイベリスク」

カイルはイベリスクを燃えるような目で見つめた。

「ボクはいつか必ずあなたを殺すよ」

そう言われても、イベリスクは表情ひとつ変えることはなかった。

カイルは再びヴァナに向き直った。

「カイル…オレは…」

ヴァナが戸惑ったようにカイルを見た。

カイルはふわりとヴァナにひざまずいた。

そして先ほど神像にしたような神の子ども達の世界での最高敬礼である、胸に手を当てる祈りの姿勢をとった。

カイルは目を閉じ、祈っていた。

そして顔を上げて微笑んでヴァナを見た。

その笑顔は、変わってしまう前の清らかなカイルの笑顔だった。

ドスツと音がした。

カイルが胸に当てた手から出現した釘がその心臓を貫いた。

カイルは糸の切れたあやつり人形のように床に崩れた。

ヴァナはカイルの遺体の上に倒れ込むように突っ伏した。

死体だらけの神殿にヴァナの慟哭がずっと響き続けた。

第二十九話 一時の再生

第二十九話 一時の再生

気付くとサクはヴァナの家の台所にいた。

サクは言葉もなくヴァナを見た。

ヴァナは涙を浮かべて言った。

「深くあんたをオレの記憶に入れすぎたな。最後の記憶はオレからつながるカイルの記憶まで入った。

でも：初めてあいつのあの時の想いを知った：」

「あなたはあの後どうしたの：？」

サクが静かに聞いた。

「もう昔のように何も感じず、神の子どもを壊すようなことはできないと思った。

イベリスクとしてもそんなオレは用なしだ。オレはあそこを出てインフェルノの地を転々とした。

そして最終的にここに来た、という訳さ」

サクは何だか脳がぐらぐらした。

性、虐待、傷：

そしてイベリスクの圧倒的な暴力：

ショックだった。

サクも色々ひどい目にあったが、インフェルノでの生の陵辱や虐待や殺人を見るのは形容しがたい恐怖を感じさせられた。

サクとヴァナは言葉少なに別れを言い、サクはゼロのいる部屋に戻った。

ゼロはまだ寝ていた。

外から差し込む鋭い光でゼロの長い銀髪が白く見えた。

表情ひとつ変えず、人の心を破壊に導くために優しく愛撫する。

何も感じず異常な暴力で愛を引き裂いていく。

サクはくやしいがイベリスクがとても怖かった。
怖い故に憎かった。

サクはゼロの寝顔を眺めた。

肩が静かに上下し、髪がかすかにかかる顔は穏やかで、子どもっぽい無邪気さすら感じさせた。

イベリスクも寝るときはこんな顔なんだろうか。

サクは何とかしてイベリスクへの恐れを軽減するために、イベリスクを普通の人間のランクに落とそうと躍起になった。

サクは少し眠りたいと思ったが、ゼロの隣で眠るのは今は抵抗があった。

神の子ども達の異常な性や、魂を冒瀆するような暴力を見た後だったからだ。

サクはソファアーに横になった。

その後、サクはヴァナの記憶の衝撃のおかげで数日間、精神を病んだ。

無気力状態に陥り、しかし、頭の中では目まぐるしくヴァナの記憶で見たことを考えていた。

一番悩まされたことは、カイルに対して、またヴァナに対して、どう思えばいいのかということだった。

サクも母から虐待を受けた。

愛していたとはいえ、ヴァナがカイルにしたことも同じことだ。

しかし：

サクはヴァナの記憶で見たことをゼロには話さなかった。

ゼロが今カイルのことをどう思っているのか分からなかったし、どっちにしろサクにはうまく説明できる自信がなかった。

ヴァナも苦しんでいるようだった。

ゼロに鎖を解いてもらったあと、ヴァナは大人しく自室に戻っていたらしい。

ヴァナはそのあと、サク達を襲いに来るところか、客すらも無視し、部屋に閉じこもっていた。

封印していた記憶を久々に思い出して、苦しんでいるのだろうとサクは思った。

あれほど商売熱心だったヴァナが店を閉め続けていることをおかしく思った常連客達が、フェルダにそのことを言い、ある日フェルダが訪ねてきた。

「もう！一体どうしたのよ、あんた達」

フェルダはサクとゼロの部屋に来て怒った。

「私のことはほっといて。ヴァナの所へ行つてよ」

「ここに呼んだわ」

フェルダが腰に手を当て、寝ているサクを睨んで言った。

しばらくしてからヴァナが入ってきた。

髪はボサボサで、あれから何も口にしていないのか、やつれていた。

「何だよ、フェルダ。少し一人になりてーんだ。オレのことならほっといてくれよ」

「今サクにも同じことを言われた所よ。二人して仲良く鬱になるなんて何があったのよ。」

サクとヴァナは同じようなうつろな顔で黙っていた。

フェルダはため息をついて、助けを求めるようにゼロを見た。

ゼロは肩をすくめた。

「まあな、何かあったんだろ」

「あんた、理由聞いてないの！？気にならない訳？自分の女が若い美形と一緒に鬱になってんのよ！もしかして一夜のあやまちを二人で後悔してこうなってるとか思わないわけ！？」

サクはバカバカしくて笑う気さえしなかった。

「それはないな」

ゼロがソファーに座りながらリラックスして言った。

「ヴァナにサクは抱けないさ」

その発言でその場にいた全員が覚醒し、固まった。

「どういう意味？」

ある者は興味津々で、ある者は怪訝に、ある者はムツとして、同時

に聞いた。

「さあな」

ゼロは余裕で三人に笑いかけた。

「んだよ、クソゼロが。死ねっ！」

ヴァナが髪をかきあげ、ドカッと椅子に座った。

フェルダがヴァナを見た。

「あんた、仕事に戻りなさいよ。知らないだろうけど予約殺到してるわよ」

「そんな気分じゃねーよ」

「これを聞いてもそう言えるかしら」

フェルダが紙の束を取り出した。

「あんたへの施術依頼のお悩みコメントを書く用紙よ」

「一件目。『僕は今の彼女と付き合って一年になりますが、ある時彼女に、あなたが好きだからあなたとの性交は気持ちいいけど、実は一度もイッたことがない、と言われました。ショックでしたが、確かに僕は女性のイカせ方を知らないし、女性の絶頂のこと自体よ

く知らないのです。女性は性交をしていれば自然にイクのではないのですか？今度ヴァナさんの店に彼女と行きます。色々教えて下さい。』」

「そう思ってる男って意外と多いんだよな。でも女イカせんのってかなり技術要するんだよ」

「次、二件目。『私は娼婦なんだけど、この前子宮に病気できちゃて手術したの。それ以来、性交の時痛くってどうしようもないのよ。痛みを気にしてもう性交どころじゃないって感じ。全然濡れないからますます痛いし。早く復帰して何とかして。久々にヴァナと愛ありでヤッて酔わせても欲しいしね』」

「娼婦か…そりや大変だな。ローションで何とかなるかな。でもこの場合あんまやらないで回復を待つのが一番なんだが…」

「こんな所でプロの分析しないで、客に向かい合いなさいよ。あなたをみんな待ってるのよ。自分で選んだ仕事でしょ」

「うん…」

ヴァナはフェルダを見つめた。

「何よ？」

ヴァナは不敵に、しかしどこか寂しげに笑って言った。

「フェルダ、オレのこと抱きしめてくれない？ぎゅーって。そしたら元気出るかも」

「何よ、それ。全く」

「早く、早く」

ヴァナが笑いながら、手を開いた。

フェルダが困ったように笑い、ヴァナを抱きしめた。

サクからフェルダの胸に顔をうずめるヴァナの頭が見えた。

流れる薄紫の髪は官能的だった。

ヴァナは死ぬほど一生懸命生きている。

カイルのことは私が裁くことではない。

サクはそう思った。

ヴァナが少し赤い目で、鼻をすすりながらフェルダから離れた。

「オレ、シャワー浴びてくる。営業再開だ」

ヴァナが軽い足取りで部屋を出ていった。

「さあて、次はあんたらよ」

フェルダが、持っていた袋をドスツと机に置いた。

「ここにルシエルカテゴリで通用する金貨が入ってるわ。

ゼロ、あんた明日一日、この金でサクを楽しませてやんなさい。

服やアクセサリーを買うのもよし。色々行ってみなさい。いいわね」

「行きたくない」

サクが布団をかぶりながら言った。

途端にフェルダがサクの布団を引っ剥がした。

「これは命令よ！従わなきゃあんたのゼロを殺すわよ。ちよつとく
らい風が起こせるだけの小僧なんて私の手にかかれば一発なんだか
ら」

その言葉にゼロが笑い、サクも不本意にも吹き出しそうになった。
フェルダも少し笑った。

「いい？ゼロ。明日、サクとちゃんとデートするのよ」

フエルダはそう言い、ズルズルと部屋を出て行った。

サクとゼロは二人きりになり沈黙が流れた。

「ゼロ」

サクが再び布団をかぶって、目だけ出してゼロを呼んだ。

「ん？」

「こっち来て」

ゼロは立ち上がり、サクのベッドの横に椅子を引き寄せて、そこに座った。

サクは布団から顔を出し、天井を仰いだ。
それからおもむろに言った。

「ゼロだって気にならない訳ないでしょ……？私がこうなってる理由。
……どうして」

サクは熱くなる目頭を押さえた。

「何も聞かないでいてくれるの……？」

ゼロはため息をついて目線を下に落とした。

「オレは長年お前を見続けてきた。だから解ることもある。お前がそうなる時は大抵、尋常ならざる傷を受けた時だ。

人は本当に深い傷を受けた時、他人が心に入ってくることを嫌う。どんなに親密な者でもだ。

自分で心の整理が付き、その傷が回復し始めない限り、他人が興味本位で情報を聞き出そうとするのは、その者の魂を冒瀆するも同じだ」

魂の冒瀆：

サクは再びヴァナの記憶で見たことを思い出しそうになった。

しかしゼロの言葉がサクを守護するように、サクの心をその記憶から遠ざけていった。

サクはゼロに微笑んだ。

「ありがと、ゼロ」

「もう休め。夜も遅い。フェルダの奴のおかげで明日は出かけなき

やらないからな」

ゼロは椅子から立ち上がりながら言った。

「あ、ちょっと！もう一つ聞きたいことあるんだけど」

「何だ？」

「ヴァナに私は抱けない……ってどういう意味で言ったの？」

ゼロが笑った。

「そうだな……。お前と言う人間は知れば知るほど、とても強い『拒絶』がその心を支配していることが分かってくる。

容易く私の心に入るな、容易く私に触れるな、お前はそういう目をしている。

傲慢なのではない。生きている過程で感じてきた、どうしようもない絶望がお前をそうさせるのだろう。

オレでさえそんなお前にたじろぐことがある。

ヴァナがお前を抱こうとすれば、例え合意の上だったとしても、お前のそういう心を垣間見ることになるはずだ。

その目にちらつく憎悪を超えた拒絶を。

あいつがそれに耐えられるはずはない」

「……そっか」

サクは無表情に布団を引きずり上げた。

サクはゼロを見た。

「ゼロは私に触れるのが怖い？」

「別に」

ゼロは髪をかきあげて言った。

「拒絶、感じる時あるんでしょ」

「ああ、でもそれがどうした？…」

ゼロはその先に言おうとした言葉を飲み込んだ。

ゼロは微笑んだ。

「この話はもう終わりだ。早く寝るといい。オレはお前が寝るまでここにいる」

「うん、ゼロも早く寝てね」

「分かってるさ」

ゼロは部屋の電気を薄暗くした。

しばらくしてサクの寝息が聞こえた。

サクが寝静まったのを見ながら、ゼロは先ほど言いかけた言葉を頭の中で反芻していた。

『それがどうした。何億年も待った。

お前は前世の時より遥かに美しくなりオレの前に現れた。

オレを拒絶するならするがいい。魂を蝕むほど嫌がるお前を貪ってやる。

他の男に惚れるならそれもいい。お前に愛された全ての男を殺してやる』

ゼロは残忍な衝動に駆られ、笑った。

「誰にも渡さない」

月光がゼロの猟奇的な顔を美しく照らした。

第三十話 彼らの永遠の瞬き

第三十話 彼らの永遠の瞬き

朝になり、サクとゼロは朝食を外で食べることにした。

食材をたくさん売る市場の横におしゃれな食事場があり、サク達は外に並ぶ机に適当に座った。

ゼロは食べ物の種類自体よく知らないのでサクが説明した。

その結果ゼロが注文したのは、たくさん味の薄いスープやお粥のような病人食さながらの料理だった。

「もっとおいしいもの頼めば？」

「味なんてあるだけ無駄だ。食事は生きていくために最低限、腹が満たせればいいんだ」

「全くもって神様の理屈ね」

ゼロが取り澄まして言うので、サクは自分の食事をしながら切り返した。

最低限と言った割にゼロはやたら食べていた。

がつっている訳ではないが、ゆっくりと、特に汁物をたくさん飲んでいた。

「そんなにおいしいの？」

サクがぽかんとして聞いた。

ゼロはしばらく皿の中の汁を眺めていたが、おもむろに言った。

「いや…でも液体が喉を通る時って何か快感じゃないか？」

サクは面白そうに笑い、冗談めかして言った。

「何よ、それ。もしかして性的にとか？」

サクは冗談で言ったのだがゼロは大真面目で答えた。

「それしかないだろ」

ゼロが上を向いて汁物を最後まで飲み込みながら言った。

サクは赤くなった。

そういえばゼロが一番最初に飲み込んだのは『液体』だった。
それもサクの…

「もう一杯注文追加していいか？」

「お腹が空いてる訳でもないのに、快感っただけでそんなに食べるなんてまた吐きたいの！？何か飲みたいなら水飲めばいいでしょ！もう行くよ！！」

サクは照れ隠しにゼロを怒鳴りつけ、席を立った。

ゼロは水を飲みながら立ち上がった。

サクとゼロは金を払い、店を出た。

朝日の中、二人は手をつなぐこともなく、ぶらぶら歩いた。

サクは今後のことをぼんやり考えた。

ずっとインフェルノにいるのなら働かなければならない。

家も、いつまでもあの倒錯ホテルまがいのヴァナの部屋にいるわけにはいかないだろう。

インフェルノにいる時特有の将来の不安と絶望がサクの心をひたひたと侵食し始めた。

サクは気付かれないようにチラリとゼロを見た。

ゼロはぼんやりと街中を見回していた。

ゼロは絶対離れていかない。

朝日を背に歩くゼロを見た瞬間、サクはゼロの存在が自分と融合していると思えるほど間近に感じた。

不安も絶望も感じさせないで。

そういう風に言えばゼロは簡単にサクのその願いを叶えるだろう。

サクはゼロの手を握った。

そして悲しそうにゼロに微笑んだ。

ゼロは少し驚いたように目を見開いてサクを見た。

二人は立ち止まって互いを凝視した。

辺りは静まり返っていた。

ゼロはサクの心に何かが起こったことを感じてサクを抱きしめた。

サクはこの時、今までにないほどにゼロがいる奇跡を感じた。

サクは涙を拭いながらゼロから離れた。

「行こう、ゼロ！」

サクはゼロの手を取り、大通りまで走った。

二人は何もかもを振り払うように静かな通りを駆け抜けた。

冷たい風がサク達に寄り添うように吹き抜けた。

大通りは、まだ早朝だというのに全ての店が開いていた。

そしてその全ての店は、美しく着飾るための服やジュエリーを売るファッションショップだった。

しかも驚いたことに、どこの店の看板にも24時間営業の文字があった。

美の街ルシエルカテゴリでは、こういった店の競争は激しく、しかも美しくなるために重要なファッションを売る店は24時間必要とされるのだろうとサクは思った。

「困ったな。私、服とかファッションに興味ないから何でもいいんだけど…ここまでたくさんあると迷うね」

「じゃあとりあえず適当な店に入るか」

ゼロとサクは店内が広くて、シンプルな物を売っていきそうな店に入った。

「私もそうだけど、ゼロの服も買わなきゃね。着替えが何着か必要だから」

サクが何となくそう言うと、ゼロは立ち止まり、何だかムツとした

顔をした。

「どうして服がそんなに何着もいるんだ？ 神界ではずっと同じ服を着てた。」

「ここは神界じゃないのよ。なぜかというとね。神界では汚いものは何もないから服も汚れないけど、ここでは洗いもしないで同じ服ずっと着てると汗とか色んなものがついてすぐ汚れるのよ。一日でね。」

それでも洗わないでいると服が排泄物さながらに臭くなるのよ」

ゼロが啞然として半分ふてくされたように言った。

「オレはそんな風にはならない」

「この世界でどんなに自分を美化しようとしても無駄よ。誰もが排泄するし、服も臭くなるのよ。どんなに外見が綺麗でもね」

「お前もか？」

なおもしつこく食い下がるゼロを無視して、サクは店の中を進んだ。後ろでゼロがブツブツ言うのが聞こえた。

「くそっ、インフェルノの奴め。どれだけ人を滑稽に墮とせば気が済むんだ」

結局サクとゼロは試着もしないで、今の服とほとんど変わらない服を二着ずつ買った。

服を一日一日交換し、いちいち洗わないと臭くなるというインフルノの新たな原則を知ったゼロは機嫌が悪くなり、親切に試着を勧める店員を無視して、商品を勘定の机に叩きつけた。

「一体何に八つ当たりしてるのよ」
サクが冷ややかにゼロを見ながら言った。

ゼロは四着分の袋を持って、不機嫌な顔でサクの二の腕をつかみ連行するように引っ張っていった。

その後、何軒かの店に入ったが、おしゃれをしたいと思わないサクは、モチベーションが上がらなかった。

ゼロも黙ってついてきたが、こちらも着飾りたいという意識は皆無らしく、興味がなさそうにしていた。

「ゼロ、二人きりになれる所に行こうか」

サクがぼうつと正面を見ながらつぶやいた。

「…そうだな」

おしゃれな店が仰々しく並ぶ、この辺一帯の通りはサク達には異世界で、その世界で二人は孤独だった。

二人はどちらともなく手をつないだ。

その心には、今二人が共にいる事実だけがあった。

二人はまるで死に向かう殉教者のように、安らかな目線で一歩一歩を踏みしめ歩き続けた。

サクとゼロは何時間も何も喋らず、互いの顔を見ることもなく、手のひらに感じる相手の鼓動だけを信じて、ひたすら歩いた。

すっかり街から外れて、サク達がたどり着いたその道には、木がたくさん生い茂った薄暗い広場があった。

打ち捨てられた広大な公園のようで、かろうじて水飲み場やトイレがあるが荒れ放題に草や木が伸びきっていた。

「ここで少し休もうか」

サクはゼロとつないだ手を放し、公園に走っていった。

荒れてはいたがそこは美しい場所だった。

大木がいくつも伸び、天上に生い茂った木の葉の間から、落ち始めた日の鋭い光が差し込んでいた。

その空間は透き通るように静かで、風が木の葉を揺らす、さざ波のような音が時折聞こえるだけだった。

ゼロがサクの所へ歩いてきた。

ゼロとサクは向かい合ったまま、無表情で空を見上げた。

しばらくの後、サクは目線を空からそらし、ずっと空を眺め続けるゼロの顔を見た。

哀愁、という言葉がサクの頭をよぎった。

この大空を眺めるゼロの心にあるのは神界への哀愁だろうか。

「ゼロ？」

サクが呼んだ。

ゼロは少しはっとしてサクを見た。

「大丈夫？」

ゼロは微かに笑って、何も言わずに二度頷いた。

サクも微笑んだ。

「行こ、座ろう」

サクはゼロの手を引っ張って、幹の太さが1メートル以上ある大木の根元に座った。

サクは無感情にゼロの肩に頭をもたせかけた。

ゼロは目を閉じた。

流れる風の音と夕暮れを感じさせる木漏れ日がサク達をまどろませていった。

二人はどちらが先でもなく、眠りに落ちた。

インフェルノに来てから初めての、何物にもおびやかされない安らぎの時間がそこにはあった。

サクとゼロは、インフェルノで生きる絶望も、共に在ることがいつか当たり前でなくなる恐怖も全てを抱えて静かに眠った。

彼らの永遠がそこに瞬いていた。

一時間も経っただろうか。

サクが目を覚ました。

ゼロはまだ眠っていた。

サクはその間にトイレに行ってこようと思った。

『排泄』のこととなるとゼロは敏感になるので、サクはずっとトイレを我慢していた。

サクは新しく買った自分の服を袋から取り出し、ゼロにかけた。

「ちょっと行ってくるね」

寝ているゼロにそう囁き、サクは小走りでその場を離れた。

ゼロは夢を見ていた。

夢の中でゼロは、神界のサクの世界でサクと一緒にいた。

澄んだ水と緑の世界。

そこで二人はずっと楽しく過ごしていた。

ふとサクが立ち上がり、笑って一人で歩き出した。

ゼロは何の不安もなくサクを追った。

しかし何故かサクの後ろ姿がどんどん無機質になり、そこから笑顔や暖かさが感じられなくなっていった。

ゼロはサクの名を叫んだ。

サクの腕をつかもうとした瞬間、辺りが暗闇に包まれた。

ゼロはかつてのサクの心の世界に来たのかと思った。

しかしそこにサクの姿はなかった。

サクを探して走り続けたが、暗闇の世界で自分が進んでいるのか、後退しているのか分からなかった。

あまりの孤独感に耐えられなくなりゼロは自分の世界に戻ろうとした。

しかしその時、ゼロは衝撃的な事実に気づいた。

行き場所などない。

ここがオレの世界だ…

そのことに戦慄した瞬間、ゼロは目を覚ました。

何故か自分にサクの服がかけられていた。

そしてサクがない。

悪夢の続きだろうか。

ゼロは震えながら走り出した。

サクは公園の手洗い場に向かった。
中に入ると、意外に綺麗だった。

古びてはいたが白い大理石の水場に、小さな天使の像が二体飾られていた。

手洗い場は、床にぽっかりと長く浅い穴が空き、そこに水が溜まっていた。

ここにも天使の像があり、それを引くと水が流れた。

サクがトイレから出ようとした時、誰かが凄い勢いで走ってくる足音が聞こえた。

サクは怖くなり、トイレの個室に戻ってその扉を急いで閉めた。

誰かがサクのいる手洗い場に走り込み、扉を破らんばかりにダンダンと叩いた。

「サク！サク、どこにいるんだ！！」

「ゼロ！？」

「どうし…」

サクが扉を開けた途端、ゼロが攻撃的な目つきでサクの首をつかみ、そのままトイレの個室の壁に叩きつけた。

そして便器をよけることもせず、靴のままバシッと便器のなかの水を跳ね上げてサクに近づき、ゼロはその唇に今までにないほど激しくキスをした。

ゼロは震えていた。

サクを放した後も、横を向き、口を手で押さえてサクを見ようとしなかった。

「どうしたの…?」

ゼロはしばらく目をつむりトイレの壁にもたれかかっていた。

ゼロはそのまま、声を詰まらせて言った。

「お前が恋しい…!!」

サクが静かに言った。

「私、いつでも一緒にいるよ」

ゼロが震えながら笑って言った。

「お前を愛しく想えば想うほど、オレはお前を喪失するんだ、サク……！！愛しすぎてお前を失う恐怖しか見えなくなる……！！

その世界ではすでにお前はいない……

誰も、何もない……」

サクにも感じられるほどの必死さでゼロがサクを抱き寄せた。

「誓ってくれ、サク。そばにいてくれ。

記憶の中だけの存在にならないでくれ。

お前がそばで生きている空気を永遠に感じさせていてくれ……！！」

「ゼロ……」

その時だった。

誰かの声がした。

「きみはサクを永遠に失うんだよ、ゼロ。僕達を愉しませてくれた
歴代神王の永遠の夫、ゼロよ」

ヴァナがそこに立っていた。

しかしその声はヴァナではなかった。

「久しぶり、サク、ゼロ」

「カイル…なの？」

サクはゼロの手を強く握りしめた。

第三十一話 醜惡な恋と愛と

第三十一話 醜惡な恋と愛と

インフェルノに蜃気楼のように時折現れる紅い山があった。

その紅は輪廻者達の間では『最狂を集める紅』と言われていた。

山を紅く染め上げているのは、インフェルノに生きる狂った者達が好む空気だった。

紅い空気は彼らの狂暴性を高め、殺すことも死ぬことも、痛むことも、彼らの全ての恐怖をぬぐいさってくれた。

彼らは笑いの中、殺し、死んでいった。

紅い山には、恐怖を麻痺させてくれる快感を求めたたくさんの狂者が集まってきた。

結果、紅い山は彼らの殺し合いの頂点に立った最強の者達が徘徊する、世界で最も危険な場所となった。

だから理性ある者で紅い山の頂上に立った者は皆無だった。

しかし山頂にはちゃんと、住する者達がいた。

神王となるための種達である。

神の子ども達が住む、リブラヘイムと呼ばれる集落がそこにあった。

紅い空気が漂う山中と違い、リブラヘイムの空気は澄み渡っていた。

太陽の優しい日の光が降り注ぐ中、外には病的な目をした神の子どもが何人か、少し気持ちよさそうにひなたぼっこをしていた。

突如、彼らの耳に聞き慣れない物音が聞こえた。

ガサガサと草をかき分けて誰かが外部からリブラヘイムに来るかのような音だった。

神の子ども達が全員警戒してサッと立ち上がった。

紅い山を越えてくる侵入者など有り得なかった。

唯一いるとすれば、自分たちを壊すために神界から堕ちてきた元神王くらいだ。

侵入者は血だらけでフラフラとリブラヘイムに入ってきて、倒れ込んだ。

神の子ども達が恐る恐る、その周りを囲むように集まった。

「サク…」

白い短い髪に緑の瞳のその者の口から、吐息のように言葉が漏れた。

神の子どもが一人、リビエラに近づいた。

「近づくな」

異常に冷たい声がして、神の子ども達はそちらを向いた。

イベリスクが神の子ども達を見もしないで、血まみれのリビエラを凝視していた。

「お前達は去れ。言われなければ分からないのか？」

その言葉に神の子ども達は全員震え、逃げるように皆、その場から消えた。

イベリスクはリビエラに近づき、しゃがみ込んでリビエラの髪に触れた。

相変わらず目には感情がなかったが、リビエラに触れるイベリスクの手には特別な優しさがあった。

「リビー」

リビエラは少し目を開けて笑った。

「イベリス…ただいま」

イベリスは無感情にリビエラの額と頬にキスをした。

その唇から身体が燃えるように熱くなり、イベリスはリビエラの口腔にしゃぶりつくように激しく口づけした。

我が妻…リビエラ…

イベリスクは強迫的な愛欲のなすがままに、リビエラを今すぐむさぼりたかった。

イベリスクはリビエラを愛していた。

その理由は本人達もよく覚えていない。

イベリスクは重傷のリビエラを抱き上げ、自分の寝室に連れて行った。

ベットに寝かされたが、痛みあまりリビエラは顔を歪め、その上半身は激しく波打っていた。

イベリスは血で張り付いたりビエラの服を丁寧に脱がした。

真っ白の裸身にいくつもの深い傷が走り、そこからまだ出血が続いていた。

手当てをすることもなく、イベリスはしなやかな指で、ゆっくりかすめるようにビエラの血に触れた。

ビエラの血……

イベリスの心臓が高鳴った。

この血が愛しいリビエラの内部を流れ続けていた。

リビエラを鼓動させる内臓を巡り、自分を何より酔わせるリビエラのあらゆる体液を作り出す。

そして自分に抱かれたリビエラの肌を何度もピンクに上気させたのはこの血だ…

イベリスクの背中がカッと熱くなった。

この血が出る時、リビエラは痛む…

自分が欲望のままに激しく抱いた時のように…

イベリスクの髪が一気に汗に濡れた。

リビーの命に関わる体液よ、もっと溢れろ…

私にリビーの命と痛みを見せつけろ…

イベリスクはリビエラの傷口をえぐるように爪を立てた。

血と肉の感触が全身を突き上げ、イベリスクは恍惚感で頭がぐらぐらした。

服の下で勃起したイベリスクの男根から精液が溢れ、足を伝い滴り落ちた。

「痛い、イベリス…」

リビエラが呻いた。

イベリスは優しくリビエラの血を舐めた。

血の味が舌を伝い、自分の身体の一部となったことをイベリスは感じた。

その途端、リビエラの血の巡る全ての臓器の感触がイベリスの意識に強烈に迫り来た。

リビエラの鼓動する心臓。

近くで感じた吐息を作り出した肺。

かつて倒錯した性交でイベリスクの分泌物を受け入れた胃。

リビエラを生かすために躍動する肝臓…脾臓…

腎臓…小腸…大腸…

歪んだ愛しさで張り裂けそうだった。

イベリスクは想像だけで、リビエラの内臓の感触を下半身でむさぼった。

足がガクガク震え、波のように何度も来る絶頂に、ボタボタと精液が床に落ちた。

イベリスクはリビエラの命を犯すかのようにその身体を噛み、湧き

出る血を舐め続けた。

その足元は尿失禁でもしたかのように、多量の精液が床を汚していた。

「痛い…イベリス、やめろ…」

リビエラが身をよじって抵抗した。

イベリスは静かにベッドの上のリビエラに覆い被さった。

リビエラの両腕を押さえつけてイベリスは言った。

「私を見る、リビー」

リビエラは苦しそうにイベリスを見た。

その目には涙がたまっていた。

「イベリス…すまない…私は…」

「…かまわない。私はお前のどんな形の欲望も受け入れる。望むままに叫び、求めるがいい」

リビエラは泣いた。

「イベリス：私はサクが恋しい：！：！」

「なら求めろ」

リビエラは涙で潤む瞳でイベリスくを見上げた。

我慢できずにリビエラは泣き叫んでイベリスくにすがりついた。

リビエラの身体がサクを欲して男性性に変わった。

イベリスくはリビエラの男根の根元をつかみ、優しくキスをした。

感度が高まっているリビエラの身体がビクッと跳ねた。

「愛してる、リビー」

あのイベリスクがまるで女になったかのようにリビエラに丁寧に奉仕し始めた。

その従属的な姿は、清楚な少女が愛する男の前だけで見せる、汚いまでに淫乱な姿のような意外さだった。

「イカせないで、イベリス…。私は…怖いんだ…！」

震える声でリビエラが囁いた。

イベリスクは目を閉じ、眉根を寄せて、全霊でリビエラの男根を味わい、愛撫した。

「やめろ……サク…サク…!!」

リビエラに押し寄せる興奮の中にはサクがいた。

サクが笑っている。

自分の腕の中で喘いでいる。

リビエラがサクの名を叫び、サクの名の下に喘げば喘ぐほどイベリスクは、舌で、唾液で、歯で、繊細に強引にリビエラを陵辱した。

「だめだ、イベリス!! やめろ!!」

リビエラはイベリスクを見た。

首筋に汗を滴らせ、その必死な姿の中にリビエラは何故か、イベリスクの深い悲しみを見た気がした。

身体を焼き尽くされるような熱さと共に、リビエラはイベリスクが強烈に愛しくなった。

リビエラは激しく悲鳴を上げた。

イベリスクの口の中をリビエラの精液が満たしていった。

リビエラは息を切らしながらも涙が止まらなかった。

イベリスクはリビエラの唇にそっとキスをした。

「ようやく私を見てくれたな」

イベリスクは無表情だったが、その言い方はどこことなく寂しそうだ
った。

「お前は絶頂の後の感覚が嫌いだったな。大丈夫…か？」

リビエラはイベリスクの優しさに切なくなり、身体を丸め、イベリスクに背中を向けた。

イベリスクがリビエラの肩に触れた。

「リビー」

リビエラの背中に無感情に指を滑らせながらイベリスクが言った。

「こっちを向いてくれ。」

私を見ろ、リビー。醜いほどお前を愛している私を」

リビエラは泣きながら言った。

「私を…許してくれるのか…」

イベリスクはリビエラを後ろから抱きしめた。

「望むままに乱れるがいい。

葛藤する姿を私に見せつけろ。

迷い、悲しみ、永遠に私を魅了しろ…！」

リビエラは心地よい切なさに満たされた心の中で、イベリスクの名を何度となく呼んだ。

身体が一瞬にして弾けるように女に変わった。

リビエラはイベリスクの首をつかみ、ベットにその身体を叩きつけた。

イベリスクのローブを引き裂き、リビエラは滅茶苦茶にイベリスクの身体を愛撫した。

イベリスクは目を見開いてリビエラを凝視した。

その身体は少し震えていた。

顔は喜びを表現できず、ただただ上気していった。

リビエラはすぐにイベリスクの勃起した男根に乱暴に腰を落とした。

「あああああ！！！」

リビエラはひきつけを起こしたように痙攣し、悦びに叫び、泣いた。

腰が碎けるほど何度も上下させ、イベリスクを中でイカせたあと、リビエラはイベリスクに囁いた。

「私の全てを愛してくれ…」

リビエラとイベリスクは互いに形の違う切なさの中で、何日も何日も愛し合った。

リビエラはイベリスクの愛ある陵辱の快感に何度も泣かされた。

イベリスクはリビエラが自分の腕の中にいることへの激しい歓喜に、何度も崩壊しそうになった。

この二人は生まれた時から『夫婦』だった。

二人の中に内在する残酷な衝動も、互いがいれば癒された。

永遠にこんな時が続くと思われた。

しかし神界グレイシス・グロリアスとインフェルノを巻き込んだ運命の波が、この二人をも残酷に押し流していくことになる。

第三十二話 救うべきはお前

第三十二話 救うべきはお前

カイルはセレイラの図書館を出た後、新たな神界の中心世界になったスターテストの世界でさまよっていた。

泣きながらふらふらと壁にぶつかり、倒れそうになりながら歩いた。

その横を普通の神々が異様なものを見る目でカイルを見ながら通り過ぎた。

神達は皆、崩壊状態で歩いているのが、他ならぬ神王だと知っていた。

だからこそ誰も救いの手を差し伸べなかった。

神界の密かな常識で、神王というのは多かれ少なかれ『気が触れている者』として認識されていた。

神界で一番危険なのは崩壊状態の神王である。

傷ついた神の子どもはそういう時、何をするか分からなかった。

神達は、普通の神がつらそうに歩いていれば救いの手を差し伸べただろうが、神王相手にはまさに『さわらぬ神にたたりなし』である。

カイルは道端にうなだれて座り込んだ。

そして壁に寄りかかり、ズルズルと行き倒れのように、そのまま地面に寝そべった。

ゼロがカイルを優しく愛撫したのは、早くカイルを満足させて眠らせてから、インフェルノのサクを見守りたかったからだ。

その事実の残酷さにカイルはゾツとした。

ゼロの与える極上の愛と快楽は偽物だということは何となく分かっていた。

ゼロはカイルに対して完璧すぎた。

不器用さや、必死さがまるでなかった。

それゆえカイルは不安になり、かき乱され、不器用に、必死にならざるを得なかった。

ゼロに何をされた訳でも、何かを聞いたわけでもなかったが、カイルはやがて静かな確信を持ってゼロから愛されていないということを経験の中に受け入れるに至った。

本当に何があったわけでもない。

しかしそうしなければ漠然とした不安が与える耐え難い絶望を消すことができなかった。

カイルはそれでもゼロを拒絶することができなかった。
どうしようもなくゼロを必要としていた。

ゼロと重なり、カイルがゼロを求めれば求めるほど、ゼロの心はサクとの邂逅への希望で満たされていたのだ。

ゼロにとって神王からの愛は、全てサクへ向かう踏み台でしかなかった。

そしてサクがゼロの元へ転生し、ゼロは神王から解放された。

カイルを捨てて…

カイルの憎しみが爆発した。

性的な渴望のように強く、カイルは今、誰かから何かを奪いたかった。

スターテストの世界に暗雲が立ち込め始めた。

カイルはしゃくり上げながら小さく嗚咽を漏らした。
流れる涙がこめかみを伝い、髪を濡らした。

目を半眼に開き、カイルはゆっくりまばたきをした。

その静かな動きとは裏腹に、カイルの憎悪は確実にとぐろを巻いて
暗雲に吸い込まれていった。

地を低く轟かす音が中心世界に響き渡った。

神々が何事かと上空を見上げた。

ザーツという音がして『黒い雨』が降ってきた。

しかしその『雨』は液体ではなかった。

スターテストの広大な世界を、一部の隙もなくカイルの神の拘束具
が降り注いだ。

暗雲に見えたものは巨大な、釘の集合体だった。

外にいた者は逃げる間もなく、全身に拘束具が刺さった。

釘はカイルの命令で、生きているかのようにゆっくり刺さった者の肉をかき回していった。

あちこちで神達が激痛に絶叫していた。

さながら阿鼻叫喚の地獄の光景だった。

釘はカイルの身体にも次々と刺さった。

釘がその肉を引き裂き始めると、カイルは空気を胸一杯に吸うように肩を震わせ、息を吸った。

その肉体がまるで性感を味わうように、激痛を味わっていた。

しばらくして『釘の雨』が止んだ。

しかし神々を襲う激痛はまだ続いていた。

上空からカイルの元に飛んでくる一団があった。

彼らはカイルの近くに降り立ち、その中の凛々しい女神がカイルに駆け寄った。

「カイル！どうしたのだ！」

スターテストだった。

カイルはまた怒られると思ったが、身構える気力さえなかった。

しかしスターテストはカイルを抱き起こし、呆然とした顔でカイルの顔にかかった髪を優しくかきあげた。

「こんなになって…これほどのことをして…一体お前の心に何があったというのだ」

カイルは少し驚いた顔でスターテストを見た。

スターテストは物憂い目でカイルを見つめていた。

「大丈夫か？痛いだろう。早く拘束具を抜きなさい…」
スターテストはカイルに刺さった釘を引っ張って抜こうとした。

「何やってんの…スターテストらしくないね…。」

カイルが震えながら笑った。

「そうだな…しかし放っておけない」
スターテストも笑った。

カイルは釘が刺さったまま身体を起こした。

心配そうに自分を見つめるスターテストの暖かな目線に、カイルは泣きそうになった。

しばらくの間、二人は見つめ合った。

カイルの目から涙が落ちた。

カイルはスターテストにゆっくり抱きついた。

スターテストは笑って、カイルを優しく抱きしめた。

「元気を出しなさい」

カイルはかすれた喉でむせび泣いた。

心が再生し始め、麻痺して感じなかった激痛が再び激痛としてカイルを襲った。

カイルはスターテストのふくよかな胸に顔をうずめた。

その優しい感触が死ぬほど心地よかった。

カイルは、もう何もいらなと思った。

全ての、神の拘束具が抜けていった。

そのままカイルは意識を失った。

スターテストがカイルを抱きしめたまま、共にカイルの所まで来た男神達にきびきび指図をした。

「お前たちはこの世界に散って、神の拘束具を受けた神々を見てやってくれ。痛みは消えたかも知れんが皆まだショック状態だろう。私は神王を休ませる所に連れていく。」

男神達はスターテストに敬礼し、再び飛び立った。

スターテストはカイルをおぶると大聖堂に向かって飛んだ。

大聖堂に着くと、スターテストは不本意であったがカイルを自分の寝室に連れていくことにした。

ここで一番豪勢なのはそこだったし、神王を自分以下の扱いにする訳にはいかなかったからだ。

寢室のベットにカイルを丁寧の下ろし、スターテスタはしみじみとカイルの身体を見つめた。

カイルを背負った時、驚くほど軽かった。

こうして改めて身体を見ると、カイルはあまりにも華奢で細かった。

この身体がああ重い心を背負い、見えざる神々の器となる苦しみを一心に受けているのだ。

スターテスタはカイルに布団をかけた。

そのままスターテスタは椅子を引き寄せカイルの横に座った。

そして足の上に両手を組み合わせ静かに目を閉じた。

スターテスタはインフェルノにいた時よく、動揺を感じると心を静めるために神に祈っていた。

自分が神になった今、何もできなかったがスターテスタはカイルのために祈った。

『私と、そして全ての魂が、いつかカイルを救うことがありますよ
う…』

「スターテスト？」

カイルが目を覚ましていた。

「寝てたの？」

「いや…」

スターテストはカイルに微笑んだ。

「調子はどうだ？」

カイルはスターテストをじっと見た。
そしておもむろに言った。

「いって言ったら行っちゃうの？」

スターテストは目を見開いた。

カイルがスターテストの方に身体を向けて、その服を握りしめた。必死さのあまりカイルの呼吸が浅くなった。

「お願い、行かないで…ボクがいつて言うまでそばにいて…！そんなに…そんなに長くないから…」

カイルの歯噛みするような寂しさを感じて、スターテストは切なくなった。

スターテストは自分の服を握るカイルの手の甲を撫でた。

「安心なさい。望むなら永遠でも一緒にいよう。でもそれは嫌だろう？」

カイルは笑いはしなかったが、嬉しそうにスターテストの手を握りしめて、そのまま布団にもぐり込んだ。

カイルは布団から目だけを出して、子供のようにスターテストを上

目使いで見た。

「ねえ、このベットいつもスターテストが使ってるの？」

「そうだよ」

カイルの目がにっこり笑った。

そしてもぞもぞと布団を身体に巻き付けた。

カイルは幸せそうだった。

「あったかいね」

スターテストは微笑んだが、心の中は悲しみでいっぱいだった。

何て痛々しいんだろう…

「ねえ、もっとそばに来て。ボクの顔の横に来て」

スターテストはカイルの顔の横まで椅子をずらした。

カイルはスターテストの手をまさぐり、再びその手を握りしめた。

「スターテスト」

「何だ？」

「うん…」

カイルは、質問があるが、言おうか迷っているような感じだった。聞きたいが、その答えが自分の望むものではなかったら、その恐怖でカイルはしばらく黙っていた。

やおらカイルが言った。

「ねえ、スターテスト。きみがボクに優しくしてくれるのは、ボクが神王だからとかじゃないよね？」

さつきも怒らないでボクを抱きしめてくれたのは、手早くボクを落ち着かせて、みんなに刺さった神の拘束具を早く抜かせるためにしたこととかじゃないよね？

本当にボクを…心配してくれたんだよね？」

スターテストは絶望のあまりめまいがした。

神界にいながらこの者は地獄に堕ちている。

これほどの寂しさと混乱の中であって、必死で愛されることにすがり、しかしいつもそれが得られた実感がない。

スターテスタは涙が出そうになった。

しかし泣くわけにはいかない。

カイルの孤独を認めることになる。

スターテスタは自分の悲しみに喝を入れるためにも必死で微笑んだ。

「心配するな、カイル。お前の心を利用したりしない。あの時、上空からたくさんのお神が苦しんでいるのが見えた。しかしお前を見た時、私にはお前が本当に死んでいるように見えた。激痛があるはずなのに微動だにしない。

そしてお前が目をちゃんと開けてくれた時悟ったのだ。お前には激痛を感じなくなるほどの強い絶望があるのだと。

救うべきは激痛を感じる余裕のある者達ではなくお前なのだとな。」

カイルは何も言わず、スターテスタから目をそらし、ガバツと布団を頭までかぶった。

布団の中からもごもごと声が聞こえた。

「ねえ、秘密を聞きたい？」

「話したいなら」

カイルは布団から顔を出した。
目が涙に濡れていた。

しかしその瞳には再び荒々しい憎悪が宿っていた。

「ボクはゼロを殺す」

「ゼロか…」

スターテストが皮肉そうに笑った。

「私はここに来てかなり経つ。神王も何人か変わったが、そのいずれもがゼロのことで深く傷つき、神界で大騒動を起こしている。ゼロが心から愛してくれないとわめいてな。お前もそのクチか？」

「だったらどうだというんだ？」
カイルが激しく言った。

「スターテスト、何か知らない？神、殺す方法。ボクに協力してよ」
カイルは上気して微笑んだ。

スターテストは再び自分が悲しんでいることにぼんやり気づいた。
無邪気な寂しがり屋からこうもコロリと、衝動にまかせて残酷になる。

カイルはやはり色んな意味で『神王』なのだ。

スターテストは腹を決めた。
一人の神として、神の子カイルに捧げつくそう。

「誰も成功したことはない。しかし全ての神殺しの始まりはここから、ということなら知っている」

「何？」

「命の女神アメイゼ、彼女を殺すことだ」

「殺す？」

カイルとスターテストがそれぞれの想いを胸に、互いを凝視した。

第三十三話 命の激怒

第三十三話 命の激怒

「殺す？」

カイルがもう一度聞いた。

「だって神はそもそも…。」

それによく分かんないけど、命の女神ってボクの世界に住む、見えざる神なんじゃないの？」

「そうだ。しかし、どうやら彼女は『死ぬ』ことがあるらしい。

そして、ここが肝心なんだが全ての神の不死の命を支えているのは彼女の命そのものらしいんだ。

彼女の命を奪うことで我々は不滅ではなくなる。」

カイルはスターテストを凝視した。

「全ては伝説だ。こんな話が流れても、今もって神が不滅なのがい例だ」

「でも全ての神殺しの始まりはそこから…か」

スターテスタはカイルを眺めた。

カイルの目には先程までにはなかった、強い生命力が宿っていた。

これで良かったのだろうか、という思いがスターテスタの頭をよぎった。

何億年もの神界の歴史の中で闇の王インフェルノ以外だれも成功したことのない神殺しを、カイルが成し遂げるとは思えなかった。

しかし心のどこかでスターテスタは恐れた。

カイルは今までの神王や普通の神々とは少し毛色が違っていた。

感受性が強く不完全で、その不器用さは官能的ですらあった。

カイルは『普通』ではない。

大抵はこういう者が死に物狂いの情熱をもって、歴史を変えるようなことをする。

「カイル…」

スターテスタは憂いを含んだ声でカイルを呼んだ。

しかしカイルの心はもう次のことへ向かって進んでいた。

「ありがと、スターテスト！ボク、自分の世界に行ってくる！」

嬉しそうにそう言ったあとに、カイルは少し遠慮がちにスターテストを見た。

「ここから行ってもいい？」

スターテストはカイルを見た。

「抜け殻になったボクの身体、スターテストに守ってほしい。ボクが自分の世界にいる時、ちゃんと出来るようにそばで祈ってて。ボクがまた戻ってきた時、ここにいて…また抱きしめて」

カイルは少し涙ぐんでスターテストを真剣に見た。

「ああ」

スターテスタは優しく笑った。

カイルとスターテスタは母子のように抱き合い、カイルはその腕の中で意識を失って、自分の世界に戻っていった。

自分の世界に住む神々とほとんど交流のないカイルは『命の女神アメイゼ』がどんな外見でどこに住んでいるのか知らなかった。

カイルは足下にいる司天地五神と呼ばれる見えざる神々の中でも最高位の神達をチラリと見た。

相変わらず彼らはカイルがその場にいないかのように振る舞っていた。

いつもならそんな事は全く気にならないのだが、スターテストの優しさに慣れ始めていたカイルは五神の態度に少し傷ついた。

カイルはいたたまれなくなり、早足で自分の分身のいる小部屋に入った。

何をしていいのか分からなかった。

カイルは少し考えようと思い、かべに寄りかかって座った。

しばらくの間、カイルは色々考えを巡らせていた。

しかし何となく集中できなかった。

カイルは自分の服の中に手を入れ、身体を撫でた。

こんな時に何だが、性欲が高まってくるのを感じた。

もうしばらくまともな性交をしていなかった。

毎日のようにゼロとヤッていた時は、渴くことがなかったので、こんなに身体が無性にうずくことはなかった。

一人になってぼんやりしていると、自分の舌や指や脚が強烈に官能を欲するのを感じた。

ゼロとサクってどんな風にやるんだろう…

カイルは真っ赤に濡れた舌で指を舐めた。

ゼロのしなやかな指がサクの性器に入る。

ゼロがサクの内部のぬめりを感じる…

二人の性交を想像した時、カイルはゼロの興奮もサクの快楽も、その場の空気も、全てを身体に感じた。

カイルの身体が女性性に変化し始めた。

胸がいつもより大きくふくらみ、薄緑の血管が浮いていた。

「あああっ…」

カイルは胸が痛いほど張る感覚に、思わず喘ぎ声を上げた。

唇から流れた一筋の唾液が胸に落ちた。

カイルは目を閉じ、最初に肛門を愛撫した。

快感で気持ちが高まってくるのを感じ、カイルは女性器に指を入れて、興奮で中で勃起している突起に爪を立て刺激し始めた。

女の自分の身を包む痺れと鼓動が、カイルにサクの身体の感触を思い出させた。

自分がサクを愛撫する。

そしてサクが今自分が感じている快感を、その身に感じる…

そうして反応するサクを想像した途端、壊れそうになるほどの激しい切なさに、カイルの目から涙があふれた。

カイルは猛烈にヒトの身体が欲しくなり、小部屋にいる自分の分身の一人を泣きながら押し倒した。

腰にまたがり、カイルは自分の分身の身体の中で男根の代わりになる部所はないか探した。

分身には完全に性器はないからだ。

カイルはその細く、美しい手首に目をやった。

カイルは自分の髪をまとめている紐をゆっくり外した。

次の瞬間、ゆらりと長い髪が揺れ、カイルの手刀が分身の手首に振り下ろされた。

まるで斧で叩き落とすかのような、ドンッという音がして分身の身体が跳ね、手のひらが切り落とされて血が吹き出した。

途端に、司天地五神に分身が喰われている時のような身体を生きたままバラバラにされる痛みと絶望が生身のカイルを襲った。

カイルは激しく震える手で、血の吹き出す分身の手首をつかみ、そのまま自分の性器に勢いよく挿入した。

カイルは目をぎゅっとなつむり歯を食いしばった。

吹き出す血がカイルの内部を濡らし、男根より少し太い自分の分身の腕が、膣を押し広げて入っていった。

胸が高鳴り、カイルは心地よいめまいの中微笑んで泣いた。

まるで自傷に走っているかのように激しく、カイルは分身の手首で自分の奥を突いた。

金髪が汗で身体にはり付いたカイルの姿は、脚の生えた人魚姫が自慰の快楽に溺れているようだった。

快感のあまり頭がおかしくなりかけながらカイルはあえぎながら笑った。

「あははっ…ん…ふふ……」

カイルは強く腰を上下し、内部の性感がイき始めたのを感じた。

性器の内部が軽く痙攣し、カイルはぎゅっと目を閉じて絶頂の衝撃にそなえた。

うなだれて少し横を向いた時だった。

カイルは扉の方に誰かがたたずんでいるを見た。

カイルとその者の目が合った。

「うわあああ!!」

驚きのあまりカイルは叫び声を上げ、立ち上がろうとした。
しかし身体に残る快楽に脚がガクガクして、膝をついた。

カイルはほとんど脱げている服をかき集めるように直し、その人物を見た。

とても醜い裸の少女だった。

全身に肉を荒らされたかのような深い傷跡があり、顔も酸によって溶けたように歪んでいた。

カイルは恥ずかしさにほてってくる顔を隠しながら少女に問いかけた。

「だ…誰、きみ？ い…いつからいたの？」

少女の唇のないグロテスクな口が動いた。

「お前が腕を自分の身体に『刺し込んで』そのあと、腰をすごい振ってるの見た」

自分の乱痴気を密かに見られた上に、それを冷静に説明されることは、こうも屈辱的なものとカイルは絶望的な気分になった。

カイルはなるべく気にしていないかのように無表情を取り繕い、髪を束ねながら立ち上がった。

「何か用？」

少女は答えなかった。

カイルは不思議そうに少女を見た。

この少女に何故かカイルは自分と同じ匂いを感じた。

「きみ、見えざる神なの？」

少女は肩をすくめるとも、うなずくともつかない仕草をした。

「お前、アメイゼを呼んだ。ここはお前の世界。

例え見えざる神でも、お前が会いたいと望めば会いに来る。それ掟。知らなかったか？」

「え…：知らなかった…：ってことはきみはアメイゼなの？」

少女はカイルを凝視していた。

そして言った。

「アメイゼの所に案内する」

少女はカイルを振り返ることもなく歩き出した。

カイルは少し焦り気味に少女のあとを追ひ、横に並んだ。

「きみ、アメイゼの付き人みたいな子なの？アメイゼってどんな人？」

少女は黙っていた。

二人は割れた鏡に映る神々の前を歩き続けた。

カイルはずっと醜い少女を見続けていた。

何だかこの子が好きだった。

やおらカイルが聞いた。

「その傷、もしかしてアメイゼにやられたの？」

少女はまた、うなずくとも肩をすくめるともつかない仕草をした。

しばらく黙ったあと少女が聞いた。

「何故アメイゼに会いたい？」

カイルは言葉に詰まった。

「うん…」

「神殺し？」

少女がカイルを見ることもなく軽く聞いた。

カイルが気まずそうに少女を見た。

「どうして…」

「ついたよ、神王」

表情が分からないほど歪んでしまっている顔をカイルに向けて、少女が言った。

カイルの目の前に誰も映っていない鏡があった。

そこには呆然としているカイルと、その後ろに少女が映っていた。

「命の女神アメイゼは見えざる神々の中で一番新しい神だ。
光の女神グレイシス・グロリアスが死ぬ間に産み落とした」

カイルは鏡に映る少女を凝視した。

少女は淡々と話し続けた。

「グレイシス・グロリアスが生きていた時は彼女の命そのものが、
神々の不滅を保っていた。

彼女が死んだあと、神々の不滅の命を支えるために、命の女神アメイゼは誕生したのだ」

少女がカイルの後ろで『笑った』。

その笑みの醜さは恐ろしかった。

異様な形相が凄まじい殺気と激烈な怒気を放ち、カイルを突き刺した。

カイルは理解した。

この子が…アメイゼだ……

そう思った瞬間、アメイゼがカイルの背中を蹴った。

素足のはずなのにその力はものすごかった。

バキッと音がしてカイルの背骨が破壊された。

カイルはそのまま前のめりに倒れ、鏡の中に吸い込まれた。

アメイゼの世界を見るひまもなく、ありえない痛みがカイルを襲った。

神の拘束具でも、自分の分身を傷つけたわけでもない。

それなのにアメイゼの世界に入った途端に、背骨が破壊された時の激痛で、カイルは激しく痙攣し、大量の生唾を吐いた。

眼球が震えるように上下に回転し、カイルが意識を失いかけたその時、アメイゼの第二打が頭に来た。

「昇天なんてさせない。
ずっと起きて痛め！！

私の命を下らない理由で奪おうとする神王共！！
自身の盲愛によって血迷い、勝手な殺意から神殺しのために何度も何度も何人もの神王が私の命を奪おうとした。
私を騙し、犯し、自殺させるよう仕向け、それでも無理だと知ると私を殺すためにあらゆる方法で私の肉体を痛めつけた。
その結果がこの姿だ！！」

カイルは震えながら目を見開いてアメイゼを見た。

「この姿はもう元には戻らない。神王がそういう風にした。
でもそれでいいと思ってる。」

これは私自身へのいましめだ。
神王のすること全てを憎むための。だまされないための。
さあお前はどやって私を殺す？
情も痛みも私には通用しないよ。」

アメイゼがまた笑った。

不思議と真実を聞かされたカイルはその笑みが全く怖くなくなった。

「私の心の世界は神王への復讐のための世界だ。

神殺しの名の下に寄ってきたハエをグチャグチャに潰すためのね。

ここではちゃんと痛みを感じるでしょ。

ようこそ、神王。我が楽園へ」

カイルは少しぼうつとしながらアメイゼの世界を見回した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1105y/>

天地百人神話

2011年12月3日12時57分発行